

門

夏目漱石



門

宗助そうすけは先刻さつきから縁側えんがわへ坐蒲団ざぶとんを持ち出して、日当りの好きそうな所へ気楽に胡坐あぐらをかいて見たが、やがて手に持つている雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。秋日和あきびよりと名のつくほどの上天気なので、往來を行く人の下駄げたの響が、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。肱枕ひじまくらをして軒から上を見上げると、奇麗きれいな空が一面に蒼あおく澄んでいる。その空が自分の寝ている縁側の、窮屈な寸法に較くらべて見ると、非常に広大である。たまの日曜にこうして緩ゆるくり空を見るだけでもだいぶ違うなと思ひながら、眉まゆを寄せて、ぎらぎらする目をしばらく見つめていたが、眩まぼしくなつたので、今度はぐるりと寝返りをして障子しょうじの方を向いた。障子の中では細君しづとが裁縫しやうとをしている。

「おい、好い天氣だな」と話しかけた。細君は、

「ええ」と云つたなりであつた。宗助も別に話がしたい訳でもなかつたと見えて、それなり黙つてしまつた。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちつと散歩でもしていらつしやい」と云つた。しかしその時は宗助がただうんと云う生返事なまへんじを返したただけであつた。

二三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寝のぞている夫の姿を覗いて見た。夫はどう云う了見りようけんか両膝りようひざを曲げて海老えびのように窮屈きうくつになつてゐる。そうして両手を組み合あわして、その中へ黒い頭を突つ込んでゐるから、肱ひじに挟はさまれて顔がちつとも見えない。

「あなたそんな所へ寝ると風邪かぜ引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京のような、東京でないような、現代の女学生

に共通な一種の調子を持つている。

宗助は両脇の中で大きな眼をぱちぱちさせながら、

「寝やせん、大丈夫だ」と小声で答えた。

それからまた静かになった。外を通る護謨車ゴムぐるまのベルの音が二

三度鳴った後あとから、遠くで鶏の時音ときをつくる声が聞えた。宗助

は仕立したておろしの紡績織ぼうせきおりの背中へ、自然じねんと浸み込んで来る光線の

暖味あたたかみを、襯衣シャツの下で貪むさぼるほど味あじわいながら、表の音を聴きくとも

なく聴いていたが、急に思い出したように、障子越しの細君を

呼んで、

「御米およね、近来きんらいの近きんの字はどう書いたつけね」と尋ねた。細君は

別に呆あきれた様子もなく、若い女に特有なけたたましい笑声も立

てず、

「近江おうみのおうの字じゃなくって」と答えた。

「その近江おうみのおうの字が分らないんだ」

細君は立て切った障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指ものさしを出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしょう」と云ったぎり、物指の先を、字の留った所へ置いたなり、澄み渡った空を一しきり眺めなが入った。宗助は細君の顔も見ずに、

「やつぱりそうか」と云ったが、冗談じやうだんでもなかったと見えて、別に笑もしなかった。細君も近の字はまるで気にならない様子で、
「本当に好い御天気だわね」と半ばなか独り言ひとごとのように云いながら、障子を開けたまままた裁縫しでとを始めた。すると宗助は肱で挟んだ頭を少し擡もたげて、

「どうも字と云うものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。
「なぜ」

「なぜつて、いくら容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。この間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちゃんと書いて見て、じつと眺めてみると、何だか違つたような気がする。しまいには見れば見るほど今らしくなくなつて来る。——御前おまいそんな事を経験した事はないかい」

「まさか」

「おれだけかな」と宗助は頭へ手を当てた。

「あなたどうかしていらつしやるのよ」

「やつぱり神経衰弱のせいかも知れない」

「そうよ」と細君は夫の顔を見た。夫はようやく立ち上つた。

針箱と糸屑いとくずの上を飛び越すように跨またいで、茶の間の襖ふすまを開け

ると、すぐ座敷である。南が玄関で塞ふさがれているので、突き当

りの障子が、日向ひなたから急に這入はいつて来た眸ひとみには、うそ寒く映つ

た。そこを開けると、ひさし廂に逼るような勾配の崖が、縁鼻から聳そびえているので、朝の内は当って然しかるべきはずの日も容易に影を落さない。崖には草が生えている。下からして一側も石で畳んでないから、いつ壊れるか分らない虞おそれがあるのだけれども、不思議にまだ壊れた事がないそうで、そのためか家主も長い間昔のままにして放つてある。もつとも元は一面の竹藪たけやぶだったとかで、それを切り開く時に根だけは掘り返さずに土堤の中に埋めて置いたから、地は存外緊しまつていますからねと、町内に二十年も住んでいる八百屋の爺おやじが勝手口でわざわざ説明してくれた事がある。その時宗助はだつて根が残っていれば、また竹が生えて藪になりそうなものじゃないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、ああ切り開かれて見ると、そう甘く行くもんじゃありませんよ。しかし崖だけは大丈夫です。どんな事があつたつ

て壊えつこはねえんだからと、あたかも自分のものを弁護でもするよう^{りき}に力んで帰って行つた。

崖は秋に入つても別に色づく様子もない。ただ青い草の匂^{におい}が褪^さめて、不揃^{ぶそろ}にもじやもじやするばかりである。薄^{すすき}だの蔦^{つた}だのと云う洒落^{しゃれ}たものに至つてはさらに見当らない。その代り昔の名残^{なご}りの孟宗^{もうそう}が中途に二本、上の方に三本ほどすつくりと立っている。それが多少黄に染まつて、幹に日の射^さすときなぞは、軒から首を出すと、土手の上に秋の暖味^{あたかみ}を眺^{なが}められるような心持^こがする。宗助は朝出て四時過^{ひま}に帰る男だから、日の詰^{つま}まるころ頃は、滅多^{めった}に崖の上を覗^{のぞ}く暇^{ひま}を有^もたなかつた。暗い便所から出て、手水鉢^{ちようずばち}の水を手^てに受けながら、ふと廂^{ひさし}の外を見上げた時、始めて竹の事を思い出した。幹の頂^{いただき}に濃かな葉が集まつて、まるで坊主頭^{ぼうずあたま}のように見える。それが秋の日に酔つて重く下を向

いて、寂^{ひつ}そりと重^{おも}なつた葉が一枚も動かない。

宗助は障子を閉^たてて座敷へ歸つて、机の前へ坐つた。座敷とは云いながら客を通すからそう名づけるまでで、実は書齋とか居間とか云う方が穩当である。北側に床^{とこ}があるので、申訳のために変な軸^{じく}を掛けて、その前に朱泥^{しゅでい}の色をした拙^{せつ}な花活^{はなけ}が飾つてある。欄間^{らんま}には額^{がく}も何もない。ただ真鍮^{しんちゆう}の折釘^{おれくぎ}だけが二本光つている。その他には硝子戸^{ガラスど}の張つた書棚が一つある。けれども中には別にこれと云つて目立つほどの立派なものも這入つていない。

宗助は銀金具^{ぎんかなぐ}の付いた机^{ひきだし}の抽出を開けてしきりに中を検^{しら}べ出したが、別に何も見つけ出さないうちに、はたりと締^{あきら}めてしまつた。それから硯箱^{すずりばこ}の蓋^{ふた}を取つて、手紙を書き始めた。一本書いて封をして、ちよつと考えたが、

「おい、佐伯さえきのうちなかくろくばんちょうは中六番町何番地だったかね」と襖越ごじに細君に聞いた。

「二十五番地じゃなくって」と細君は答えたが、宗助が名宛を書き終る頃になつて、

「手紙じゃ駄目よ、行つてよく話をして来なくっちゃ」と付け加えた。

「まあ、駄目までも手紙を一本出しておこう。それでいけなかつたら出掛けるとするさ」と云い切つたが、細君が返事をしないので、

「ねえ、おい、それで好いだろう」と念を押した。

細君は悪いとも云い兼ねたと見えて、その上争いもしなかつた。宗助は郵便を持ったまま、座敷から直すぐ玄関に出た。細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立つたが、これは茶の間の縁伝えんづた

いに玄関に出た。

「ちよつと散歩に行つて来るよ」

「行つていらつしやい」と細君は微笑しながら答えた。

三十分ばかりして格子こうしががらりと開いたので、御米はまた裁縫しづと

の手をやめて、縁伝いに玄関へ出て見ると、帰つたと思う宗助

の代りに、高等学校の制帽を被かぶつた、弟の小六ころくが這入はいつて来た。

袴はかまの裾すそが五六寸しか出ないくらいの長い黒羅紗くろらしやのマントの釦ボタンを

外はずしながら、

「暑い」と云っている。

「だつて余あんまりだわ。この御天氣にそんな厚いものを着て出る

なんて」

「何、日が暮れたら寒いだろうと思つて」と小六は云訳いいわけを半分

しながら、嫂あによめの後に跟あといて、茶の間へ通つたが、縫い掛けてあ

る着物へ眼を着けて、

「相変らず精が出ますね」と云つたなり、長火鉢ながひばちの前へ胡坐あぐらをかいた。嫂は裁縫すみを隅の方へ押しやつておいて、小六の向むこうへ来て、ちよつと鉄瓶てつびんをおろして炭を継つぎ始めた。

「御茶ならたくさんです」と小六が云つた。

「厭いや？」と女学生流に念を押した御米は、

「じゃ御菓子は」と云つて笑いかけた。

「あるんですか」と小六が聞いた。

「いいえ、無いの」と正直に答えたが、思い出したように、「待つてちようだい、あるかも知れないわ」と云いながら立ち上がる拍子ひょうしに、横にあつた炭取を取り退のけて、袋戸棚ふくろとだなを開けた。小六は御米の後姿うしろすがたの、羽織はおりが帯で高くなつた辺あたりを眺ながめていた。何を探さがすのだかなかなか手間てまが取れそうなので、

「じゃ御菓子も廃^よしにしましょう。それよりか、今日は兄さんはどうしました」と聞いた。

「兄さんは今ちよいと」と後向のまま答えて、御米はやはり戸棚の中を探している。やがてぱたりと戸を締めて、

「駄目よ。いつの間^まにか兄さんがみんな食べてしまった」と云いながら、また火鉢^{むこ}の向^{むこ}へ帰つて来た。

「じゃ晩に何か御馳走^{ごちそう}なさい」

「ええしてよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。御米は「四時、五時、六時」と時間^{かんじよう}を勘定した。小六は黙つて嫂の顔を見ていた。彼は實際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかつたのである。

「姉さん、兄さんは佐伯^{さえぎ}へ行つてくれたんですかね」と聞いた。「この間から行く行^くつて云つてゐる事は云つてゐるのよ。だけど、

兄さんも朝出て夕方に帰るんでしよう。帰ると草臥くたびれちまつて、御湯に行くのも大儀そうなんですもの。だから、そう責めるのも實際御氣の毒よ」

「そりや兄さんも忙がしいには違なからうけれども、僕もあれがきまらないと気がかりで落ちついて勉強もできないんだから」と云いながら、小六は真鍮しんちゆうの火箸ひばしを取つて火鉢の灰の中へ何かしきりに書き出した。御米はその動く火箸の先を見ていた。

「だから先刻手紙さつきを出しておいたのよ」と慰めるように云つた。

「何て」

「そりや私わたしもつい見なかつたの。けれども、きつとあの相談よ。今に兄さんが帰つて来たら聞いて御覧なさい。きつとそうよ」

「もし手紙を出したのなら、その用には違ないでしょう」

「ええ、本当に出したのよ。今兄さんがその手紙を持って、出

しに行つたところなの」

小六はこれ以上弁解のような慰藉いしやのような嫂あによめの言葉に耳を借したくなかつた。散歩に出る閑ひまがあるなら、手紙の代りに自分で足を運んでくれたらよさそうなものだと思うと余り好い心持でもなかつた。座敷へ来て、書棚の中から赤い表紙の洋書を出して、方々頁ページを剥はぐつて見ていた。

二

そこに氣のつかなかつた宗助そうすけは、町の角かどまで来て、切手と「敷島しきしま」を同じ店で買つて、郵便だけはすぐ出したが、その足でまた同じ道を戻るのが何だか不足だったので、唧くわえ煙草たばこの煙けむを秋ゆらの日に揺ゆつかせながら、ぶらぶら歩いているうちに、どこか

遠くへ行つて、東京と云う所はこんな所だと云う印象をはつきり頭の中へ刻みつけて、そうしてそれを今日の日曜の土産に家へ帰つて寝ようと云う氣になつた。彼は年来東京の空氣を吸つて生きている男であるのみならず、毎日役所の行通には電車を利用して、賑やかな町を二度ずつはきつと往つたり来たりする習慣になつていゝるのではあるが、身体と頭に樂がないので、いつでも上の空で素通りをする事になつてゐるから、自分がその賑やかな町の中に活きていると云う自覺は近來とんと起つた事がない。もつとも平生は忙がしさに追われて、別段氣にも掛からないが、七日に一返の休日が来て、心がゆつたりと落ちつける機会に出逢うと、不斷の生活が急にそわそわした上調子に見えて来る。必竟自分ひつきようは東京の中に住みながら、ついまだ東京と云うものを見た事がないんだという結論に到着すると、彼はそ

ここにいつも妙な物淋しさを感じるのである。

そう云う時には彼は急に思い出したように町へ出る。その上懐に多少余裕ふとこでもあると、これで一つ豪遊よゆうでもしてみようかと考える事もある。けれども彼の淋しみは、彼を思い切った極端に駆り去るほどに、強烈の程度なものでないから、彼がそのままで猛進する前に、それも馬鹿馬鹿しくなつてやめてしまふ。のみならず、こんな人の常態として、紙入の底が大抵の場合には、輕拳いましを戒める程度内に膨らんでいるので、億劫おつくうな工夫を凝らすよりも、懷手ふところをして、ぶらりと家うちへ帰る方が、つい楽になる。だから宗助の淋しみは単なる散歩か勸工場縦覧かんこうばぐらいなところさびで、次の日曜まではどうかこうか慰藉いしやされるのである。

この日も宗助はともかくもと思つて電車へ乗った。ところが日曜の好天気にもかかわらず、平常よりは乗客が少ないので例

になく乗心地が好かつた。その上乗客がみんな平和な顔をして、どれもこれも悠^{ゆう}たりと落ちついてゐるように見えた。宗助は腰を掛けながら、毎朝例刻に先を争つて席を奪い合いながら、丸の内方面へ向う自分の運命^{かえり}を顧みた。出勤刻限の電車の道伴^{みちづれ}ほど殺風景なものはない。革^{かわ}にぶら下がるにしても、天鵝絨^{びろうど}に腰を掛けるにしても、人間的な優^{やさ}しい心持の起つた試^{ためし}はいまだかつてない。自分もそれでたくさんだと考えて、器械か何ぞと膝^{ひざ}を突き合せ肩を並べたかのごとくに、行きたい所まで同席して不意と下りてしまうだけであつた。前の御婆さんが八つぐらいになる孫娘の耳の所へ口を付けて何か云つてゐるのを、傍^{そば}に見ていた三十恰好^{がっこう}の商家の御神さんらしいのが、可愛らしがつて、年を聞いたり名を尋ねたりするところを眺^{なが}めてゐると、今更^{いまさら}ながら別の世界に來たような心持がした。

頭の上には広告が一面に枠わくに嵌はめて掛けてあつた。宗助は平生これにさえ気がつかなかつた。何心なしに一番目のを読んで見ると、引越は容易にできますと云う移転会社の引札ひきふだであつた。その次には経済を心得る人は、衛生に注意する人は、火の用心を好むものは、と三行に並べておいてその後あとに瓦斯ガス竈がまを使えと書いて、瓦斯竈から火の出ている画えまで添えてあつた。三番目には露国文豪トルストイ伯傑作「千古の雪」と云うのと、バンカラ喜劇小辰大一座こたつと云うのが、赤地に白で染め抜いてあつた。宗助は約十分もかかつて、すべての広告を丁寧ていねいに三返ほど読み直した。別に行つて見ようと思うものも、買つて見たいと思うものも無かつたが、ただこれらの広告が判然はつきりと自分の頭に映つて、そうしてそれを一々読み終おほせた時間のあつた事と、それのことごとく理解し得たと云う心の余裕よゆうが、宗助には少なからぬ

満足を与えた。彼の生活はこれほどの余裕にすら誇りを感じずるほどに、日曜以外の出入りには、落ちついていられないものであつた。

宗助は駿河台下で電車を降りた。降りるとすぐ右側の窓硝子まどガラスの中に美しく並べてある洋書に眼がついた。宗助はしばらくその前に立つて、赤や青や縞しまや模様の上に、鮮あざやかに叩たたき込んである金文字を眺めた。表題の意味は無論解るが、手に取つて、中をしら検べて見ようという好奇心はちつとも起らなかった。本屋の前を通ると、きつと中へ這入はいつて見たくなつたり、中へ這入ると必ず何か欲しくなつたりするのは、宗助から云うと、すでに一昔ひとむかし前の生活である。ただHistory of Gamblingヒストリ オフ ガムアリング（博奕史ばくえきし）と云うのが、ことさらに美装して、一番真中に飾られてあつたので、それが幾分か彼の頭に突飛とっぴな新し味を加えただけであつた。

宗助は微笑しながら、急忙せわしい通りを向側むこうがわへ渡つて、今度は時計屋の店を覗のぞき込んだ。金時計だの金鎖が幾つも並べてあるが、これもただ美しい色や恰好かつこうとして、彼の眸ひとみに映るだけで、買いたい了簡りようけんを誘致するには至らなかつた。その癖彼は一々絹糸で釣つるした価格札ねだんふだを読んで、品物と見較みくらべて見た。そうして實際金時計の安価なのに驚ろいた。

こもりがきや
蝙蝠傘屋の前にもちよつと立ちどまつた。西洋小間物こまものを売る店先では、礼帽シルクハットの傍わきにかけてあつた襟飾えりかざりに眼がついた。自分の毎日かけているのよりも大変柄がらが好かつたので、価ねを聞いてみようかと思つて、半分店の中へ這入はいりかけたが、明日あしたから襟飾りなどをかけ替えたところが下らない事だと思ひ直すと、急に墓口がまぐちの口を開けるのが厭いやになつて行き過ぎた。呉服店でもだ**いぶ立見**をした。鶉御召うずらおめしだの、高貴織こうきおりだの、清凌織せいらようおりだの、自分

の今日まで知らずに過ぎた名をたくさん覚えた。京都の襟新と云う家の出店の前で、窓硝子へ帽子の鍔を突きつけるように近く寄せて、精巧に刺繍をした女の半襟を、いつまでも眺めていた。その中にちょうど細君に似合いそうな上品なのがあった。買って行つてやろうかという気がちよつと起るや否や、そりや五六年前の事だと云う考が後から出て来て、せっかく心持の好い思いつきをすぐ揉み消してしまった。宗助は苦笑しながら窓硝子を離れてまた歩き出したが、それから半町ほどの間は何だかつまらないような気分がして、往来にも店先にも格段の注意を払わなかった。

ふと気がついて見ると角に大きな雑誌屋があつて、その軒先には新刊の書物が大きな字で広告してある。梯子のような細長い枠へ紙を張つたり、ペンキ塗の一枚板へ模様画みたような色

彩を施こしたりしてある。宗助はそれを一々読んだ。著者の名前も作物さくぶつの名前も、一度は新聞の広告で見たようでもあり、また全く新奇のようでもあった。

この店の曲り角の影になった所で、黒い山高帽を被かぶつた三十ぐらいの男が地面の上へ気楽そうに胡坐あぐらをかいて、ええ御子供衆おなぐさの御慰みと云いながら、大きな護謨風船ゴムふうせんを膨ふくらましている。それが膨れると自然と達磨だるまの恰好かつこうになって、好加減いいかげんな所に眼口まで墨で書いてあるのに宗助は感心した。その上一度息を入れると、いつまでも膨れている。かつ指の先へでも、手の平の上へでも自由に尻すわが据る。それが尻の穴へ楊枝ようじのような細いものを突つ込むとしゅうつと一度に収縮してしまう。

忙がしい往来の人は何人でも通るが、誰も立ちどまつて見るほどのものはない。山高帽の男は賑にぎやかな町の隅に、冷やかに

胡坐あぐらをかいて、身の周囲まわりに何事が起りつつあるかを感じざるもののごとくに、ええ御子供衆の御慰みと云つては、達磨を膨らましてゐる。宗助は一錢五厘出して、その風船を一つ買つて、しゅつと縮ましてもらつて、それを袂たもとへ入れた。奇麗きれいな床屋へ行つて、髪を刈りたくなつたが、どこにそんな奇麗なのがあるか、ちよつと見つからないうちに、日が限かぎつて来たので、また電車へ乗つて、宅うちの方へ向つた。

宗助が電車の終点まで来て、運転手に切符を渡した時には、もう空の色が光を失いかけて、湿つた往来に、暗い影が射さし募つる頃であつた。降りようとして、鉄の柱を握つたら、急に寒い心持がした。いっしょに降りた人は、皆みんなな離れ離れになつて、事あり氣に忙いそがしく歩いて行く。町のはずれを見ると、左右の家の軒やねから家根ねへかけて、灰白ほのしろい煙りが大氣の中に動いているよう

に見える。宗助も樹きの多い方角に向いて早足に歩を移した。今日の日曜も、暢のんびりした御天氣も、もうすでにおしまいだと思うと、少しはかないようなまた淋さみしいような一種の気分が起つて来た。そうして明日あしたからまた例によつて例のごとく、せつせと働らかなくてはならない身体からだだと考えると、今日半日の生活が急に惜しくなつて、残る六日半むいかはんの非精神的な行動が、いかにもつまらなく感ぜられた。歩いてゐるうちにも、日当の悪い、窓の乏しい、大きな部屋の模様や、隣りに坐すわっている同僚の顔や、野中さんちよつと云う上官の様子ばかりが眼に浮かんた。魚勝と云う肴屋さかなやの前を通り越して、その五六軒先の露次ろじとも横丁ともつかない所を曲ると、行き当りが高い崖がけで、その左右に四五軒同じ構かまゑの貸家が並んでいる。ついこの間までは疎まばらな杉垣の奥に、御家人ごけにんでも住み古したと思われる、物寂ものさびた家も一

つ地所のうちに混まじつていたが、崖さかいの上の坂井という人がここを買かつてから、たちまち萱かやぶき葺ふを壊こわして、杉垣さきを引き抜ひいて、今のような新らしい普請ふしんに建かて易かえてしまった。宗助の家は横丁うちを突き当あつて、一番奥の左側で、すぐの崖下だから、多少陰気ではあるが、その代り通りからはもつとも隔へつてゐるだけに、まあ幾分か閑静だろうと云うので、細君と相談の上、とくにそこを択えらんだのである。

宗助は七日ななかに一返の日曜ももう暮れかかったので、早く湯にでも入いつて、暇があつたら髪でも刈きつて、そうして緩ゆつくり晩食ばんめしを食くおうと思おもつて、急いいで格子こうしを開ひけた。台所の方で皿小鉢さらこぼちの音がする。上がろうとする拍子ひょうしに、小六ころうくの脱ぬぎ棄すてた下駄げだの上へ、気がつかずに足を乗のせた。曲こまんで位置を調ととのへてゐるところへ小六が出て来た。台所の方で御米およねが、

「誰？ 兄さん？」と聞いた。宗助は、

「やあ、来ていたのか」と云いながら座敷へ上った。先刻郵便を出してから、神田を散歩して、電車を降りて家へ帰るまで、宗助の頭には小六の小的字も閃めかなかった。宗助は小六の顔を見た時、何となく悪い事でもしたようにきまりが好くなかった。

「御米、御米」と細君を台所から呼んで、

「小六が来たから、何か御馳走でもするが好い」と云いつけた。

細君は、忙がしそうに、台所の障子を開け放したまま出て来て、

座敷の入口に立っていたが、この分り切った注意を聞くや否や、

「ええ今直」と云ったなり、引き返そうとしたが、また戻つて

来て、

「その代り小六さん、憚り様。座敷の戸を閉てて、洋灯を点け

てちょうだい。今私も清も手が放せないところだから」と依頼

んだ。小六は簡単に、

「はあ」と云つて立ち上がった。

勝手では清が物を刻む音がする。湯か水をざあと流しへ空ける音がする。「奥様これはどちらへ移します」と云う声がする。「姉さん、ランプの心を剪る鋏はどこにあるんですか」と云う小六の音がする。しゅうと湯が沸つて七輪の火へかかった様子である。

宗助は暗い座敷の中で黙然と手焙へ手を翳していた。灰の上に出た火の塊まりだけが色づいて赤く見えた。その時裏の崖の上の家主の家の御嬢さんがピアノを鳴らし出した。宗助は思い出したように立ち上がって、座敷の雨戸を引き縁側へ出た。孟宗竹が薄黒く空の色を乱す上に、一つ二つの星が燦めいた。ピアノの音は孟宗竹の後から響いた。

宗助そうすけと小六ころくが手拭てぬぐいを下げて、風呂ふろから帰つて来た時は、座敷の真中に真四角な食卓すを据えて、御米およねの手料理が手際てぎわよくその上に並べてあつた。手焙てあぶりの火も出がけよりは濃い色に燃えていた。洋灯ランプも明るかつた。

宗助が机の前の座蒲団ざぶとんを引き寄せて、その上に楽々らくらくと胡坐あぐらを掻かいた時、手拭てぬぐいと石鹼シャボンを受取つた御米は、

「好い御湯だつた事？」と聞いた。宗助はただ一言ひとこと、

「うん」と答えただけであつたが、その様子は素気そつけないと云うよりも、むしろ湯上りで、精神が弛緩しかんした気味に見えた。

「なかなか好い湯でした」と小六が御米の方を見て調子を合せ

た。

「しかしああ込んだり溜たまらないよ」と宗助が机の端はじへ肘ひじを持たせながら、倦怠けんたいるそうに云った。宗助が風呂に行くのは、いつでも役所が退ひけて、家うちへ帰つてからの事だから、ちょうど人の立て込む夕食前ゆうめしまえの黄昏たそがれである。彼はこの二三カ月間ついぞ、日の光に透すかして湯の色を眺ながめた事がない。それならまだしもだが、ややともすると三日も四日もまるで銭湯の敷居を跨またがずに過してしまふ。日曜になったら、朝早く起きて何よりも第一に奇麗きれいな湯に首だけ浸つかつてみよう、常は考えているが、さてその日曜が来て見ると、たまに悠ゆっくり寝られるのは、今日ばかりじゃないかと云う氣になつて、つい床のうちでぐずぐずしてゐるうちに、時間が遠慮なく過ぎて、ええ面倒だ、今日はやめにして、その代り今度こんだの日曜に行こうと思ひ直すのが、ほとんど

情性のようになってゐる。

「どうかして、朝湯にだけは行きたいね」と宗助が云つた。

「その癖朝湯に行ける日は、きつと寢坊ねぼうなさるのね」と細君は

調戯からかうような口調であつた。小六は腹の中でこれが兄の性来うまれつきの

弱点であると思ひ込んでいた。彼は自分で学校生活をしているにもかかわらず、兄の日曜が、いかに兄にとつて貴たつといかを会得えとくできなかつた。六日間の暗い精神作用を、ただこの一日で暖か

に回復すべく、兄は多くの希望を二十四時間のうちに投げ込んでゐる。だからやりたい事があり過ぎて、十の二三も実行できない。否、その二三にしる進んで実行にかかる、かえつてそのために費やす時間の方が惜しくなつて来て、ついまた手を引込めて、じつとしてゐるうちに日曜はいつか暮れてしまうのである。自分の気晴しや保養や、娯楽てんそくもしくは好尚こうしょうについてです

ら、かように節儉しなければならぬ境遇にある宗助が、小六のために尽さないのは、尽さないのではない、頭に尽す余裕よゆうのないのだとは、小六から見ると、どうしても受取れなかった。兄はただ手前勝手な男で、暇があればぶらぶらして細君と遊んでばかりいて、いつこう頼りにも力にもなってくれない、真底は情合じょうあいに薄い人だぐらいに考えていた。

けれども、小六がそう感じ出したのは、つい近頃の事で、実を云うと、佐伯との交渉が始まって以来の話である。年の若いだけ、すべてに性急な小六は、兄に頼めば今日明日きょうあすにも方かたがつくものと、思い込んでいたのに、何日いっまでも埒らちが明かないのみか、まだ先方へ出かけてもくれないので、だいぶ不平になったのである。

ところが今日帰りを待ち受けて逢あつて見ると、そこが兄弟で、

別に御世辞も使わないうちに、どこか暖味あたたかみのある仕打も見えるので、つい云いたい事も後廻しにして、いっしよに湯になんぞ這入はいつて、穏やかに打ち解けて話せるようになって来た。兄弟は寛くつろいで膳ぜんについた。御米も遠慮なく食卓ひとすみの一隅りようを領した。宗助も小六も猪口ちよくを二三杯ずつ干した。飯にかかる前に、宗助は笑いながら、

「うん、面白いものが有ったつけ」と云いながら、袂たもとから買つて来た護謨風船ゴムふうせんの達磨だるまを出して、大きく膨ふくらませて見せた。そうして、それを腕わんの蓋ふたの上へ載のせて、その特色を説明して聞かせた。御米も小六も面白がつて、ふわふわした玉を見ていた。しまい小六が、ふうつと吹いたら達磨は膳ぜんの上から畳の上へ落ちた。それでも、まだ覆かえらなかつた。

「それ御覧」と宗助が云った。

御米は女だけに声を出して笑ったが、御櫃おはちの蓋ふたを開けて、夫の飯よそを盛いながら、

「兄さんも随分呑氣のんきね」と小六の方を向いて、半ば夫を弁護するように云った。宗助は細君から茶碗を受取つて、一言ひとことの弁解もなく食事を始めた。小六も正式に箸はしを取り上げた。

達磨はそれぎり話題のばに上らなかつたが、これが緒いとになつて、三人は飯の済むまで無邪氣に長閑のどかな話をつづけた。しまいに小六が氣を換えて、

「時に伊藤さんもとんだ事になりましたね」と云い出した。宗助は五六日前伊藤公暗殺の号外を見たとき、御米の働いている台所へ出て来て、「おい大変だ、伊藤さんが殺された」と云つて、手に持った号外を御米のエプロンの上に乗せたなり書齋へ這入はいつたが、その語氣からいうと、むしろ落ちついたものであつた。

「あなた大変だつて云う癖に、ちつとも大変らしい声じゃなくつてよ」と御米が後から冗談半分じょうだんにわざわざ注意したくらいである。その後日ごとの新聞に伊藤公の事が五六段ずつ出ない事はないが、宗助はそれに目を通してゐるんだか、いないんだか分らないほど、暗殺事件については平氣に見えた。夜歸つて来て、御米が飯の御給仕をするときなどに、「今日も伊藤さんの事が何か出ていて」と聞く事があるが、その時には「うんだいぶ出てゐる」と答えるぐらいだから、夫の隠袋かくしの中に畳んである今朝の読殻よみがらを、後から出して読んで見ないと、その日の記事は分らなかった。御米もつまりは夫が帰宅後の会話の材料として、伊藤公を引合に出すぐらいのところだから、宗助が進まない方向へは、たつて話を引張りたくはなかった。それでこの二人の間には、号外発行の当日以後、今夜小六がそれを云い出したまで

は、公けには天下を動かしつつある問題も、格別の興味をもつて迎えられていなかったのである。

「どうして、まあ殺されたんでしよう」と御米は号外を見たと
き、宗助に聞いたと同じ事をまた小六に向つて聞いた。

「短銃ピストルをポンポン連発したのが命中めいちゆうしたんです」と小六は正直に答えた。

「だけどき。どうして、まあ殺されたんでしよう」

小六は要領を得ないような顔をしている。宗助は落ちついた調子で、

「やつぱり運命だなあ」と云つて、茶碗の茶を旨うまそうに飲んだ。
御米はこれでも納得なっとくができなかったと見えて、

「どうしてまた満洲まんしゅうなどへ行つたんでしよう」と聞いた。

「本当にな」と宗助は腹が張つて充分物足りた様子であつた。

「何でも露西亞ロシアに秘密な用があつたんだそうです」と小六が真面目まじめな顔をして云つた。御米は、

「そう。でも厭いやねえ。殺されちゃ」と云つた。

「おれみたような腰弁こしべんは、殺されちゃ厭だが、伊藤さんみたような人は、哈爾賓ハルビンへ行つて殺される方がいいんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利きいた。

「あら、なぜ」

「なぜつて伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ。ただ死んで御覧、こうはいかないよ」

「なるほどそんなものかも知れないな」と小六は少し感服したようだったが、やがて、

「とにかく満洲だの、哈爾賓だのつて物騒な所ですね。僕は何だか危険なような心持がしてならない」と云つた。

「そりや、色んな人が落ち合つてゐるからね」

この時御米は妙な顔をして、こう答えた夫の顔を見た。宗助もそれに気がついたらしく、

「さあ、もう御膳おぜんを下げたら好かろう」と細君うなを促うなががして、先刻さつきの達磨だるまをまた畳の上から取つて、人指指ひとさしゆびの先へ載のせながら、

「どうも妙だよ。よくこう調子好くできるものだと思つてね」と云つていた。

台所きよから清きよが出て来て、食くらい散らした皿小鉢さらこぼちを食卓くらごと引いて行つた後で、御米も茶を入れ替えるために、次の間へ立つたから、兄弟は差向さむかいいになつた。

「ああ奇麗きれいになつた。どうも食つた後は汚きたないものでね」と宗助は全く食卓に未練のない顔をした。勝手の方で清がしきりに笑つてゐる。

「何がそんなにおかしいの、清」と御米が障子越しに話しかける声が聞えた。清はへえと云つてなお笑い出した。兄弟は何にも云わず、半ばなか下女の笑い声に耳を傾けていた。

しばらくして、御米が菓子皿と茶盆を両手に持つて、また出て来た。藤蔓ふじづるの着いた大きな急須きゅうすから、胃にも頭にも応こたえない番茶を、湯呑ゆのみほどの大きな茶碗ちやわんに注ついで、両人ふたりの前へ置いた。

「何だつて、あんなに笑うんだい」と夫が聞いた。けれども御米の顔は見ずにかえつて菓子皿の中を覗のぞいていた。

「あなたがあんな玩具おもちゃを買つて来て、面白そうに指の先へ乗せていらつしやるからよ。子供もない癖に」

宗助は意にも留めないように、軽く「そうか」と云つたが、後あとから緩ゆるくり、

「それでも元は子供があつたんだがね」と、さも自分で自分の

言葉を味わっている風につけ足して、生なまぬる温い眼を挙げて細君を見た。御米はぴたりと黙ってしまった。

「あなた御菓子食べなくって」と、しばらくしてから小六の方へ向いて話し掛けたが、

「ええ食べます」と云う小六の返事を聞き流して、ついと茶の間へ立って行つた。兄弟はまた差向いになつた。

電車の終点から歩くと二十分近くもかかる山の手の奥だけあつて、まだ宵よいの口くちだけでも、四隣あたりは存外静かである。時々表を通る薄歯の下駄の響さが冴よさむえて、夜寒がしだいに増して来る。宗助は懷手ふところをして、

「昼間は暖あつたかいが、夜になると急に寒くなるね。寄宿じやもう蒸気スチームを通してゐるかい」と聞いた。

「いえ、まだです。学校じやよつほど寒くならなくつちや、蒸

汽なんか焚たきやしません」

「そうかい。それじゃ寒いだろう」

「ええ。しかし寒いくらいどうでも構わないつもりですが」と云ったまま、小六はすこし云い淀よどんでいたが、しまいにとうとう思い切つて、

「兄さん、佐伯さえきの方はいったいどうなるんでしょう。先刻さつぎ姉さんから聞いたたら、今日手紙を出して下すつたそうですが」

「ああ出した。二三日中に何とか云つて来るだろう。その上でまたおれが行くともどうもしようよ」

小六は兄の平気な態度を、心の中うちでは飽足らず眺ながめた。しかし宗助の様子にどこと云つて、他ひとを激いさせるような鋭するどいところも、自らみづかを庇護かばうような卑いやしい点もないので、喰くつてかかる勇氣はさらに出なかつた。ただ

「じゃ今日まであのままにしてあつたんですか」と単に事実を確めた。

「うん、実は済まないがあのままだ。手紙も今日やつとの事で書いたくらいだ。どうも仕方がないよ。近頃神経衰弱でね」と真面目まじめに云う。小六は苦笑した。

「もし駄目なら、僕は学校をやめて、いつそ今のうち、満洲か朝鮮へでも行こうかと思つてゐるんです」

「満洲か朝鮮？ ひどくまた思い切つたもんだね。だって、御前さつき先刻満洲は物騒で厭いやだつて云つたじゃないか」

用談はこんなところに往つたり来たりして、ついに要領を得なかつた。しまいに宗助が、

「まあ、好いや、そう心配しないでも、どうかなるよ。何しろ返事の来しだい、おれがすぐ知らせてやる。その上でまた相談

するとしよう」と云ったので、談話はなしに区切がついた。

小六が帰りがけに茶の間を覗のぞいたら、御米は何にもせずに、
長火鉢ながひばちに寄りかかっていた。

「姉さん、さようなら」と声を掛けたら、「おや御帰り」と云いながらようやく立って来た。

四

小六ころうくの苦くにしていた佐伯さえきからは、予期の通り二三日して返事があつたが、それは極めて簡単きわなもので、端書はがきでも用の足りるところを、鄭重ていちょうに封筒へ入れて三銭の切手を貼はった、叔母の自筆に過ぎなかつた。

役所から帰って、筒袖つつそでの仕事着を、窮屈きうくつそうに脱ぎ易かえて、

火鉢ひばちの前へ坐すわるや否や、抽出ひきだしから一寸ほどわざと余して差し込んであつた状袋に眼が着いたので、御米およねの汲んで出す番茶を一口呑のんだまま、宗助そうすけはすぐ封を切った。

「へえ、安やすさんは神戸へ行つたんだってね」と手紙を読みながら云つた。

「いつ?」と御米は湯呑を夫の前に出した時の姿勢のままに聞いた。

「いつとも書いてないがね。何しろ遠からぬうちには帰京仕るべく候間と書いてあるから、もうじき帰つて来るんだろう」

「遠からぬうちなんて、やつぱり叔母さんね」

宗助は御米の批評に、同意も不同意も表しなかった。読んだ手紙を巻き納めて、投げるようにそこへ放り出して、四五日目になる、ざらざらした腮あごを、気味わるそうに撫なで廻した。

御米はすぐその手紙を拾ったが、別に読もうとしなかった。それを膝ひざの上へ乗せたまま、夫の顔を見て、

「遠からぬうちには帰京つかまつ仕るべく候間、どうだつて云うの」と聞いた。

「いずれ帰ったら、安之助やすのすけと相談して何とか御挨拶ごあいさつを致しますと云うのさ」

「遠からぬうちじゃ曖昧あいまいね。いつ帰るとも書いてなくつて」

「いいや」

御米は念のため、膝の上の手紙を始めて開いて見た。そうしてそれを元のように畳んで、

「ちよつとその状袋を」と手おつとを夫の方へ出した。宗助は自分と火鉢の間に挟まっている青い封筒を取つて細君に渡した。御米はそれをふつと吹いて、中を膨ふくらまして手紙を収めた。そうし

て台所へ立つた。

宗助はそれぎり手紙の事には氣を留めなかった。今日役所で同僚が、この間英吉利イギリスから来遊したキチナー元帥に、新橋の傍そばで逢あつたと云う話を思い出して、ああ云う人間になると、世界中どこへ行つても、世間を騒がせるようにできているようだが、實際そういう風に生れついて来たものかも知れない。自分の過去から引き摺ずつてきた運命や、またその続きとして、これから自分の眼前に展開されべき将来を取つて、キチナーと云う人のそれに比べて見ると、とうてい同じ人間とは思えないぐらい懸かけ隔へだたっている。

こう考えて宗助はしきりに煙草たばこを吹かした。表は夕方から風が吹き出して、わざと遠くの方から襲おそつて来るような音がする。それが時々やむと、やんだ間は寂しんとして、吹き荒れる時よりは

なお淋^{さび}しい。宗助は腕組をしながら、もうそろそろ火事の半鐘^{はんしょう}が鳴り出す時節だと思つた。

台所へ出て見ると、細君は七輪^{しちりん}の火を赤くして、肴^{さかな}の切身を焼いていた。清^{きよ}は流し元に曲^{こじ}んで漬物を洗っていた。二人とも口を利^きかずにせつせと自分のやる事をやっている。宗助は障子^{しょうじ}を開けたなり、しばらく肴^たから垂^{つゆ}る汁^{あぶら}か膏の音を聞いていたが、無言のまままた障子を閉^たてて元の座へ戻つた。細君は眼さえ肴から離さなかつた。

食事を済まして、夫婦が火鉢を間^{あい}に向い合つた時、御米はまた

「佐伯の方は困るのね」と云い出した。

「まあ仕方がない。安さんが神戸から帰るまで待つよりほかに道はあるまい」

「その前にちよつと叔母さんに逢つて話をしておいた方が好かなくつて」

「そうさ。まあそのうち何とか云つて来るだろう。それまでうつちや打遣つておこうよ」

「小六さんが怒つてよ。よくつて」と御米はわざと念を押しておいて微笑した。宗助は下眼を使つて、手に持った小楊枝こようじを着物の襟えりへ差した。

中なかいちんち一日置いて、宗助はようやく佐伯からの返事を小六に知らせてやつた。その時も手紙の尻しりに、まあそのうちどうかなるだろうと云う意味を、例のごとく付け加えた。そうして当分はこの事件について肩が抜けたように感じた。自然の経過なりゆきがまた窮屈に眼の前に押し寄せて来るまでは、忘れている方が面倒がなくなつて好いぐらいな顔をして、毎日役所へ出てはまた役所から帰つ

て来た。帰りも遅いが、帰つてから出かけるなどという億劫な事は滅多になかった。客はほとんど来ない。用のない時は清を十時前に寝かす事さえあった。夫婦は毎夜同じ火鉢の両側に向き合つて、食後一時間ぐらい話をした。話の題目は彼らの生活状態に相応した程度のものであった。けれども米屋の払を、この三十日にはどうしたものだろうという、苦しい世帯話は、いまだかつて一度も彼らの口には上らなかつた。と云つて、小説や文学の批評はもちろんの事、男と女の間を陽炎のように飛び廻る、花やかな言葉のやりとりはほとんど聞かれなかつた。彼らはそれほどの年輩でもないのに、もうそこを通り抜けて、日ごとに地味になつて行く人のようにも見えた。または最初から、色彩の薄い極めて通俗の人間が、習慣的に夫婦の関係を結ぶために寄り合つたようにも見えた。

上部うわべから見ると、夫婦ともそう物に屈托くつたくする気色けしきはなかつた。

それは彼らが小六の事に関して取った態度について見てもほぼ想像がつく。さすが女だけに御米は一二度、

「安さんは、まだ帰らないんでしょうかね。あなた今度こんだの日曜ぐらいに番町まで行つて御覧なさらくつて」と注意した事があるが、宗助は、

「うん、行つても好い」ぐらいな返事をするだけで、その行つても好い日曜が来ると、まるで忘れたように済ましている。御米もそれを見て、責める様子もない。天氣が好いと、

「ちと散歩でもしていращい」と云う。雨が降つたり、風が吹いたりすると、

「今日は日曜で仕合せね」と云う。

幸にして小六はその後ご一度もやつて来ない。この青年は、至つ

て凝り性の神経質で、こうと思うとどこまでも進んで来るところが、書生時代の宗助によく似ている代りに、ふと気が変わると、昨日の事はまるで忘れたように引つ繰り返つて、けろりとした顔をしている。そこも兄弟だけあつて、昔の宗助にそのままである。それから、頭脳が比較的明瞭で、理路に感情を注ぎ込むのか、または感情に理窟の枠を張るのか、どつちか分らないが、とにかく物に筋道を付けないと承知しないし、また一返筋道が付くと、その筋道を生かさなくつてはおかないように熱中したがる。その上体質の割合に精力がつづくから、若い血気に任せて大抵の事はする。

宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の目の前に活動しているような気がしてならなかった。時には、はらはらする事もあつた。また苦々しく思う折もあつた。そう云

う場合には、心のうちに、当時の自分が一図に振舞つた苦い記憶を、できるだけしばしば呼び起させるために、とくに天が小六を自分の眼の前に据え^す付けるのではなからうかと思つた。そうして非常に恐ろしくなつた。こいつもあるいはおれと同一の運命に^{おちい}陥るために生れて来たものではなからうかと考えると、今度は大いに心がかかりになつた。時によると心がかかりよりは不愉快であつた。

けれども、今日^{こんにち}まで宗助は、小六に対して意見がましい事を云つた事もなければ、将来について注意を与えた事もなかつた。彼の弟に対する待遇^{ほう}方はただ普通^{ぼんよう}凡庸のものであつた。彼の今の生活が、彼のような過去を有っている人とは思えないほどに、沈んでいるごとく、彼の弟を取り扱う様子にも、過去と名のつくほどの経験^もを有つた年長者の素振^{そぶり}は容易に出なかつた。

宗助と小六の間には、まだ二人ほど男の子が挟はさまっていたが、いずれも早世そうせいしてしまったので、兄弟とは云いながら、年は十ばかり違っている。その上宗助はある事情のために、一年の時京都へ転学したから、朝夕ちようせきいっしょに生活していたのは、小六の十二三の時までである。宗助は剛情ごうじやうな聴きかぬ氣の腕白小僧としての小六をいまだに記憶している。その時分は父も生きていたし、家の都合うちも悪くはなかったので、抱車夫かかえしやふを邸内の長屋に住まわして、樂に暮していた。この車夫に小六よりは三つほど年下の子供があつて、始終しじゆう小六の御相手をして遊んでいた。あゝ夏の日盛りに、二人して、長い竿さおのさきへ菓子袋くを括り付けて、大きな柿の木の下で蟬せみの捕りくらをしているのを、宗助が見て、兼坊けんぼうそんなに頭を日に照らしつけると霍乱かくらんになるよ、さあこれを被かぶれと云つて、小六の古い夏帽を出してやつた。する

と、小六は自分の所有物を兄が無断で他にくれてやったのが、
癪に障ったので、突然兼坊の受取った帽子を引たくつて、そ
れを地面の上へ抛げつけるや否や、馳け上がるようにその上へ
乗つて、くしやりと麦藁帽を踏み潰してしまった。宗助は縁か
ら跣足で飛んで下りて、小六の頭を擲りつけた。その時から、
宗助の眼には、小六が小悪らしい小僧として映った。

二年の時宗助は大学を去らなければならぬ事になった。東
京の家へも帰えれない事になった。京都からすぐ広島へ行つて、
そこに半年ばかり暮らしているうちに父が死んだ。母は父より
も六年ほど前に死んでいた。だから後には二十五六になる妾と、
十六になる小六が残っただけであつた。

佐伯から電報を受け取つて、久しぶりに出京した宗助は、葬
式を済ました上、家の始末をつけようと思つてだんだん調べて

見ると、あると思つた財産は案外に少なくつて、かえつて無い
つものの借金がだいぶあつたに驚ろかされた。叔父の佐伯に相
談すると、仕方がないから邸やしきを売るが好かろうと云う話であつ
た。妾めかけは相当の金をやつてすぐ暇を出す事にきめた。小六は当
分叔父の家に引き取つて世話をして貰もらう事にした。しかし肝心
の家屋敷はすぐ右から左へと売れる訳わけには行かなかつた。仕方
がないから、叔父に一時の工面くめんを頼んで、当座の片をつけて貰つ
た。叔父は事業家でいろいろな事に手を出しては失敗する、云
わば山氣やまぎの多い男であつた。宗助が東京にいる時分も、よく宗
助の父を説きつけては、旨うまい事を云つて金を引き出したもので
ある。宗助の父にも慾があつたかも知れないが、この伝でんで叔父
の事業に注ぎ込んだ金高はけつして少ないものではなかつた。

父の亡くなつたこの際にも、叔父の都合は元と余り變つてい

ない様子であつたが、生前の義理もあるし、またこう云う男の常として、いざと云う場合には比較的融通のつくものと見えて、叔父は快よく整理を引き受けてくれた。その代り宗助は自分の家屋敷の売却方についていっさいの事を叔父に一任してしまつた。早く云うと、急場の金策に対する報酬として土地家屋を提供したようなものである。叔父は、

「何しろ、こう云うものは買手を見て売らないと損だからね」と云つた。

道具類も積せきばかり取つて、金目にならないものは、ことごとく売り払つたが、五六幅の掛物と十二三点の骨董品こつとうひんだけは、やはり気長に欲しがる人を探さがさないと損だと云う叔父の意見に同意して、叔父に保管を頼む事にした。すべてを差し引いて手元に残つた有金は、約二千元ほどのものであつたが、宗助はその

うちの幾分を、小六の学資として、使わなければならぬと気がついた。しかし月々自分の方から送るとすると、今日の位置が堅固でない当時、はなはだ実行しにくい結果に陥りそうなので、苦しくはあつたが、思い切つて、半分だけを叔父に渡して、何分宜しくと頼んだ。自分が途中で失敗つたから、せめて弟だけは物にしてやりたい気もあるので、この千円が尽きたあととは、またどうにか心配もできようしましたしてくれるだろうぐらいの不慥な希望を残して、また広島へ歸つて行つた。

それから半年ばかりして、叔父の自筆で、家はとうとう売れたから安心しろと云う手紙が来たが、いくらに売れたとも何とも書いてないので、折り返して聞き合せると、二週間ほど経つての返事に、優に例の立替を償うに足る金額だから心配しなくても好いとあつた。宗助はこの返事に対して少なからず不満を

感じたには感じたが、同じ書信の中に、委細はいずれ御面会の節云々とあつたので、すぐにも東京へ行きたいような気がして、実はこうこうだがと、相談半分細君に話して見ると、御米は気の毒そうな顔をして、

「でも、行けないんだから、仕方がないわね」と云つて、例のごとく微笑した。その時宗助は始めて細君から宣告を受けた人のように、しばらく腕組をして考えたが、どう工夫したつて、抜ける事のできないような位地いちと事情の下もとに束縛そくばくされていたので、ついそれなりになつてしまつた。

仕方がないから、なお三四回書面で往復を重ねて見たが、結果はいつも同じ事で、版行はんこうで押したようにいずれ御面会の節を繰り返して来るだけであつた。

「これじゃしようがないよ」と宗助は腹が立つたような顔をし

て御米を見た。三カ月ばかりして、ようやく都合がついたので、久し振りに御米を連れて、出京しようと思う矢先に、つい風邪かぜを引いて寝たのが元で、腸窒扶斯ちようぢふすに変化したため、六十日余りを床の上に暮らした上に、あとの三十日ほどは充分仕事もできないくらい衰えてしまった。

病氣が本復してから間もなく、宗助はまた広島を去って福岡の方へ移らなければならぬ身となつた。移る前に、好い機会だからちよつと東京まで出たいものだと考えているうちに、今度もいろいろの事情に制せられて、ついそれも遂行すいこうせずに、やはり下り列車の走る方かたに自己の運命を托した。その頃は東京の家を畳むとき、懐ふところにして出た金は、ほとんど使い果たしていた。彼の福岡生活は前後二年を通じて、なかなかの苦闘であつた。彼は書生として京都にいる時分、種々の口実もとの下に、父から臨

時随意に多額の学資を請求して、勝手しだいに消費した昔をよく思い出して、今の身分と比較しつつ、しきりに因果の束縛を恐れた。ある時はひそかに過ぎた春を回顧して、あれが己の栄華の頂点だったんだと、始めて醒めた眼に遠い霞を眺める事もあつた。いよいよ苦しくなつた時、

「御米、久しく放つておいたが、また東京へ掛合つてみようかな」と云い出した。御米は無論逆いはしなかつた。ただ下を向いて、

「駄目よ。だって、叔父さんに全く信用がないんですもの」と心細そうに答えた。

「向うじゃこつちに信用がないかも知れないが、こつちじやまた向うに信用がないんだ」と宗助は威張つて云い出したが、御米の俯目ふしめになつていゝ様子を見ると、急に勇氣が挫ける風に見

えた。こんな問答を最初は月に一二返ぐらい繰り返していたが、
後には二月に一返になり、三月に一返になり、とうとう、

「好いや、小六さえどうかしてくれれば。あとの事はいずれ東京へ出たら、逢った上で話をつけらあ。ねえ御米、そうすると、
しようじゃないか」と云い出した。

「それで、好ござんすとも」と御米は答えた。

宗助は佐伯の事をそれなり放ってしまった。単なる無心は、
自分の過去に対しても、叔父に向つて云い出せるものでないと、
宗助は考えていた。したがってその方の談判は、始めからいまだかつて筆にした事がなかった。小六からは時々手紙が来たが、
極めて短かい形式的のものが多かった。宗助は父の死んだ時、東京で逢った小六を覚えているだけだから、いまだに小六を他愛ない小供ぐらいに想像するので、自分の代理に叔父と交渉させ

ようなどと云う気は無論起らなかった。

夫婦は世の中の日の目を見ないものが、寒さに堪えかねて、抱き合つて暖だんを取るような具合に、御互同志を頼りとして暮らしていた。苦しい時には、御米がいつでも、宗助に、

「でも仕方がないわ」と云つた。宗助は御米に、

「まあ我慢するさ」と云つた。

二人の間には諦めあきらめとか、忍耐とか云うものが断えず動いていたが、未来とか希望と云うものの影はほとんど射さないように見えた。彼らは余り多く過去を語らなかつた。時としては申し合わせたように、それを回避する風さえあつた。御米が時として、

「そのうちにはまたきつと好い事があつてよ。そうそう悪い事ばかり続くものじゃないから」と夫を慰おつとさめるように云う事が

あつた。すると、宗助にはそれが、真心ある妻まごころの口を藉かりて、自分を翻弄ほんろうする運命の毒舌のごとくに感ぜられた。宗助はそう云う場合には何にも答えずにただ苦笑するだけであつた。御米がそれでも気がつかずに、なにか云い続けると、

「我々は、そんな好い事を予期する権利のない人間じゃないか」と思い切つて投げ出してしまふ。細君はようやく気がついて口を噤つぐんでしまふ。そうして二人が黙つて向き合つていると、いつの間にか、自分達は自分達の拵こしらえた、過去という暗い大きな窖あなの中に落ちてゐる。

彼らは自業自得じぎうじとくで、彼らの未来を塗抹とまつした。だから歩いてゐる先の方には、花やかな色彩を認める事ができないものと諦あきらめて、ただ二人手を携たずさえて行く氣になつた。叔父の売り払つたと云う地面家作についても、固もとより多くの期待は持つてゐなかつ

た。時々考え出したように、

「だって、近頃の相場なら、捨売すてうりにしたって、あの時叔父の拵

らえてくれた金の倍にはなるんだもの。あんまり馬鹿馬鹿しいからね」と宗助が云い出すと、御米は淋さみしそうに笑って、

「また地面？　いつまでもあの事ばかり考えていらつしやるのね。だって、あなたが万事宜よろしく願いますと、叔父さんにおつしやつたんでしよう」と云う。

「そりや仕方がないさ。あの場合ああでもしなければ方ほうがつかないんだもの」と宗助が云う。

「だからさ。叔父さんの方では、御金の代りに家うちと地面を貰つたつもりでいらつしやるかも知れなくってよ」と御米が云う。

そう云われると、宗助も叔父の処置に一理あるようにも思われて、口では、

「そのつもりが好くないじゃないか」と答弁するようなものの、この問題はその都度^{っど}しだいしだいに背景の奥に遠ざかつて行くのであった。

夫婦がこんな風に淋しく睦^{むつ}まじく暮らして来た二年目の末に、宗助はもとの同級生で、学生時代には大変懇意であつた杉原と云う男に偶然出逢つた。杉原は卒業後高等文官試験に合格して、その時すでに或省に奉職していたのだが、公務上福岡と佐賀へ出張することになつて、東京からわざわざやつて来たのである。宗助は所の新聞で、杉原のいつ着いて、どこに泊^{かえり}つているかをよく知つてはいたが、失敗者としての自分に顧^{かえり}みて、成効^{せいこう}者の前に頭を下げる対照を恥ずかしく思つた上に、自分は在学当時の旧友に逢うのを、特に避けたい理由を持つていたので、彼の旅館を訪ねる気は毛頭なかつた。

ところが杉原の方では、妙な引掛りから、宗助のここに燻^{くす}ぶつ
ている事を聞き出して、強^しいて面会を希望するので、宗助もや
むを得ず我^がを折った。宗助が福岡から東京へ移れるようになつ
たのは、全くこの杉原の御蔭^{おかげ}である。杉原から手紙が来て、い
よいよ事がきまつたとき、宗助は箸^{はし}を置いて、

「御米、とうとう東京へ行けるよ」と云つた。

「まあ結構ね」と御米が夫の顔を見た。

東京に着いてから二三週間は、眼の回^{まわ}るように日が経^たつた。
新らしく世帯を有^もつて、新らしい仕事を始める人に、あり勝ち
な急忙^{せわ}しなさと、自分達を包む大都の空氣の、日夜劇^{はげ}しく震盪^{しんとう}
する刺戟^{しげき}とに駆^かられて、何事をもじつと考える閑^{ひま}もなく、また
落ちついて手を下^{くだ}す分別も出なかつた。

夜汽車で新橋へ着いた時は、久しぶりに叔父夫婦の顔を見た

が、夫婦とも灯ひのせいかな晴れやかな色には宗助の眼に映らなかつた。途中に事故があつて、着ちやくの時間が珍らしく三十分ほど後れたのを、宗助の過失でもあるかのように、待草まちくたび臥れた気色けしきであつた。

宗助がこの時叔母から聞いた言葉は、

「おや宗そうさん、しばらく御目に掛かからないうちに、大變御老おふけなすつた事」という一句であつた。御米はその折おり始めて叔父夫婦に紹介された。

「これがあの……」と叔母は逡巡ためらつて宗助の方を見た。御米は何と挨拶あいさつのしようもないので、無言のままただ頭を下げた。

小六も無論叔父夫婦と共に二人を迎いに來ていた。宗助は一眼その姿を見たとき、いつの間にか自分を凌しのぐように大きくなつた、弟の發育に驚ろかされた。小六はその時中学を出て、これ

から高等学校へ這入ろうという間際であつた。宗助を見て、「兄さん」とも「御帰りなさい」とも云わないで、ただ不器用に挨拶をした。

宗助と御米は一週ばかり宿屋住居をして、それから今の所に引き移つた。その時は叔父夫婦がいろいろ世話を焼いてくれた。細々しい台所道具のようなものは買うまでもあるまい、古いのでよければと云うので、小人数に必要なだけ一通り取り揃えて送つて来た。その上、

「御前も新世帯だから、さぞ物要が多かろう」と云つて金を六十円くれた。

家を持つてかれこれ取り紛れているうちに、早半月余も経つたが、地方にいる時分あんなに気にしていた家邸の事は、ついまだ叔父に言い出さずにいた。ある時御米が、

「あなたあの事を叔父さんにおつしやつて」と聞いた。宗助はそれで急に思い出したように、

「うん、まだ云わないよ」と答えた。

「妙ね、あれほど気にしていらしつたのに」と御米がうす笑をした。

「だって、落ちついて、そんな事を云い出す暇ひまがないんだものと宗助が弁解した。

また十日ほど経たつた。すると今度は宗助の方から、
「御米、あの事はまだ云わないよ。どうも云うのが面倒いやで厭いやになつた」と云い出した。

「厭なのを無理におつしやらなくつてもいいわ」と御米が答えた。

「好いかい」と宗助が聞き返した。

「好いかいつて、もともとあなたの事じゃなくつて。私は先か
らどうでも好いんだわ」と御米が答えた。

その時宗助は、

「じゃ、鹿爪しかづめらしく云い出すのも何だか妙だから、そのうち機おり会
があつたら、聞くとしよう。なにそのうち聞いて見る機おり会がきつ
と出て来るよ」と云つて延ばしてしまつた。

小六は何不足なく叔父の家に寝起ねおきしていた。試験を受けて高
等学校へ這入はいれれば、寄宿へ入舎しなければならないと云うの
で、その相談まですでに叔父と打合せがしてあるようであつた。
新らしく出京した兄からは別段学資の世話を受けないせいか、
自分の身の上については叔父ほどに親しい相談も持ち込んで来
なかつた。従兄弟いとこの安之助とは今までの關係上大変仲が好かつ
た。かえつてこの方が兄弟らしかつた。

宗助は自然叔父の家に足が遠くなるようになった。たまに行つても、義理一遍の訪問に終る事が多いので、帰り路にはいつもつまらない気がしてならなかった。しまいには時候の挨拶を済ますと、すぐ帰りたくなる事もあった。こう云う時には三十分と坐つて、世間話に時間を繋ぐのにさえ骨が折れた。向うでも何だか気が置けて窮屈だと云う風が見えた。

「まあいいじゃありませんか」と叔母が留めてくれるのが例であるが、そうすると、なおさらにくい心持がした。それでも、たまには行かないと、心のうちで気が咎めるような不安を感じるので、また行くようになった。折々は、

「どうも小六が御厄介になりました」とこつちから頭を下げて礼を云う事もあった。けれども、それ以上は、弟の将来の学資について、また自分が叔父に頼んで、留守中に売り払って貰つ

た地所家作についても、口を切るのがつい面倒になつた。しかし宗助が興味を有たない叔父の所へ、不精無精にせよ、時たま出掛けて行くのは、単に叔父甥の血属関係を、世間並に持ち堪えるための義務心からではなくって、いつか機会があつたら、片をつけたい或物を胸の奥に控えていた結果に過ぎないのは明かであつた。

「宗さんはどうもすっかり変つちまいましたね」と叔母が叔父に話す事があつた。すると叔父は、

「そうよなあ。やつぱり、ああ云う事があると、永くまで後へ響くものだからな」と答えて、因果は恐ろしいと云う風をする。叔母は重ねて、

「本当に、怖いもんですね。元はあんな寝入つた子じゃなかつたが——どうもはしやぎ過ぎるくらい活潑でしたからね。それ

が二三年見ないうちに、まるで別の人みたように老けちまつて。今じゃあなたより御爺さんおじい御爺さんおじいしていますよ」と云う。

「真逆まさか」と叔父がまた答える。

「いえ、頭や顔は別として、様子がさ」と叔母がまた弁解する。こんな会話が老夫婦の間に取り換わされたのは、宗助が出京して以来一度や二度ではなかった。実際彼は叔父の所へ来ると、老人の眼に映る通りの人間に見えた。

御米はどう云うものか、新橋へ着いた時、老人夫婦に紹介されたぎり、かつて叔父の家の敷居を跨またいだ事がない。むこうから見えれば叔父さん叔母さんと丁寧ていねいに接待するが、帰りがけに、「どうです、ちと御出かけなすつちや」などと云われると、ただ、

「ありがとう」と頭を下げるだけで、ついで出掛けた試ためしはなかつ

た。さすがの宗助さえ一度は、

「叔父さんの所へ一度行つて見ちゃ、どうだい」と勧め^{すす}めた事があるが、

「でも」と変な顔をするので、宗助はそれぎりけつしてその事を云い出さなかつた。

両家族はこの状態で約一年ばかりを送つた。すると宗助よりも気分は若いと許された叔父が突然死んだ。病症は脊髄^{せきずい}脳膜^{のうまく}炎^{えん}とかい^{げきしよう}う劇症^{げきしよう}で、二三日風邪^{かぜ}の気味で寝^ねていたが、便所へ行つた歸りに、手を洗おうとして、柄杓^{ひしやく}を持^もつたまま卒倒したなり、
^{いちんちた}一日経つか経たないうちに冷たくなつてしまつたのである。

「御米、叔父はとうとう話をしずに死んでしまつたよ」と宗助が云つた。

「あなたまだ、あの事を聞くつもりだつたの、あなたも随分執念^{しゅうねん}深^{ふか}

いのね」と御米が云った。

それからまた一年ばかり経ったら、叔父の子の安之助が大学を卒業して、小六が高等学校の二年生になった。叔母は安之助といつしよに中六番町に引き移った。

三年目の夏休みに小六は房州の海水浴へ行った。そこに一月余りも滞在しているうちに九月になり掛けたので、保田ほたから向うへ突切つつぎつて、上総かずさの海岸を九十九里伝いに、銚子ちようしまで来たが、そこから思い出したように東京へ帰った。宗助の所へ見えたのは、帰ってから、まだ二三日しか立たない、残暑の強い午後である。真黒に焦こげた顔の中に、眼だけ光らして、見違えるように蜜色はんしよくを帯びた彼は、比較的日の遠い座敷へ這入はいったなり横になつて、兄の帰りを待ち受けていたが、宗助の顔を見るや否や、むっくり起き上がつて、

「兄さん、少し御話があつて来たんですが」と開き直られたので、宗助は少し驚ろいた気味で、暑苦しい洋服さえ脱ぎ更え^かずに、小六の話を聞いた。

小六の云うところによると、二三日前彼が上総から帰つた晩、彼の学資はこの暮限り、気の毒ながら出してやれないと叔母から申し渡されたのだそうである。小六は父が死んで、すぐと叔父に引き取られて以来、学校へも行けるし、着物も自然^{ひとりで}にできるし、小遣^{こづかい}も適宜^{てきぎ}に貰えるので、父の存生中^{ぞんし}と同じように、何不足なく暮らせて来た惰性から、その日その晩までも、ついぞ学資と云う問題を頭に思い浮べた事がなかつたため、叔母の宣告を受けた時は、茫然^{ぼんやり}してとかくの挨拶^{あいさつ}さえできなかったのだと云う。

叔母は気の毒そうに、なぜ小六の世話ができなくなつたかを、

女だけに、一時間も掛かつて委しく説明してくれたそうである。それには叔父の亡くなつた事やら、継いで起る経済上の変化やら、また安之助の卒業やら、卒業後に控えている結婚問題やらが這入っていたのだと云う。

「できるならば、せめて高等学校を卒業するまでと思つて、今日までいろいろ骨を折つただけけれども」

叔母はこう云つたと小六は繰り返した。小六はその時ふと兄が、先年父の葬式の時に出京して、万事を片づけた後、広島へ帰るとき、小六に、御前の学資は叔父さんに預けてあるからと云つた事があるのを思い出して、叔母に始めて聞いて見ると、叔母は案外な顔をして、

「そりや、あの時、宗さんが若干か置いて行きなすつた事は、行きなすつたが、それはもうありやしないよ。叔父さんのまだ生

きて御出おいでの時分から、御前の学資は融通して来たんだから」と答えた。

小六は兄から自分の学資がどれほどあつて、何年分の勘定かんじようで、叔父に預けられたかを、聞いておかなかったから、叔母からこう云われて見ると、一言ひとことも返しうがなかった。

「御前おまえも一人じゃなし、兄さんもある事だからよく相談をして見たら好いだろう。その代り私わたしも宗さんに逢つて、とつくり訳わけを話しましょうから。どうも、宗さんも余あんまり近頃は御出おいででないし、私も御無沙汰ごぶさたばかりしているのでね、つい御前の事は御話をする訳にも行かなかつたんだよ」と叔母は最後につけ加えたそうである。

小六から一部始終いちぶしじゆうを聞いた時、宗助はただ弟の顔を眺ながめて、一口、

「困つたな」と云つた。昔のように赫かつと激して、すぐ叔母の所へ談判に押し掛ける気色けしきもなければ、今まで自分に対して、世話にならないでも済む人のように、よそよそしく仕向けて来た弟の態度が、急に方向を転じたのを、悪いにくと思う様子も見えなかつた。

自分の勝手に作り上げた美しい未来が、半分壊れくずかかつたのを、さも傍はたの人のせいでもあるかのごとく心を乱している小六の帰る姿を見送つた宗助は、暗い玄関の敷居の上に立つて、格子こうしの外に射す夕日をしばらく眺ながめていた。

その晩宗助は裏から大きな芭蕉ばしやうの葉を二枚剪きつて来て、それを座敷の縁に敷いて、その上に御米と並んで涼すずみながら、小六の事を話した。

「叔母さんは、こつちで、小六さんの世話をしろつて云う気な

んじやなくつて」と御米が聞いた。

「まあ、逢つて聞いて見ないうちは、どう云う料簡りょうけんか分らないがね」と宗助が云うと、御米は、

「きつとそうよ」と答えながら、暗がりうちわで団扇をはたはた動かし
た。宗助は何も云わずに、頸くびを延ばして、庇ひさしと崖がけの間に細く映
る空の色を眺めた。二人はそのまましばらく黙つていたが、良
あつて、

「だつてそれじゃ無理ね」と御米がまた云つた。

「人間一人大学を卒業させるなんて、おれの手際てぎわじゃ到底駄目
だ」と宗助は自分の能力だけを明らかにした。

会話はそこで別の題目に移つて、再び小六の上にも叔母の上
にも帰つて来なかつた。それから二三日するとちやうど土曜が
来たので、宗助は役所の帰りに、番町の叔母の所へ寄つて見た。

叔母は、

「おやおや、まあ御珍らしい事」と云つて、いつもよりは愛想よく宗助を款待^{もてな}してくれた。その時宗助は厭^{いや}なのを我慢して、この四五年来溜めて置いた質問を始めて叔母に掛けた。叔母は固よりできるだけは弁解しない訳に行かなかつた。

叔母の云うところによると、宗助の邸宅^{やしき}を売払つた時、叔父の手に這入^{はい}つた金は、たしかには覚えていないが、何でも、宗助のために、急場の間に合せた借財を返した上、なお四千五百円とか四千三百円とか余つたそうである。ところが叔父の意見によると、あの屋敷は宗助が自分に提供して行つたのだから、たといいくら余ろうと、余つた分は自分の所得と見做^{みな}して差支^{さしつかえ}ない。しかし宗助の邸宅を売つて儲^もけたと云われては心持が悪いから、これは小六の名義で保管して置いて、小六の財産にし

てやる。宗助はあんな事をしてはいちやく廃嫡にまでされかけた奴だから、一文だいちもんつて取る権利はない。

「宗さん怒っちゃいけませんよ。ただ叔父さんの云った通りを話すんだから」と叔母が断つた。宗助は黙つてあとを聞いていた。

小六の名義で保管されべき財産は、不幸にして、叔父の手腕で、すぐ神田の賑にぎやかな表通りの家屋に変形した。そうして、まだ保険をつけないうちに、火事で焼けてしまった。小六には始めから話してない事だから、そのままにして、わざと知らせずにおいた。

「そう云う訳でね、まことに宗さんにも、御気の毒だけれども、何しろ取つて返しのつかない事だから仕方がない。運だと思つて諦あきらめて下さい。もつとも叔父さんさえ生きていれば、また

どうともなるんでしようさ。小六一人ぐらいそりや訳はありま
すまいよ。よしんば、叔父さんがいなさらない、今にしたって、
こつちの都合さえ好ければ、焼けた家うちと同じだけのものを、小
六に返すか、それでなくつても、当人の卒業するまでぐらいは、
どうにかして世話もできるんですけれども」と云つて叔母はま
たほかの内幕話をして聞かせた。それは安之助の職業について
であつた。

安之助は叔父の一人息子で、この夏大学を出たばかりの青年
である。家庭で暖かに育つた上に、同級の学生ぐらいよりほか
に交際のない男だから、世の中の事にはむしろ迂濶うかつと云つても
いいが、その迂濶なところどこか鷹揚おうような趣おもむきを具えて実社会へ
顔を出したのである。専門は工科の器械学だから、企業熱の下
火になつた今日こんにちといえども、日本中にたくさんある会社に、相応

の口の一つや二つあるのは、もちろんであるが、親譲りの山氣がどこかに潜ひそんでいるものと見えて、自分で自分の仕事をして見たくてならない矢先へ、同じ科の出身で、小規模ながら専有の工場こうばを月島辺へんに建てて、独立の経営をやっている先輩に出逢ったのが縁となつて、その先輩と相談の上、自分も幾分かの資本を注つぎ込んで、いつしよに仕事をしてみようという考になつた。叔母の内幕話と云つたのはそこである。

「でね、少しあつた株をみんなその方へ廻す事にしたもんだから、今じゃ本当に一文いちもんなし同然な仕儀しぎでいるんですよ。それは世間から見ると、人数は少なし、家邸いえやしきは持っているし、樂に見えるのも無理のないところでしようさ。この間も原の御母おつかさんが来て、まああなたほど氣樂な方はない、いつ来て見ても万年青の葉ばかり丹念に洗っているつてね。真逆まさかそれでも無いんです

けれども」と叔母が云った。

宗助が叔母の説明を聞いた時は、ぼんやりしてとかくの返事が容易に出なかった。心のなかで、これは神経衰弱の結果、昔のように機敏で明快な判断を、すぐ作り上げる頭が失^なくなった証^{しょうこ}拠^こだろうと自覚した。叔母は自分の云う通りが、宗助に本当と受けられないのを気にするように、安之助から持ち出した資本の高まで話した。それは五千円ほどであつた。安之助は当分の間、わずかな月給と、この五千円に対する利益配当とで暮らさなければならぬのだそうである。

「その配当だつて、まだどうなるか分りやしないんでさあね。^{うま}旨^{うま}く行つたところで、一割か一割五分ぐらいなものでしょうし、また一つ間違え^{けむ}ばまるで煙^{けむ}にならないとも限らないんですから」と叔母がつけ加えた。

宗助は叔母の仕打に、これと云う目立つた阿漕あこぎなところも見えないので、心の中うちでは少なからず困ったが、小六の将来について一口の掛合かけあいもせずに帰るのはいかにも馬鹿馬鹿しい気がした。そこで今までの問題はそこに据すえつきりにして置いて、自分が当時小六の学資として叔父に預けて行つた千円の所置を聞き糺ただして見ると、叔母は、

「宗さん、あれこそ本当に小六が使つちまつたんですよ。小六が高等学校へ這入はいつてからでも、もうかれこれ七百円は掛かつているんですもの」と答えた。

宗助はついでだから、それと同時に、叔父に保管を頼んだ書画こつとうひんや骨董品なりゆきの成行を確かめて見た。すると、叔母は、

「ありあとんだ馬鹿な目に逢つて」と云いかけたが、宗助の様子を見て、

「宗さん、何ですか、あの事はまだ御話をしなかつたんだしたかね」と聞いた。宗助がいいえと答えると、

「おやおや、それじゃ叔父さんが忘れちまつたんですよ」と云いながら、その顛末てんまつを語つて聞かした。

宗助が広島へ帰ると間もなく、叔父はその売捌方うりさばかたを真田さなだとかいう懇意の男に依頼した。この男は書画骨董の道に明るいとかいうので、平生そんなものの売買の周旋をして諸方へ出入するそうであつたが、すぐさま叔父の依頼を引き受けて、誰某だれそれがしが何を欲しいと云うから、ちよつと拝見とか、何々氏がこう云う物を希望だから、見せましようとか号ごうして、品物を持つて行つたぎり、返して来ない。催促すると、まだ先方から戻つて参りませんからとか何とか言訳をするだけでかつて埒らちの明いた試ためしがなかつたが、とうとう持ち切れなくなつたと見えて、どこかへ姿

を隠してしまった。

「でもね、まだ屏風びょうぶが一つ残っていますよ。この間引越の時に、気がついて、こりや宗さんのだから、今度こんだついであつたら届けて上げたらいいだろうって、安がそう云っていましたつけ」

叔母は宗助の預けて行つた品物にはまるで重きを置いていないような、ものの云い方をした。宗助も今日きょうまで放っておくらいだから、あまりその方面には興味を有もち得なかつたので、少しも良心に悩まされている気色けしきのない叔母の様子を見ても、別に腹は立たなかつた。それでも、叔母が、

「宗さん、どうせ家うちじゃ使っていないんだから、なんなら持つておいでなすつちやどうです。この頃はああいうものが、大變ねが出たと云う話じゃありませんか」と云つたときは、實際それを持つて帰る氣になつた。

納戸なんどから取り出して貰つて、明るい所で眺ながめると、たしかに見覚みおぼえのある二枚折であつた。下に萩はぎ、桔梗ききよう、芒すすき、葛くず、女郎花おみなえしを隙間すきまなく描かいた上に、真丸な月を銀で出して、その横の空いた所ひざへ、野路のじや空月の中なる女郎花、其一きいちと題してある。宗助は膝ひざを突いて銀の色の黒く焦こげた辺あたりから、葛の葉の風に裏を返している色の乾いた様から、大福だいふくほどな大きな丸い朱の輪廓りんかくの中に、抱一ほういつと行書で書いた落款らくかんをつくづくと見て、父の生きている当時を憶おもい起さずにはいられなかつた。

父は正月になると、きつとこの屏風びやうぶを薄暗くらい蔵の中から出して、玄関の仕切りに立てて、その前へ紫檀したんの角かくな名刺入を置いて、年賀を受けたものである。その時はめでたいからと云うので、客間の床とこには必ず虎の双幅そうふくを懸かけた。これは岸駒がんくじゃない岸岱がんたいだと父が宗助に云つて聞かせた事があるのを、宗助はいま

だに記憶していた。この虎の画には墨が着いていた。虎が舌を出して谷の水を呑のんでいる鼻柱が少し汚けがされたのを、父は苛ひどく気にして、宗助を見るたびに、御前ここへ墨を塗った事を覚えてゐるか、これは御前の小さい時分の悪戯いたづらだぞと云つて、おかしいような恨めうらしいような一種の表情をした。

宗助は屏風びようぶの前に畏かしこまつて、自分が東京にいた昔の事を考えながら、

「叔母さん、じゃこの屏風はちようだいして行きましよう」と云つた。

「ああああ、御持ちなさいとも。何なら使に持たせて上げましよう」と叔母は好意から申し添えた。

宗助は然しかるべく叔母に頼んで、その日はそれで切り上げて歸つた。晩食ばんめしの後御米のちといつしよにまた縁側へ出て、暗い所で白地

の浴衣ゆかたを並べて、涼みながら、画の話をした。

「安さんには、御逢いなさらなかったの」と御米が聞いた。

「ああ、安さんは土曜でも何でも夕方まで、工場にいるんだそうだ」

「随分骨が折れるでしょうね」

御米はそう云ったなり、叔父や叔母の処置については、一言の批評も加えなかった。

「小六の事はどうしたものだろう」と宗助が聞くと、

「そうね」と云うだけであつた。

「理窟りくつを云えば、こつちにも云い分はあるが、云い出せば、とどのつまりは裁判沙汰になるばかりだから、証拠しょうこも何もなければ勝てる訳のものじゃなし」と宗助が極端を予想すると、

「裁判なんか勝たなくたっていいわ」と御米がすぐ云つた

ので、宗助は苦笑してやめた。

「つまりおれがあの時東京へ出られなかつたからの事さ」

「そうして東京へ出られた時は、もうそんな事はどうでもよかつたんですもの」

夫婦はこんな話をしながら、また細い空を^{ひさし}庇の下から覗いて見て、明日の^{あした}天氣を語り合つて蚊帳^{かや}に這入^{はい}つた。

次の日曜に宗助は小六を呼んで、叔母の云つた通りを残らず話して聞かせて、

「叔母さんが御前に詳しい説明をしなかつたのは、短兵急な御前の性質を知つてゐるせい、それともまだ小供だと思つてわざと略してしまつたのか、そこはおれにも分らないが、何しろ事実は今云つた通りなんだよ」と教えた。

小六にはいかに詳しい説明も腹の足しにはならなかつた。た

だ、

「そうですか」と云つてむずかしい不満な顔をして宗助を見た。
「仕方がないよ。叔母さんだつて、安さんだつて、そう悪い料簡りようけんはないんだから」

「そりや、分つています」と弟は峻けわしい物の云い方をした。

「じゃおれが悪いつて云うんだろう。おれは無論悪いよ。昔こんにちから今日まで悪いところだらけな男だもの」

宗助は横になつて煙草たばこを吹かしながら、これより以上は何とも語らなかつた。小六も黙つて、座敷すみの隅に立ててあつた二枚折の抱一の屏風びやうぶを眺ながめていた。

「御前あの屏風を覚えてゐるかい」とやがて兄が聞いた。

「ええ」と小六が答えた。

「一昨日佐伯から届けてくれた。御父さんの持つてたもので、お

れの手に残ったのは、今じゃこれだけだ。これが御前の学資になるなら、今すぐにでもやるが、剥はげた屏風一枚で大学を卒業する訳にも行かずな」と宗助が云った。そうして苦笑しながら、「この暑いのに、こんなものを立てて置くのは、氣狂きちがいじみているが、入れておく所がないから、仕方がない」と云う述懐じゆっかいをした。小六はこの氣樂なような、ぐずのような、自分とは余りに懸かけ隔へだたっている兄を、いつも物足りなくは思うものの、いざと
いう場合に、けっして喧嘩けんかはし得なかつた。この時も急に癩癧かんしゃくの角つを折られた氣味で、

「屏風はどうでも好いが、これから先僕さきはどうしたもんでしよう」と聞き出した。

「それは問題だ。何しろことしいっぱいにきまれば好い事だから、まあよく考えるさ。おれも考えて置こう」と宗助が云った。

弟は彼の性質として、そんな中ぶらりんの姿は嫌きらである、学校へ出て落ちついて稽古けいこもできず、下調も手につかないような境遇は、とうてい自分には堪たえられないと云う訴うったえを切にやり出したが、宗助の態度は依然として変らなかつた。小六があまり癩かんの高い不平を並べると、

「そのくらいな事でそれほど不平が並べられれば、どこへ行つたつて大丈夫だ。学校をやめたつて、いっこう差支さしかえない。御前の方がおれよりよつぽどえらいよ」と兄が云つたので、話はそれぎり頓挫とんざして、小六はとうとう本郷へ歸つて行つた。

宗助はそれから湯を浴びて、晩食ばんめしを済まして、夜は近所の縁日へ御米といつしよに出掛けた。そうして手頃な花物を二鉢買つて、夫婦して一つずつ持つて歸つて来た。夜露にあてた方がよからうと云うので、崖下がけしたの雨戸を明けて、庭先にそれを二つ並

べて置いた。

蚊帳かやの中へ這入はいった時、御米は、

「小六さんの事はどうなつて」と夫に聞くと、

「まだどうもならないさ」と宗助は答えたが、十分ばかりの後のち夫婦ともすやすや寝入ねいった。

翌日眼が覚めて役所の生活が始まると、宗助はもう小六の事を考える暇を有もたなかつた。家へ帰つて、のっそりしている時ですら、この問題を確的はつきり眼の前に描えがいて明らかにそれを眺ながめる事を憚はばかつた。髪の毛の中に包んである彼の脳は、その煩わづらわしさに堪たえなかつた。昔は数学が好きで、随分込み入った幾何きかの問題を、頭の中で明瞭めいりょうな図にして見るだけの根気があつた事を憶おもい出すと、時日の割には非常に烈はげしく来たこの変化が自分にも恐ろしく映つた。

それでも日に一度ぐらひは小六の姿がぼんやり頭の奥に浮いて来る事があつて、その時だけは、あいつの将来も何とか考えておかなくつちやならないと云う氣も起つた。しかしすぐあとから、まあ急ぐにも及ぶまいぐらひに、自分と打ち消してしまふのが常であつた。そうして、胸の筋が一本鉤かぎに引つ掛つたよいうな心を抱いだいて、日を暮らしていた。

そのうち九月も末になつて、毎晩天あまの河がわが濃く見えるある宵よいの事、空から降つたように安之助がやつて来た。宗助にも御米にも思ひ掛けないほど稀たまな客なので、二人とも何か用があつての訪問だろうと推すいしたが、はたして小六に関する件であつた。

この間月島の工場へひょつくり小六がやつて来て云うには、自分の学資についての詳しい話は兄から聞いたが、自分も今まで学問をやつて来て、とうとう大学へ這はい入れずじまいになるの

はいかにも残念だから、借金でも何でもして、行けるところまで行きたいが、何か好い工夫はあるまいかと相談をかけるので、安之助はよく宗さんにも話して見ようと答えると、小六はたちまちそれを遮ぎ^{ささえ}つて、兄はどうてい相談になつてくれる人じゃない。自分が大学を卒業しないから、他も中途^{ひと}でやめるのは当然だぐらいに考えている。元来今度の事も元を糺^{ただ}せば兄が責任者であるのに、あの通りいつこう平気なもので、他が何を云つても取り合つてくれない。だから、ただ頼りにするのは君だけだ。叔母さんに正式に断わられながら、また君に依頼するのはおかしいようだが、君の方が叔母さんより話が分るだろうと思つて来たと云つて、なかなか動きそうもなかったそうである。

安之助は、そんな事はない、宗さんも君の事ではだいぶ心配して、近いうちまた家^{うち}へ相談に来るはずになつてゐるんだから

と慰めて、小六を帰したんだと云う。帰るときに、小六は袂たもとから半紙を何枚も出して、欠席届が入用だからこれに判を押してくれと請求して、僕は退学か在学か片がつくまでは勉強ができないから、毎日学校へ出る必要はないんだと云ったそうである。

安之助は忙がしいとかで、一時間足らず話して帰って行つたが、小六の所置については、兩人の間に具体的の案は別に出なかつた。いづれ緩ゆるくりみんなで寄つてきめよう、都合がよければ小六も列席するが好かろうというのが別れる時の言葉であつた。二人になつたとき、御米は宗助に、

「何を考えていらつしやるの」と聞いた。宗助は両手を兵児帯へこおびの間に挟はさんで、心持肩を高くしたなり、

「おれももう一返小六みたようになって見たい」と云つた。「こつちじゃ、向むこうがおれのような運命に陥おちるだろうと思つて心配して

いるのに、向じや兄貴なんざあ眼中にないから偉いや」

御米は茶器を引いて台所へ出た。夫婦はそれぎり話を切り上げて、また床を延べて寝た。夢の上に高い銀河が涼しく懸った。

次の週間には、小六も来ず、佐伯からの音信もなく、宗助の

家庭はまた平日の無事に帰った。夫婦は毎朝露に光る頃起きて、美しい日を廂の上に見た。夜は煤竹の台を着けた洋灯の両側に、長い影を描いて坐っていた。話が途切れた時はひそりとして、柱時計の振子の音だけが聞える事も稀ではなかった。

それでも夫婦はこの間に小六の事を相談した。小六がもしどうしても学問を続ける気なら無論の事、そうでなくても、今の下宿を一時引き上げなければならなくなるのは知れているが、そうすればまた佐伯へ帰るか、あるいは宗助の所へ置くよりほかに途はない。佐伯ではいったんああ云い出したようなものの、

頼んで見たら、当分宅へ置くぐらゐの事は、好意上してくれま
いものでもない。が、その上修業をさせるとなると、月謝小遣
その他は宗助の方で担任しなければ義理が悪い。ところがそれ
は家計上宗助の堪えるところでなかった。月々の収支を事細かに
計算して見た兩人は、

「どうてい駄目だね」

「どうしたつて無理ですわ」と云つた。

夫婦の坐つてゐる茶の間の次が台所で、台所の右に下女部屋、
左に六畳が一間ある。下女を入れて三人の小人数だから、この
六畳には余り必要を感じない御米は、東向の窓側にいつも自分
の鏡台を置いた。宗助も朝起きて顔を洗つて、飯を済ますと、
ここへ来て着物を脱ぎ更えた。

「それよりか、あの六畳を空けて、あすこへ来ちやいけなくつ

て」と御米が云い出した。御米の考えでは、こうして自分の方で部屋と食物だけを分担して、あとのところを月々いくらか佐伯から助^{すけ}て貰^{もら}ったなら、小六の望み通り大学卒業までやって行かれようと云うのである。

「着物は安さんの古いのや、あなたのを直して上げたら、どうかなるでしょう」と御米が云い添えた。実は宗助にもこんな考が、多少頭に浮かんでいた。ただ御米に遠慮がある上に、それほど気が進まなかつたので、つい口へ出さなかつたまでだから、細君からこう反対^{あべこべ}に相談を掛けられて見ると、固^{もと}よりそれを拒^{こば}むだけの勇氣はなかつた。

小六にその通りを通知して、御前さえそれで差支^{さしかえ}なければ、おれがもう一遍佐伯へ行つて掛合つて見るかと、手紙で問い合せると、小六は郵便の着いた晩、すぐ雨の降る中を、傘^{からかさ}に音を

立ててやつて来て、もう学資ができてしまったように嬉し^{うれ}がった。「何、叔母さんの方じゃ、こつちでいつまでもあなたの事を放り出したまんま、構わずにおくもんだから、それでああおつしやるのよ。なに兄さんだつて、もう少し都合が好ければ、疾^とうにもどうにかしたんですけれども、御存じの通りだから實際やむを得なかつたんですわ。しかしこつちからこう云つて行けば、叔母さんだつて、安さんだつて、それでも否^{いや}だとは云われないわ。きつとできるから安心していらつしやい。私^{わたし}受合^うわ」

御米にこう受合つて貰つた小六は、また雨の音を頭の上に受けて本郷へ帰つて行つた。しかし中一日置いて、兄さんはまだ行かないんですかと聞きに来た。また三日ばかり過ぎてから、今度は叔母さんの所へ行つて聞いたら、兄さんはまだ来ないそうだから、なるべく早く行くように勸^{すす}めてくれと催促して行つ

た。

宗助が行く行くと云つて、日を暮らしているうちに世の中はようやく秋になった。その朗らかな或日曜の午後、宗助はあまり佐伯へ行くのが後おくれるので、この要件を手紙に認しためて番町へ相談したのである。すると、叔母から安之助は神戸へ行つて留守だと云う返事が来たのである。

五

門
佐伯さえぎの叔母の尋ねて来たのは、土曜の午後の二時過であつた。その日は例になく朝から雲が出て、突然と風が北に変わったように寒かつた。叔母は竹で編んだ丸い火桶ひおけの上へ手を翳かざして、「何ですね、御米およねさん。この御部屋は夏は涼しそうで結構だが、

これからちと寒うござんすね」と云った。叔母は癖のある髪を、奇麗きれに髷まげに結いつて、古風な丸打の羽織ひもの紐ひもを、胸の所で結んでいた。酒の好きな質たちで、今でも少しずつは晩酌をやるせいか、色沢いろつやもよく、でっぷり肥ふとっているから、年よりはよほど若く見える。御米は叔母が来るたんびに、叔母さんは若いのねと、後あとでよく宗助そうすけに話した。すると宗助がいつでも、若いはずだ、あの年になるまで、子供をたつた一人しか生まないんだからと説明した。御米は実際そうかも知れないと思つた。そうしてこゝう云われた後では、折々そつと六畳へ這はい入いつて、自分の顔を鏡に映して見た。その時は何だか自分の頬ほおが見るたびに瘡こけて行くような気がした。御米には自分と子供とを連想して考えるほど辛い事つらはなかつたのである。裏の家主の宅うちに、小さい子供が大勢いて、それが崖がけの上の庭へ出て、ブランコへ乗つたり、鬼

ごつこをやつたりして騒ぐ声が、よく聞えると、御米はいつも、はかないような恨めしいような心持になった。今自分の前に坐っている叔母は、たった一人の男の子を生んで、その男の子が順当に育つて、立派な学士になったればこそ、叔父が死んだ今日でも、何不足のない顔をして、腮などは二重に見えるくらいに豊かなのである。御母さんは肥っているから剣呑だ、気をつけないと卒中でやられるかも知れないと、安之助が始終心配するそうだけれども、御米から云わせると、心配する安之助も、心配される叔母も、共に幸福を享け合っているものと思われなかった。

「安さんは」と御米が聞いた。

「ええようやくね、あなた。一昨日の晩帰りましてね。それでついつい御返事も後れちまつて、まことに済みませんような訳

で」と云つたが、返事の方はそれなりにして、話はまた安之助へ戻つて来た。

「あれもね、御蔭おかげさまでようやく学校だけは卒業しましたが、これからが大事のところ、心配でございます。——それでもこの九月から、月島の工場の方へ出る事になりました、まあさいわいとこの分で勉強さえして行つてくれれば、この末ともに、そう悪い事も無かうかと思つてゐるんですけれども、まあ若いものの事です、これから先どう変化へんげるか分りやしませんよ」御米はただ結構でございますとか、おめでとうございますとか云う言葉を、間々あいだあいだに挟はさんでいた。

「神戸へ参つたのも、全くその方の用向なので。石油発動機とか何とか云うものを鰹船かつおぶねへ据すえ付けるんだとかつてねあなた」御米にはまるで意味が分らなかつた。分らないながらただへ

ええと受けていると、叔母はすぐ後^{あと}を話した。

「私にも何のこったか、ちつとも分らなかつたんですが、安之助の講釈を聞いて始めて、おやそうかいと云うような訳でしてね。——もつとも石油発動機は今もつて分らないんですけれども」と云いながら、大きな声を出して笑った。「何でも石油を焚^たいて、それで船を自由にする器械なんだそうですが、聞いて見るとよほど重宝なものらしいんですよ。それさえ付ければ、舟を漕^こぐ手間^{てま}がまるで省けるとかだね。五里も十里も沖へ出るのに、大変楽なんですとさ。ところがあなた、この日本全国で鰹船の数つたら、それこそ大したものでしょう。その鰹船が一つずつこの器械を具^{そな}え付けるようになったら、莫^{ばく}大^{だい}な利益だつて云うんで、この頃は夢中になつてその方ばかりに掛^かつていますように、莫^{ばく}大^{だい}な利益はありがたいが、そう凝^こつて身^{からだ}体でも

悪くしちやつまらないじゃないかつて、この間も笑ったくらいで」

叔母はしきりに鯉船と安之助の話をした。そうして大變得意のように見えたが、小六の事はなかなか云い出さなかった。もう疾とつに帰るはずの宗助もどうしたか帰つて来なかつた。

彼はその日役所の帰りがけに駿河台下するがだいしたまで来て、電車を下りて、酸すいものを頬張ほおばつたような口を穿すばめて一二町歩いた後のち、ある齒医者かどの門を潜くぐつたのである。三四日前彼は御米と差向いで、夕飯ぜんの膳ぜんに着いて、話しながら箸はしを取っている際に、どうした拍子か、前歯を逆にぎりりと噛かんでから、それが急に痛み出した。指で揺うごかすと、根がぐらぐらする。食事の時には湯茶が染しみみる。口を開けて息をすると風も染みた。宗助はこの朝齒を磨みがくために、わざと痛い所を避よけて楊枝ようじを使いながら、口の中を

鏡に照らして見たら、広島で銀を埋めた二枚の奥歯と、研いだように磨り減らした不揃の前歯とが、にわかには寒く光った。洋服に着換える時、

「御米、おれは歯の性がよつぽど悪いと見えるね。こうやると大抵動くぜ」と下歯を指で動かして見せた。御米は笑いながら、「もう御年のせいよ」と云つて白い襟を後へ廻つて襯衣へ着けた。

宗助はその日の午後とうとう思い切つて、歯医者へ寄つたのである。応接間へ通ると、大きな洋卓の周囲に天鵝絨で張つた腰掛が并んでいて、待ち合している三四人が、うずくまるように腮を襟に埋めていた。それが皆女であつた。奇麗な茶色の瓦斯暖炉には火がまだ焚いてなかつた。宗助は大きな姿見に映る白壁の色を斜めに見て、番の来るのを待つていたが、あまり退屈になつ

たので、洋卓の上に重ねてあつた雑誌に眼を着けた。一二冊手に取つて見ると、いずれも婦人用のものであつた。宗助はその口絵に出ている女の写真を、何枚も繰り返して眺めた。ながそれから「成功」と云う雑誌を取り上げた。その初めに、成效の秘訣ひけつというようなものが箇条書にしてあつたうちに、何でも猛進しなくつてはいけないと云う一力条と、ただ猛進してもいけない、立派な根底の上に立つて、猛進しなくつてはならないと云う一力条を読んで、それなり雑誌を伏せた。「成功」と宗助は非常に縁の遠いものであつた。宗助はこういう名の雑誌があると云う事さえ、今日まで知らなかつた。こんにちそれでまた珍らしくなつて、いったん伏せたのをまた開けて見ると、ふと仮名かなの交らない四角な字が二行ほど並んでいた。それには風碧落かぜへきらくを吹いて浮雲ふうん尽つき、月東山つきとうざんに上つて玉一団ぎよくいちだんとあつた。宗助は詩とか歌とかい

うものには、元から余り興味を持たない男であつたが、どう云う訳かこの二句を読んだ時に大変感心した。対句ついくが旨くうまできたとか何とか云う意味ではなくつて、こんな景色けしきと同じような心持になれたら、人間もさぞ嬉うれしかろうと、ひよつと心が動いたのである。宗助は好奇心からこの句の前に付いている論文を読んで見た。しかしそれはまるで無関係のように思われた。ただこの二句が雑誌を置いた後あとでも、しきりに彼の頭の中を徘徊はいかいした。彼の生活は實際この四五年来こういう景色に出逢つた事になかつたのである。

その時向うの戸が開あいて、紙片かみぎれを持った書生が野中さんと宗助を手術室へ呼び入れた。

中へ這入はいると、そこは応接間よりは倍も広かつた。光線がなるべく余計取れるように明るく拵こしらえた部屋の二側ふたがわに、手術用

の椅子いすを四台ほど据すえて、白い胸掛をかけた受持の男が、一人ずつ別々に療治をしていた。宗助は一番奥の方にある一脚に案内されて、これへと云われるので、踏段のようなものの上へ乗つて、椅子へ腰をおろした。書生が厚い縞入しまいりの前掛で丁寧ていねいに膝ひざから下を包くるんでくれた。

こう穏おだやかに寝ねかされた時、宗助は例の齒がさほど苦になるほど痛んでいないと云う事を発見した。そればかりか、肩も背せなも、腰の周りまわりも、心安く落ちついて、いかにも楽に調子が取れている事に気がついた。彼はただ仰向あおむいて天井てんじようから下っている瓦斯管ガスかんを眺めた。そうしてこの構かまえと設備では、帰りがけに思つたより高い療治代を取られるかも知れないと氣遣きづかつた。

ところへ顔の割に頭の薄くなり過ぎた肥ふとつた男が出て来て、大変丁寧ていねいに挨拶あいさつをしたので、宗助は少し椅子の上で狼狽あわてたよう

に首を動かした。肥った男は一応容体を聞いて、口中を検査して、宗助の痛いと言ふ齒をちよつと揺つて見たが、

「どうもこう弛みますと、とても元のように緊る訳には参りませんまいと思いますが。何しろ中がエソになつておりますから」と云つた。

宗助はこの宣告を淋しい秋の光のように感じた。もうそんな年なんでしょうかと聞いて見たくなつたが、少しきまりが悪いので、ただ、

「じゃ癒らないんですか」と念を押した。

肥った男は笑いながらこう云つた。――

「まあ癒らないと申し上げるよりほかに仕方がござんせん。やむを得なければ、思い切つて抜いてしまふんですが、今のところでは、まだそれほどでもございますまいから、ただ御痛み

だけを留めておきましょう。何しろエソ——エソと申しても御分りにならないかも知れませんが、中がまるで腐っております」

宗助は、そうですかと云つて、ただ肥った男のなすがままにしておいた。すると彼は器械をぐるぐる廻して、宗助の齒の根へ穴を開け始めた。そうしてその中へ細長い針のようなものを刺し通しては、その先を嗅いでいたが、しまいに糸ほどの筋を引き出して、神経がこれだけ取れましたと云いながら、それを宗助に見せてくれた。それから薬でその穴を埋めて、明日またいらつしやいと注意を与えた。

椅子を下りるとき、身体が真直ぐになつたので、視線の位置が天井からふと庭先に移つたら、そこにあつた高さ五尺もあるうと云う大きな鉢栽の松が宗助の眼に這入つた。その根方の所を、草鞋がけの植木屋が丁寧に薦で包んでいた。だんだん露が

凝^こつて霜^{しも}になる時節なので、余裕^{よゆう}のあるものは、もう今時分から手廻しをするのだと気がついた。

帰りがけに玄関脇の薬局で、粉薬^{こなすり}のまま含嗽^{がんそうざい}剤を受取つて、

それを百倍の微温湯^{びおんとう}に溶解して、一日十数回使用すべき注意を

受けた時、宗助は会計の請求した治療代の案外^{れん}廉^{れん}なのを喜んだ。

これならば向うで云う通り四五回通^{かよ}つたところが、さして困難

でもないと思つて、靴を穿^はこうとすると、今度は靴の底がいつ

の間にか破れている事に気がついた。

宅^{うち}へ着いた時は一足違^{ひとあしちがひ}で叔母がもう帰つたあとであつた。宗

助は、

「おお、そうだったか」と云いながら、はなはだ面倒そうに洋

服を脱ぎ更^かえて、いつもの通り火鉢^{ひばち}の前に坐つた。御米^{おんめい}は襯衣^{シャツ}

や洋袴^{ズボン}や靴足袋^{くつたび}を一抱^{ひとかかえ}にして六畳へ這^{はい}入つた。宗助はぼんやり

して、煙草^{たばこ}を吹かし始めたが、向うの部屋で、刷毛^{ブラッシ}を掛ける音がし出した時、

「御米、佐伯の叔母さんは何とか云つて来たのかい」と聞いた。齒痛^{しつう}が自^{おのず}から治^{おさ}まったので、秋に襲^{おそ}われるような寒い気分は、少し軽くなつたけれども、やがて御米が隠袋^{ボツケット}から取り出して来た粉薬を、温^{ぬる}ま湯に溶^といて貰^{もら}つて、しきりに含嗽^{うがい}を始めた。その時彼は縁側^{えんがわ}へ立つたまま、

「どうも日が短かくなつたなあ」と云つた。

やがて日が暮れた。昼間からあまり車の音を聞かない町内は、宵^{よい}の口^{くち}から寂^{しん}としていた。夫婦は例の通り洋灯^{ランプ}の下^{もと}に寄つた。広い世の中で、自分達の坐っている所だけが明るく思われた。そうしてこの明るい灯影に、宗助は御米だけを、御米は宗助だけを意識して、洋灯の力の届かない暗い社会は忘れていた。彼

らは毎晩こう暮らして行く裡に、自分達の生命を見出していたのである。

この静かな夫婦は、安之助の神戸から土産に買つて来たと云う養老昆布の缶をがらがら振つて、中から山椒入りの小さく結んだ奴を撰り出しながら、緩くり佐伯からの返事を語り合つた。「しかし月謝と小遣ぐらいは都合してやつてくれても好きそうなもんじゃないか」

「それができないんだつて。どう見積つても両方寄せると、十円にはなる。十円と云う纏つた御金を、今のところ月々出すのは骨が折れるつて云うのよ」

「それじゃことしの暮まで二十何円ずつか出してやるのも無理じゃないか」

「だから、無理をしても、もう一二カ月のところだけは間に合

せるから、そのうちにどうかして下さいと、安さんがそう云うんだって」

「實際できないのかな」

「そりや私わたしには分らないわ。何しろ叔母さんが、そう云うのよ」

「鰹舟かつおぶねで儲けたら、そのくらい訳なきそうなもんじやないか」

「本当ね」

御米は低い声で笑った。宗助もちよつと口の端はたを動かしたが、話はそれで途切とぎれてしまった。しばらくしてから、

「何しろ小六は家うちへ来るときめるよりほかに道はあるまいよ。後はその上の事だ。今じゃ学校へは出ているんだね」と宗助あとが云った。

「そうでしょう」と御米が答えるのを聞き流して、彼は珍らしく書斎に這入はいった。一時間ほとして、御米がそつと襖ふすまを開あけて

覗^{のぞ}いて見ると、机に向つて、何か読んでいた。

「勉強？　もう御休みなさなくなつて」と誘われた時、彼は振り返つて、

「うん、もう寝よう」と答えながら立ち上つた。

寝る時、着物を脱いで、寝巻の上に、絞^{しぼ}りの兵児帯^{へこおび}をぐるぐる巻きつけながら、

「今夜は久し振に論語を読んだ」と云つた。

「論語に何かあつて」と御米が聞き返したら、宗助は、

「いや何にもない」と答えた。それから、「おい、おれの齒はやつぱり年のせいだとき。ぐらぐらするのはとても癒^{なお}らないそ
うだ」と云いつつ、黒い頭を枕の上に着けた。

こゝろく
小六はともかくも都合しだい下宿を引き払つて兄の家へ移る

事に相談が調つた。ととの御米は六畳に置きつけた桑くわの鏡台を眺ながめて、

ちよつと残り惜しい顔をしたが、

「こうなると少し遣場やりばに困るのね」と訴えるように宗助そうすけに告げ

た。實際ここを取り上げられては、御米の御化粧おつくりをする場所が

無くなつてしまふのである。宗助は何の工夫もつかずに、立ち

ながら、向うの窓側まどぎわに据すえてある鏡の裏を斜はすに眺ながめた。すると

角度の具合で、そこに御米の襟元えりもとから片頬が映つていた。それ

がいかに血色のわるい横顔なのに驚ろかされて、

「御前おまい、どうかしたのかい。大変色が悪いよ」と云いながら、鏡

から眼を放して、實際の御米の姿を見た。鬢びんが乱れて、襟うしろの後

の辺あたりが垢あかで少し汚よごれていた。御米はただ、

「寒いせいなんでしょう」と答えて、すぐ西側に付いている。一間いつけんの戸棚とだなを明けた。下には古い創きずだらけの箆たんす筥はこがあつて、上には支那鞆しななばんと柳行李やなぎざりが二つ三つ載のつていた。

「こんなもの、どうしたつて片づけようがないわね」

「だからそのままにしておくさ」

小六のここへ引移つて来るのは、こう云う点から見て、夫婦のいずれにも、多少迷惑であつた。だから来ると云つて約束しておきながら、今だに來ない小六に対しては、別段の催促もしなかつた。一日延びれば延びただけ窮屈きよくが逃げたような気がどこかでした。小六にもちようどそれと同じ憚はばかりがあつたので、いられる限かぎりは下宿にいる方が便利だと胸をきめたものか、つい一日一日と引越さきを前へ送つていた。その癖くせ彼の性質として、兄夫婦のごとく、荏苒じんぜんの境に落ちついてはいられなかつたのである。

そのうち薄い霜しもが降りて、裏の芭蕉ばしやうを見事に摧くだいた。朝は崖上がけうえの家主やぬしの庭の方で、鴨ひよどりが鋭えいどい声を立てた。夕方には表を急ぐ豆腐屋の喇叭らっばに交つて、円明寺の木魚の音が聞えた。日はますます短かくなつた。そうして御米の顔色は、宗助が鏡の中に認めた時よりも、爽さやかにはならなかつた。夫が役所おつとから歸つて来て見ると、六畳で寝ている事が一二度あつた。どうかしたかと尋ねると、ただ少し心持が悪いと答えるだけであつた。医者に見て貰えと勧めると、それには及ばないと云つて取り合なかつた。

宗助は心配した。役所へ出ていてもよく御米の事が気にかかつて、用の邪魔になるのを意識する時もあった。ところがある日帰りがけに突然電車の中で膝ひざを拍うつた。その日は例になく元氣よく格子こうしを明けて、すぐと勢いきおいよく今日はどうかいと御米に聞いた。

御米がいつもの通り服や靴足袋くつたびを一纏ひとまとめにして、六畳へ這入はいる後あとから追ついて来て、

「御米、御前おまい子供ができたんじゃないか」と笑いながら云った。

御米は返事もせず俯向うつむいてしきりに夫の背広せびろの埃ほこりを払った。刷毛ブラッシの音がやんでもなかなか六畳から出て来ないので、また行つて見ると、薄暗い部屋の中で、御米はたつた一人寒そうに、鏡台の前に坐すわつていた。はいと云つて立つたが、その声が泣いた後の声のようであつた。

その晩夫婦は火鉢ひばちに掛けた鉄瓶てつびんを、双方から手で掩おおうようにして差し向つた。

「どうですな世の中は」と宗助が例にない浮いた調子を出した。御米の頭の中には、夫婦にならない前の、宗助と自分の姿が奇麗きれいに浮んだ。

「ちつと、面白くしようじゃないか。この頃はいかにも不景氣だよ」と宗助がまた云った。二人はそれから今度の日曜にはいっしょにどこへ行こうか、ここへ行こうかと、しばらくそればかり話し合っていた。それから二人の春着の事が題目になった。宗助の同僚の高木とか云う男が、細君に小袖こそでとかを強請ねだられた時、おれは細君の虚栄心を満足させるために稼かせいでるんじゃないと云って跳はねつけたら、細君がそりや非道ひどい、實際寒くなつても着て出るものがないんだと弁解するので、寒ければやむを得ない、夜具を着るとか、毛布けつとを被かぶるとかして、当分我慢しろと云った話を、宗助はおかしく繰り返して御米を笑わした。御米は夫のこの様子を見て、昔がまた眼の前に戻ったような気がした。

「高木の細君は夜具でも構わないが、おれは一つ新らしい外マント套

を拵こしらえたいな。この間齒匠者へ行つたら、植木屋が薦こもで盆栽ぼんさいの松の根を包んでいたので、つくづくそう思つた」

「外套が欲しいって」

「ああ」

御米は夫の顔を見て、さも氣の毒だと云う風に、

「御拵おこしらえなさいな。月賦で」と云つた。宗助は、

「まあ止そうよ」と急に佻わびしく答えた。そうして「時に小六はいつから来る氣なんだろう」と聞いた。

「来るのは厭きらなんでしょう」と御米が答えた。御米には、自分

が始めから小六に嫌きらわれていると云う自覚があつた。それでも

夫の弟だと思ふので、なるべくは反そりを合せて、少しでも近づけ

るように近づけるようにと、今日こんにちまで仕向けて来た。そのため

か、今では以前と違つて、まあ普通の小舅こじゅうとぐらいの親しみはあ

ると信じているようなものの、こんな場合になると、つい實際以上にも氣を回して、自分だけが小六の来ない唯一ゆいいつの原因のよう
に考えられるのであつた。

「そりや下宿からこんな所へ移るのは好かあないだろうよ。ちやうどこつちが迷惑を感じる通り、向うでも窮屈を感じる訳だから。おれだつて、小六が来ないとすれば、今のうち思い切つて外套マントを作るだけの勇氣があるんだけれども」

宗助は男だけに思い切つてこう云つてしまった。けれどもこれだけでは御米の心を尽していなかつた。御米は返事もせず、しばらく黙つていたが、細い腮あごを襟えりの中へ埋うめたまま、上眼うわめを使つて、

「小六さんは、まだ私の事を悪にくんでいらつしやるでしようか」と聞き出した。宗助が東京へ来た当座は、時々これに類似の質

問を御米から受けて、その都度慰めるのにだいぶ骨の折れた事もあつたが、近來は全く忘れたように何も云わなくなつたので、宗助もつい氣に留めなかつたのである。

「またヒステリーが始まつたね。好いじゃないか小六なんぞが、どう思つたつて。おれさえついてれば」

「論語にそう書いてあつて」

御米はこんな時に、こういう冗談を云う女であつた。宗助は「うん、書いてある」と答えた。それで二人の会話がしまひになつた。

翌日宗助が眼を覚ますと、亜鉛張の庇の上で寒い音がした。御米が襦掛たすきがけのまま枕元へ来て、

「さあ、もう時間よ」と注意したとき、彼はこの点滴の音を聞きながら、もう少し暖かい蒲団ふとんの中に温ぬくもつていたかつた。け

れども血色のよくない御米の、かいがいしい姿を見るや否や、
「おい」と云つて直起き上つた。

外は濃い雨に鎖されていた。崖の上の孟宗竹が時々鬣を振う
ように、雨を吹いて動いた。この侘びしい空の下へ濡れに出る
宗助に取つて、力になるものは、暖かい味噌汁と暖かい飯より
ほかになかつた。

「また靴の中が濡れる。どうしても二足持つていないと困る」
と云つて、底に小さい穴のあるのを仕方なしに穿いて、洋袴の
裾を一寸ばかりまくり上げた。

午過に帰つて来て見ると、御米は金盥の中に雑巾を浸けて、
六畳の鏡台の傍に置いていた。その上の所だけ天井の色が變つ
て、時々雫が落ちて来た。

「靴ばかりじゃない。家の中まで濡れるんだね」と云つて宗助

は苦笑した。御米はその晩夫のために置炬燵へ火を入れて、ス
コッチの靴下と縞羅紗しまらしやの洋袴ズボンを乾かした。

あく
明る日もまた同じように雨が降った。夫婦もまた同じように
同じ事を繰り返した。その明る日もまだ晴れなかった。三日目
の朝になって、宗助は眉まゆを縮めて舌打をした。

「いつまで降る気なんだ。靴がじめじめして我慢にも穿はけやし
ない」

「六畳だつて困るわ、ああ漏もつちや」

夫婦は相談して、雨が晴れしだい、家根を繕つくろつて貰うように
家主やぬしへ掛け合う事にした。けれども靴の方は何ともしようがな
かった。宗助はきしんで這入はいらないのを無理に穿はいて出て行っ
た。

さいわい
幸にその日は十一時頃からからりと晴れて、垣すずめに雀の鳴く

こはるびより
小春日和になった。宗助が帰った時、御米は例より冴え冴えしい顔色をして、

「あなた、あの屏風びようぶを売っちゃいけなくって」と突然聞いた。抱一ほういつの屏風はせんだつて佐伯さえきから受取ったまま、元の通り書斎の隅に立ててあつたのである。二枚折だけれども、座敷の位置と広さから云つても、実はむしろ邪魔な装飾であつた。南へ廻すと、玄関からの入口を半分塞ふさいでしまうし、東へ出すと暗くなる、と云つて、残る一方へ立てれば床の間を隠すので、宗助は、

「せつかく親爺おやじの記念かたみだと思つて、取つて来たようなものの、しようがないねこれじゃ、場塞ばふさげで」と零こぼした事も一二度あつた。その都度つど御米は真丸な縁ふちの焼けた銀の月と、絹地からほとんど区別できないような穂芒ほすきの色を眺ながめて、こんなものを珍重

する人の気が知れないと云うような見えをした。けれども、夫
を憚はばつて、明白あからさまには何とも云い出さなかつた。ただ一返いつぺん

「これでもいい絵なんでしょうかね」と聞いた事があつた。そ
の時宗助は始めて抱一の名を御米に説明して聞かした。しかし
それは自分が昔むかし父から聞いた覚おぼえのある、朧おぼろげ氣な記憶を好加減
に繰り返すに過ぎなかつた。實際の画えの価値や、また抱一につ
いての詳しい歴史などに至ると宗助にもその実じつはなはだ覚束おぼつかな
かつたのである。

ところがそれが偶然御米のために妙な行為の動機を構成かたちづする
因となつた。過去一週間夫と自分の間に起つた会話に、ふとこ
の知識を結びつけて考え得た彼女はちよつと微笑ほほえんだ。この日
雨が上つて、日脚ひあしがさつと茶の間の障子しょうじに射した時、御米は不
断着の上へ、妙な色の肩掛とも、襟卷えりまきともつかない織物を纏まとつ

て外へ出た。通りを二丁目ほど来て、それを電車の方角へ曲つて真直まっすぐに來ると、乾物屋かんぶつと麵麩屋パンの間に、古道具を売っているかなり大きな店があつた。御米はかつてそこで足の畳み込める食卓を買つた記憶がある。今火鉢ひばちに掛けてある鉄瓶てつびんも、宗助がここから提さげて歸つたものである。

御米は手そでを袖にして道具屋の前に立ち留まつた。見ると相變らず新らしい鉄瓶がたくさん並べてあつた。そのほかには時節柄とでも云うのか火鉢ひばちが一番多く眼に着いた。しかし骨董こつとうと名のつくほどのものは、一つもないようであつた。ひとり何とも知れぬ大きな亀こうの甲まむこうが、真向に釣るしてあつて、その下から長い黄ばんだほっす弘子しつぽが尻尾しつぽのように出ていた。それから紫檀したんの茶棚ちやだなが一つ二つ飾つてあつたが、いずれも狂くるいの出なまそうな生なまなものばかりであつた。しかし御米にはそんな区別はいっこう映らなかつ

た。ただ掛物も屏風も一つも見当らない事だけ確かめて、中へ這入った。

御米は無論夫が佐伯から受取った屏風を、いくらかに売り払うつもりでわざわざここまで足を運んだのであるが、広島以来こう云う事にだいぶ経験を積んだ御蔭で、普通の細君のような努力も苦痛も感ぜずに、思い切つて亭主と口を利く事ができた。亭主は五十恰好の色の黒い頬の瘡けた男で、鼈甲の縁を取った馬鹿に大きな眼鏡を掛けて、新聞を読みながら、疣だらけの唐金の火鉢に手を翳していた。

「そうですね、拝見に出てもようがす」と軽く受合つたが、別に気の乗った様子もないので、御米は腹の中で少し失望した。しかし自分からがすでに大した望を抱いて出て来た訳でもないので、こう簡易に受けられると、こつちから頼むようにしても、

見て貰わなければならなかつた。

「ようがす。じゃのちほど伺いましょう。今小僧がちよつと出ておりませんからな」

御米はこの存在ぞんざいな言葉を聞いてそのまま宅うちへ帰つたが、心の中では、はたして道具屋が来るか来ないかはなほだ疑わしく思つた。一人でいつものように簡単な食事を済まして、清きよに膳を下げさしていると、いきなり御免下さいと云つて、大きな声を出して道具屋が玄関からやつて来た。座敷へ上げて、例の屏風を見せると、なるほどと云つて裏だの縁だのを撫なでていたが、

「御お払はらになるなら」と少し考えて、「六円に頂いておきましよう」

と否々いやいやそうに価ねを付けた。御米には道具屋の付けた相場が至当のように思われた。けれども一応宗助に話してからでなくつては、余り専断過ぎると心づいた上、品物の歴史が歴史だけに、な

おさら遠慮して、いずれ帰つたらよく相談して見た上でと答えたまま、道具屋を帰そうとした。道具屋は出掛に、

「じゃ、奥さんせつかくだから、もう一円奮発しましょう。それで御払い下さい」と云つた。御米はその時思い切つて、

「でも、道具屋さん、ありや抱一ほういつですよ」と答えて、腹の中ではひやりとした。道具屋は、平気で、

「抱一は近來流行はやりませんからな」と受け流したが、じろじろ御米の姿を眺ながめた上、

「じゃなおよく御相談なすつて」と云い捨てて帰つて行つた。

御米はその時の模様を詳しく話した後あとで、

「売っちゃいけなくなつて」とまた無邪氣に聞いた。

宗助の頭の中には、この間から物質上の欲求が、絶えず動いていた。ただ地味な生活をしなれた結果として、足らぬ家計くらしを足

ると諦^{あき}らめる癖がついているので、毎月きまつて這^{はい}入るものほかに、臨時に不意の工面^{くめん}をしてまで、少しでも常以上に寛^{くわ}ろいでみようと言ふ働は出なかつた。話を聞いたとき彼はむしろ御米の機敏な才覚に驚ろかされた。同時にはたしてそれだけの必要があるかを疑つた。御米の思^{おも}わくを聞いて見ると、ここで十円足らずの金が入^{はい}れば、宗助の穿^はく新らしい靴を逃^{あつ}らえた上、銘仙^{めいせん}の一反ぐらゐは買えると云うのである。宗助はそれもそうだと思つた。けれども親から伝わつた抱一^{びようぶ}の屏風を一方に置いて、片方に新らしい靴及び新らしい銘仙^{めいせん}を並べて考えて見ると、この二つを交換する事がいかにも突飛^{とつび}でかつ滑稽^{こっけい}であつた。

「売るなら売つていいがね。どうせ家^{うち}に在^あつたつて邪魔になるばかりだから。けれどもおれはまだ靴は買わないでも済むよ。

この間中みたように、降り続けに降られると困るが、もう天気も好くなつたから」

「だつてまた降ると困るわ」

宗助は御米に対して永久に天気を保証する訳にも行かなかつた。御米も降らない前に是非屏風を売れとも云いかねた。二人は顔を見合して笑つていた。やがて、

「安過ぎるでしょうか」と御米が聞いた。

「そうさな」と宗助が答えた。

彼は安いと云われれば、安いような気がした。もし買手があれば、買手の出すだけの金はいくらでも取りたかつた。彼は新聞で、近来古書画の入札が非常に高価になつた事を見たような心持がした。せめてそんなものが一幅でもあつたらと思つた。けれどもそれは自分の呼吸する空気の届くうちには、落ちてい

ないものと諦めていた。あきら

「買手にも因るよだろうが、売手にも因るんだよ。いくら名画だつて、おれが持っていた分にはとうていそう高く売れっこはないさ。しかし七円や八円でえな、余り安あんまいようだね」

宗助は抱一の屏風を弁護すると共に、道具屋をも弁護するよ
うな語氣を洩もらした。そうしてただ自分だけが弁護に価あたしない
もののように感じた。御米も少し氣を腐らした氣味で、屏風の
話はそれなりにした。

翌日あくるひ宗助は役所へ出て、同僚の誰彼にこの話をした。すると
皆申し合せたように、それは価ねじやないと云った。けれども誰
も自分が周旋して、相当の価に売払つてやろうと云うものはな
かった。またどう云う筋を通れば、馬鹿な目に逢わないで済む
という手続を教えてくれるものもなかった。宗助はやっぱり横

町の道具屋に屏風を売るよりほかに仕方がなかった。それでなければ元の通り、邪魔でも何でも座敷へ立てておくよりほかに仕方がなかった。彼は元の通りそれを座敷へ立てておいた。すると道具屋が来て、あの屏風を十五円に売ってくれと云い出した。夫婦は顔を見合して微笑ほほえんだ。もう少し売らずに置いてみようじゃないかと云つて、売らずにおいた。すると道具屋がまた来た。また売らなかった。御米は断るのが面白くなつて来た。四度目には知らない男を一人連れて来たが、その男とこそこそ相談して、とうとう三十五円に価を付けた。その時夫婦も立ちながら相談した。そうしてついに思い切つて屏風を売り払った。

円明寺の杉が焦こげたように赭黒あかぐろくなつた。天氣の好い日には、風に洗そうすけわれた空の端はずれに、白い筋の嶮けわしく見える山が出た。年は宗助夫婦を駆かつて日ごとに寒い方へ吹き寄せた。朝になると欠かさず通る納豆売なつとうりの聲が、瓦かわらを鎖とざす霜しもの色を連想せしめた。宗助は床の中でその声を聞きながら、また冬が来たと思ひ出した。御米およねは台所で、今年も去年のように水道の栓せんが氷つてくれなければ助かるがと、暮から春へ掛けての取越苦勞をした。夜になると夫婦とも炬燵こたつにばかり親しんだ。そうして広島や福岡の暖かい冬を羨うらやんだ。

「まるで前の本多さんみたようね」と御米が笑つた。前の本多さんと云うのは、やはり同じ構内かまえうちに住んで、同じ坂井の貸家を借りている隠居夫婦であつた。小女こおんなを一人使つて、朝から晩までことりと音もしないように静かな生計くらしを立てていた。御米が

茶の間で、たつた一人裁縫しじとをしていると、時々御爺おじいさんと云う声こゑがした。それはこの本多の御婆おばさんが夫を呼ぶ声であつた。かどぐち門口などで行き逢うと、丁寧ていねいに時候の挨拶あいさつをして、ちと御話にいらつしやいと云うが、ついぞ行つた事もなければ、向うからも来た試ためしがない。したがつて夫婦の本多さんに関する知識きしきは極めて乏乏しかった。ただ息子が一人あつて、それが朝鮮ちようかんの統監府とかで、立派な役人になつてゐるから、月々その方の仕送しおくりで、氣楽に暮らして行かれるのだと云う事だけを、出入でいりの商人のあるものから耳にした。

「御爺さんはやつぱり植木を弄いじつてゐるかい」

「だんだん寒くなつたから、もうやめたんでしよう。縁の下に植木鉢がたくさん並んでるわ」

話はそれから前の家うちを離れて、家主やぬしの方へ移つた。これは、

本多とはまるで反対で、夫婦から見ると、この上もない賑にぎやか
そうな家庭に思われた。この頃は庭が荒れているので、大勢の
小供が崖がけの上へ出て騒ぐ事はなくなつたが、ピヤノの音は毎晩
のようにする。折々は下女か何ぞの、台所の方で高笑をする声
さえ、宗助の茶の間まで響いて来た。

「ありやいつたい何をする男なんだい」と宗助が聞いた。この
間は今までも幾度か御米に向つて繰り返されたものであつた。
「何にもしないで遊あそんでるんでしよう。地面や家作を持つて」
と御米が答えた。この答も今までにもう何遍か宗助に向つて繰
り返されたものであつた。

宗助はこれより以上立ち入つて、坂井の事を聞いた事がなかつ
た。学校をやめた当座は、順境にいて得意な振舞をするものに
逢うと、今に見ろと云う氣も起つた。それがしばらくすると、

単なる憎惡ぞうおの念に變化した。ところが一二年このかたは全く自他の差違むとんじやくに無頓着むとんじやくになつて、自分は自分のように生れついたもの、先は先のような運を持つて世の中へ出て來たもの、両方共始から別種類の人間だから、ただ人間として生息する以外に、何の交渉も利害もないのだと考えるようになってきた。たまに世間話のついでとして、ありやいつたい何をしている人だぐらいは聞きもするが、それより先は、教えて貰う努力さえ出すのが面倒だつた。御米にもこれと同じ傾かたきがあつた。けれどもその夜は珍らしく、坂井の主人は四十恰好かっこうの髯ひげのない人であると言ふ事やら、ピアノを弾くのは惣領そうりょうの娘で十二三になると言ふ事やら、またほかの家の小供うちが遊びに來ても、ブランコへ乗せてやらないと言ふ事やらを話した。

「なぜほかの家の子供はブランコへ乗せないんだい」

「つまり吝けちなんでしょう。早く悪くなるから」

宗助は笑い出した。彼はそのくらい吝けちな家主が、屋根が漏ると云えば、すぐ瓦師かわらしを寄こしてくれる、垣が腐つたと訴えればすぐ植木屋に手を入れさしてくれるのは矛盾だと思ったのである。

その晩宗助の夢には本多の植木鉢も坂井のブランコもなかった。彼は十時半頃床に入つて、万象に疲れた人のように鼾いびきをかいた。この間から頭の具合がよくないため、寝付ねつきの悪いのを苦にしていた御米は、時々眼を開けて薄暗い部屋を眺ながめた。細い灯が床の間の上に乗せてあつた。夫婦は夜中灯火よじゅうあかりを点つけておく習慣がついているので、寝る時はいつでも心しんを細目にして洋灯ランプをここへ上げた。

御米は気にするように枕の位置を動かした。そうしてそのた

びに、下したにしている方の肩の骨を、蒲団ふとんの上で滑すべらした。しま
いには腹はら這ばいになつたまま、両肱りょうひじを突ついて、しばらく夫の方を眺
めていた。それから起き上あつて、夜具すその裾に掛けてあつた不断
着ねまきを、寝巻ねまきの上へ羽織はつたなり、床の間の洋灯を取り上げた。
「あなたあなた」と宗助の枕元へ来て曲こみながら呼んだ。その
時夫はもう鼾いをかいていなかった。けれども、元の通り深い眠
から来る呼吸いきを續つけていた。御米はまた立ち上あつて、洋灯を手
にしたまま、間あいの襖ふすまを開ひけて茶の間へ出た。暗い部屋が茫漠手
元の灯に照らされた時、御米は鈍く光る箆たんすの環かんを認めた。そ
れを通り過くぎると黒く燻くすぶつた台所に、腰障子こししょうじの紙だけが白く
見えた。御米は火の氣けのない真中に、しばらく佇たたずんでいたが、
やがて右手に当る下女部屋の戸を、音のしないようにそつと引
いて、中へ洋灯の灯を翳かした。下女は縞しまも色も判然映はつきりらない夜

具の中に、土竜もぐらのごとく塊かたまつて寝ていた。今度は左側の六畳を覗のぞいた。がらんとして淋さみしい中に、例の鏡台が置いてあつて、鏡の表が夜中だけに凄すごく眼に応こたえた。

御米は家中を一回回ひとまわりつた後あと、すべてに異状のない事を確かめた上、また床の中へ戻つた。そうしてようやく眼を眠つた。今度は好い具合に、眼蓋まぶたのあたりに氣を遣つかわないで済むように覚えて、しばらくするうちに、うとうととした。

するとまたふと眼が開あいた。何だかずしんと枕元で響いたよな心持がする。耳を枕から離して考えると、それはある大きな重いものが、裏の崖から自分達の寝ている座敷の縁の外へ転がり落ちたと思われなかった。しかし今眼が覚さめるすぐ前に起つた出来事で、けつして夢の続じゃないと考えた時、御米は急に氣味を悪くした。そうして傍に寝ている夫の夜具そでの袖を

引いて、今度は真面目まじめに宗助を起し始めた。

宗助はそれまで全くよく寝ていたが、急に眼が覚めると、御米が、

「あなたたちよつと起きて下さい」と揺ゆつていたので、半分は夢中に、

「おい、好し」とすぐ蒲団ふとんの上へ起き直った。御米は小声で先刻さつぎからの様子を話した。

「音は一遍ぎりした限なのかい」

「だって今したばかりなのよ」

二人はそれで黙った。ただじつと外の様子を伺っていた。けれども世間は森しんと静であつた。いつまで耳そはだを峙そはだてていても、再び物の落ちて来る気色けしきはなかつた。宗助は寒いと云いながら、単衣ひとえの寝巻の上へ羽織かぶを被かぶつて、縁側えんがわへ出て、雨戸を一枚繰くつ

た。外を覗く^{のぞ}と何にも見えない。ただ暗い中から寒い空気がに
わかに肌^{せま}に逼^{せま}つて来た。宗助はすぐ戸を閉^たてた。

かきがね
鑢^{かきがね}をおろして座敷へ戻るや否や、また蒲団の中へ潜^{もぐ}り込んだ
が、

「何にも変つた事はありません。多分御前^{おまい}の夢だろう」と云つ
て、宗助は横になった。御米はけつして夢でないと主張した。
たしかに頭の上で大きな音がしたのだと固執^{こしつ}した。宗助は夜具
から半分出した顔を、御米の方へ振り向けて、

「御米、お前は神経が過敏になつて、近頃どうかしているよ。も
う少し頭を休めてよく寝る工夫でもしなくっちゃいけない」と
云つた。

その時次の間の柱時計が二時を打った。その音で二人とも
ちよつと言葉を途切らして、黙つて見ると、夜はさらに静まり

返つたように思われた。二人は眼が冴^さえて、すぐ寝つかれそうにもなかった。御米が、

「でもあなたは氣楽ね。横になると十分経^たたないうちに、もう寝ていらつしやるんだから」と云つた。

「寝る事は寝るが、氣が楽で寝られるんじゃない。つまり疲れるからよく寝るんだろう」と宗助が答えた。

こんな話をしていゝうちに、宗助はまた寝入ってしまった。

御米は依然として、のつそつ床の中で動いていた。すると表をがらがらと烈^{はげ}しい音を立てて車が一台通つた。近頃御米は時々夜明前の車の音を聞いて驚ろかされる事があつた。そうしてそれを思い合わせると、いつも似寄つた刻限なので、必竟^{ひつぎよう}は毎朝同じ車が同じ所を通るのだらうと推測した。多分牛乳を配達するためかなどで、ああ急ぐに違ないときめていたから、この音

を聞くと等しく、もう夜が明けて、隣人の活動が始つたごとくに、心丈夫になつた。そうこうしていると、どこかで鶏とりの声が聞えた。またしばらくすると、下駄げたの音を高く立てて往来を通るものがあつた。そのうち清きよが下女部屋の戸を開けて厠かわやへ起きた模様だつたが、やがて茶の間へ来て時計を見ているらしかつた。この時床の間に置いた洋灯ランプの油が減つて、短かい心しんに届かなくなつたので、御米の寝ている所は真暗になつていた。そこへ清の手にした灯火あかりの影が、襖ふすまの間から射し込んだ。

「清かい」と御米が声を掛けた。

清はそれからすぐ起きた。三十分ほど経たつて御米も起きた。また三十分ほど経つて宗助もついに起きた。平常いつもは好い時分に御米がやつて来て、

「もう起きてもよくつてよ」と云うのが例であつた。日曜とた

まの旗日^{はたひ}には、それが、

「さあもう起きてちょうだい」に変わるだけであつた。しかし今日は昨夕^{ゆうべ}の事が何となく気にかかるので、御米^{むかえ}の迎に來ないうち宗助は床を離れた。そうして直崖^{すぐ}下の雨戸を繰つた。

下から覗^{のぞ}くと、寒い竹が朝の空氣に鎖^{とぎ}されてじつとしてゐる後^{うしろ}から、霜^{しも}を破る日の色が射して、幾分^{いただき}か頂を染めていた。その二尺^{にじふ}ほど下の勾配^{こうばい}の一番急な所に生えている枯草が、妙に摺^すり剥^むけて、赤土の肌を生々^{なまなま}しく露出した様子に、宗助はちよつと驚ろかされた。それから一直線に降りて、ちようど自分の立つている縁鼻^{えんばな}の土が、霜柱を摧^{くだ}いたように荒れていた。宗助は大きな犬でも上から転がり落ちたのじやなかうかと思つた。しかし犬にしてはいくら大きいにしても、余り勢が烈し過ぎると思つた。

宗助は玄関から下駄を提^さげて来て、すぐ庭へ下りた。縁の先へ便所が折れ曲つて突き出しているの、いとど狭い崖下が、裏へ抜ける半間ほどの所はなおさら狭苦しくなっていた。御米は掃除屋^{そうじや}が来るたびに、この曲り角を気にしては、

「あすこがもう少し広いといいけれども」と危険^{あぶな}がるので、よく宗助から笑われた事があつた。

そこを通り抜けると、真直^{まつすぐ}に台所まで細い路が付いている。

元は枯枝の交つた杉垣があつて、隣の庭の仕切りになつていたが、この間家主が手を入れた時、穴だらけの杉葉を奇麗^{きれい}に取り払つて、今では節^{ふし}の多い板塀^{いたべい}が片側を勝手口まで塞^{ふさ}いでしまつた。日当りの悪い上に、樋^{とい}から雨滴^{あまだれ}ばかり落ちるので、夏になると秋海棠^{しゅうかいどう}がいっぱい生える。その盛りな頃は青い葉が重なり合つて、ほとんど通り路がなくなるくらい茂つて来る。始めて

越した年は、宗助も御米もこの景色けしきを見て驚ろかされたくらいである。この秋海棠は杉垣のまだ引き抜かれない前から、何年となく地下に蔓はびこっていたもので、古家ふるやの取り毀こぼれた今でも、時節が来ると昔の通り芽を吹くものと解った時、御米は、

「でも可愛いわね」と喜んだ。

宗助が霜を踏んで、この記念の多い横手へ出た時、彼の眼は細長い路次ろじの一点に落ちた。そうして彼は日の通わない寒さの中にはたと留まった。

彼の足元には黒塗まきえの蒔絵まきえの手文庫が放り出してあつた。中味

はわざわざそこへ持つて来て置いて行つたように、霜の上にちやんと据すわっているが、蓋ふたは二三尺離れて、堀へいの根に打ちつけられたごとくに引つ繰り返つて、中を張つた千代紙ちよがみの模様が判然はつきり見えた。文庫の中から洩もれた、手紙や書付類が、そこいらに遠慮

なく散らばっている中に、比較的長い一通がわざわざ二尺ばかり広げられて、その先が紙屑のごとく丸めてあつた。宗助は近づいて、この揉苦茶もみくちやになつた紙の下を覗のぞいて覚え苦笑した。下には大便が垂れてあつた。

土の上に散らばっている書類をひとまとめに一纏にして、文庫の中へ入れて、霜と泥に汚れたまま宗助は勝手口まで持つて来た。腰障子こししょうじを開けて、清に

「おいこれをちよつとそこへ置いてくれ」と渡すと、清は妙な顔をして、不思議そうにそれを受取つた。御米は奥で座敷へ払塵はたきを掛けていた。宗助はそれから懷手ふところをして、玄関だの門の辺あたりをよく見廻つたが、どこにも平常と異なる点は認められなかつた。

宗助はようやく家うちへ入つた。茶の間へ来て例の通り火鉢ひばちの前へ坐すわつたが、すぐ大きな声を出して御米を呼んだ。御米は、

「起き抜けにどこへ行つていらしたの」と云いながら奥から出て来た。

「おい昨夜枕元で大きな音がしたのは、やつぱり夢じゃなかったんだ。泥棒だよ。泥棒が坂井さんの崖がけの上から宅の庭うちへ飛び下りた音だ。今裏へ回つて見たら、この文庫が落ちていて、中にはいつていた手紙なんぞが、むちやくちやに放り出してあつた。おまけに御馳走ごちそうまで置いて行つた」

宗助は文庫の中から、二三通の手紙を出して御米に見せた。それには皆坂井みんなの名宛なあてが書いてあつた。御米は吃驚びっくりして立膝のまゝ、

「坂井さんじゃほかに何か取られたでしょうか」と聞いた。宗助は腕組うでぐみをして、

「ことに因よると、まだ何かやられたね」と答えた。

夫婦はともかくもと云うので、文庫をそこへ置いたなり朝飯の膳ぜんに着いた。しかし箸はしを動かす間まも泥棒の話は忘れなかった。御米は自分の耳と頭のたしかな事を夫に誇った。宗助は耳と頭のたしかでない事を幸福とした。

「そうおつしやるけれど、これが坂井さんでなくって、宅で御覧なさい。あなたみたように、ぐうぐう寝ていらしたら困るじゃないの」と御米が宗助をやり込めた。

「なに、宅なんぞへ這入はいる氣遣きづかいはないから大丈夫だ」と宗助も口の減らない返事をした。

そこへ清が突然台所から顔を出して、

「この間拵こしらえた旦那様の外套マントでも取られようものなら、それこそ騒ぎでございましたね。御宅おうちでなくって坂井さんだったから、本当に結構でございます」と真面目まじめに悦よろこびの言葉を述べたので、

宗助も御米も少し挨拶に窮した。

食事を済まして、出勤の時刻にはまだだいふ間があつた。坂井では定めて騒いでるだろうと云うので、文庫は宗助が自分で持つて行つてやる事にした。蒔絵ではあるが、ただ黒地に亀甲形を金で置いただけの事で、別に大して金目の物とも思えなかつた。御米は唐棧の風呂敷を出してそれを包んだ。風呂敷が少し小さいので、四隅を対う同志繋いで、真中にこま結びを二つ拵えた。宗助がそれを提げたところは、まるで進物の菓子折のようであつた。

座敷で見ればすぐ崖の上だが、表から廻ると、通りを半町ばかり来て、坂を上つて、また半町ほど逆に戻らなければ、坂井の門前へは出られなかつた。宗助は石の上へ芝を盛つて扇骨木を奇麗に植えつけた垣に沿うて門内に入つた。

家の内はむしろ静か過ぎるくらいしんとしていた。摺硝子の戸が閉たててある玄関へ来て、ベルを二三度押して見たが、ベルが利きかないと見えて誰も出て来なかつた。宗助は仕方なしに勝手口へ廻まわつた。そこにも摺硝子の嵌はまつた腰障子こししょうじが二枚閉ふててあつた。中では器物を取り扱う音がした。宗助は戸を開けて、瓦斯七輪ガスしちりんを置いた板の間に蹲しゃがんでゐる下女に挨拶あいさつをした。「これはこちらのでしょう。今朝私わたしの家の裏うちに落ちていましたから持つて来ました」と云いながら、文庫を出した。

下女は「そうでございましたか、どうも」と簡単に礼を述べて、文庫を持ったまま、板の間の仕切まで行つて、仲働なかばたらきらしい女を呼び出した。そこで小聲に説明をして、品物を渡すと、仲働はそれを受取つたなり、ちよつと宗助の方を見たがすぐ奥へ入つた。入れ違いちがえに、十二三になる丸顔の眼の大きな女の子と、そ

の妹らしい揃そろいのリボンリボンを懸かけた子がいつしよに馳かけて来て、小さい首を二つ並べて台所へ出した。そうして宗助の顔を眺ながめながら、泥棒よと耳語ささやきやった。宗助は文庫を渡してしまえば、もう用が済んだのだから、奥の挨拶はどうでもいいとして、すぐ帰ろうかと考えた。

「文庫は御宅のでしょうね。いいんでしょうね」と念を押して、何なにも知らない下女を気の毒がらしているところへ、最前の仲働が出て来て、

「どうぞ御通り下さい」と丁寧ていねいに頭を下げたので、今度は宗助の方が少し痛み入るようになった。下女はいよいよしとやかに同じ請求を繰り返した。宗助は痛み入る境を通り越して、ついに迷惑を感じ出した。ところへ主人が自分しもふくれで出て来た。

主人は予想通り血色の好い下膨ふくそうの福相そなを具えていたが、御米

の云つたように髭ひげのない男ではなかつた。鼻の下に短かく刈り込んだのを生やして、ただ頬ほおから腮あごを奇麗きれいに蒼あおくしていた。

「いやどうもとんだ御手数ごてかずで」と主人は眼尻めじりに皺しわを寄せながら礼を述べた。米沢よねざわの緋かすりを着た膝ひざを板の間に突いて、宗助からいろいろ様子を聞いている態度が、いかにも緩ゆるくりしていた。宗助は昨夕ゆうべから今朝へかけての出来事を一通り搔かい撮つまんで話した上、文庫のほかになにか取られたものがあるかないかを尋ねて見た。主人は机の上に置いた金時計を一つ取られた由よしを答えた。けれどもまるで他ひとのものでも失なくなした時のように、いつこう困つたと云う気色けしきはなかつた。時計よりはむしろ宗助の叙述の方に多くの興味を有もつて、泥棒が果して崖を伝つて裏から逃げるつもりだったろうか、または逃げる拍子ひょうしに、崖から落ちたものだろうかと云うような質問を掛けた。宗助は固もとより返答がで

きなかつた。

そこへ最前の仲働が、奥から茶やたばこ蓆を運んで来たので、宗助はまた帰りはぐれた。主人はわざわざ座蒲団ざぶとんまで取り寄せて、とうとうその上へ宗助の尻を据すえさした。そうして今朝けさ早く来た刑事の話をし始めた。刑事の判定によると、賊は宵よいから邸内に忍び込んで、何でも物置かなどに隠れていたに違ちがない。這入口はいりぐちはやはり勝手である。燐寸マツチを擦すつて蠟燭ろうそくを点ともして、それを台所にあつた小桶こおけの中へ立てて、茶の間へ出たが、次の部屋には細君と子供が寝ているので、廊下伝いに主人の書齋へ来て、そこで仕事をしていると、この間生れた末の男の子が、乳を呑のむ時刻が来たものか、眼を覚さまして泣き出したため、賊は書齋の戸を開けて庭へ逃げたらしい。

「平常いつものように犬がいますと好かつたんですがね。あいにく病氣

なので、四五日前病院へ入れてしまったもんですから」と主人は残念がった。宗助も、

「それは惜しい事でした」と答えた。すると主人はその犬の種^{ブリード}やら血統やら、時々^{かり}猟に連れて行く事や、いろいろな事を話し始めた。

「^{りよう}猟は好ですから。もつとも近来は神経痛で少し休んでいます。が。何しろ秋口から冬へ掛^つけて鳴^{しぎ}なぞを打ちに行くと、どうしても腰から下は田の中へ浸^{つか}つて、二時間も三時間も暮らさなければならいんですから、全く^{からだ}身体には好くないようです」

主人は時間に制限のない人と見えて、宗助が、なるほどとか、そうですか、とか云つていると、いつまでも話しているので、宗助はやむを得ず途中で立ち上がった。

「これからまた例の通り出かけなければなりませんから」と切

り上げると、主人は始めて気がついたように、忙がしいところを引き留めた失礼を謝した。そうしていずれまた刑事が現状を見に行くかも知れないから、その時はよろしく願うと云うような事を述べた。最後に、

「どうかちと御話に。私も近頃はむしろ閑な方ですから、また御邪魔に出ますから」と丁寧^{ていねい}に挨拶をした。門を出て急ぎ足に宅^{うち}へ帰ると、毎朝出る時刻よりも、もう三十分ほど後れていた。

「あなたどうなすつたの」と御米が氣を揉^もんで玄関へ出た。宗助はすぐ着物を脱いで洋服に着換えながら、

「あの坂井と云う人はよっぽど気楽な人だね。金があるとああ緩^{ゆる}くりできるもんかな」と云った。

「小六さん、茶の間から始めて。それとも座敷の方を先にして」
と御米が聞いた。

小六は四五日前とうとう兄の所へ引き移った結果として、今日の障子の張替を手伝わなければならない事となった。彼は昔し叔父の家に行った時、安之助といつしよになつて、自分の部屋の唐紙を張り替えた経験がある。その時は糊を盆に溶いたり、篋を使つて見たり、だいぶ本式にやり出したが、首尾よく乾かして、いざ元の所へ建てるという段になると、二枚とも反つ繰り返つて敷居の溝へ嵌まらなかった。それからこれも安之助と共同して失敗した仕事であるが、叔母の云いつけで、障子を張らせられたときには、水道でぎぶぎぶ杵を洗つたため、やつぱり乾いた後で、惣体に歪ができて非常に困難した。

「姉さん、障子を張るときは、よほど慎重にしないと失策しくじです。洗つちや駄目ですぜ」と云いながら、小六は茶の間の縁側えんがわからびりびり破き始めた。

縁先は右の方に小六のいる六畳が折れ曲つて、左には玄関が突き出している。その向うを塀へいが縁と平行に塞ふさいでいるから、まあ四角な囲内かこいうちと云つていい。夏になるとコスモスを一面に茂らして、夫婦とも毎朝露の深い景色けしきを喜んだ事もあるし、また塀の下へ細い竹を立てて、それへ朝顔を絡からませた事もある。その時は起き抜けに、今朝咲いた花の数を勘定かんじょうし合つて二人が楽たのしみにした。けれども秋から冬へかけては、花も草もまるで枯れてしまうので、小さな砂漠さばくみたように、眺ながめるのも気の毒なくらい淋さびしくなる。小六はこの霜しもばかり降りた四角な地面を背にして、しきりに障子の紙を剥はがしていた。

時々寒い風が来て、後から小六の坊主頭と襟の辺を襲った。そのたびに彼は吹き曝しの縁から六畳の中へ引つ込みたくなつた。彼は赤い手を無言のまま働らかしながら、馬尻の中で雑巾を絞つて障子の棧を拭き出した。

「寒いでしょう、御気の毒さまね。あいにく御天氣が時雨れたもんだから」と御米が愛想を云つて、鉄瓶の湯を注ぎ注ぎ、昨日煮た糊を溶いた。

小六は實際こんな用をするのを、内心では大いに輕蔑してゐた。ことに昨今自分がやむなく置かれた境遇からして、この際多少自己を侮辱しているかの觀を抱いて雑巾を手にしてゐた。昔し叔父の家で、これと同じ事をやらせられた時は、暇潰しの慰みとして、不愉快どころかかえつて面白かつた記憶さえあるのに、今じゃこのくらいな仕事よりほかにする能力のないもの

と、強いて周囲から諦めさせられたような気がして、縁側の寒いのがなおのこと癢しやくに触った。

それで嫂あによめには快よい返事さえ碌ろくにしなかった。そうして頭の中

で、自分の下宿にいた法科大学生が、ちよつと散歩に出るつ

いでに、資生堂へ寄つて、三つ入りの石鹼シヤボンと齒磨を買うのにさ

え、五円近くの金を払う華奢かしやを思い浮べた。するとどうしても

自分一人が、こんな窮境おちいに陥るべき理由がないように感ぜられ

た。それから、こんな生活状態に甘んじて一生を送る兄夫婦が

いかにも憫然ふびんに見えた。彼らは障子を張る美濃紙みのがみを買うのにさ

え気兼きがねをしやしまいかと思われるほど、小六から見ると、消極

的な暮し方をしていた。

「こんな紙じゃ、またすぐ破けますね」と云いながら、小六は巻いた小口を一尺ほど日に透すかして、二三度力任せに鳴らした。

「そう？　でも宅^{うち}じや小供がないから、それほどでもなくつてよ」と答えた御米は糊を含ました刷^は毛^けを取つてとんとんとと棧の上を渡した。

二人は長く繼^ついだ紙を双方から引き合つて、なるべく垂^たるみのできないように力^{つと}めたが、小六が時々面倒臭^{めんどくさい}そうな顔をする^{する}と、御米はつい遠慮が出て、好加減^{いいかげん}に髪剃^{かみそり}で小口を切り落してしまふ事もあつた。したがつてでき上つたものには、所々のぶくぶくがだいぶ目についた。御米は情^{なさけ}なさそうに、戸袋に立て懸^かけた張り立ての障子を眺^{なが}めた。そうして心^{うち}の中で、相手が小六でなくつて、夫であつたならと思つた。

「皺^{しわ}が少しできたのね」

「どうせ僕の御手際^{おてぎわ}じや旨^{うま}く行かない」

「なに兄さんだつて、そう御上手じやなくつてよ。それに兄さ

んはあなたよりよつほど無精ね」

小六は何にも答えなかった。台所から清が持つて来た含嗽茶碗を受け取つて、戸袋の前へ立つて、紙が一面に濡れるほど霧を吹いた。二枚目を張つたときは、先に霧を吹いた分がほぼ乾いて皺がおおかた平らになつていた。三枚目を張つたとき、小六は腰が痛くなつたと云い出した。実を云うと御米の方は今朝から頭が痛かつたのである。

「もう一枚張つて、茶の間だけ済ましてから休みましょう」と云つた。

茶の間を済ましているうちに午になつたので、二人は食事を始めた。小六が引き移つてからこの四五日、御米は宗助のいなひる飯を、いつも小六と差向で食べる事になつた。宗助といつしよになつて以来、御米の毎日膳を共にしたものは、夫よりほ

かになかった。夫の留守の時は、ただ独り箸を執るのが多年のならわし習慣であつた。だから突然この小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顔を見合せながら、口を動かすのが、御米に取つては一種異な経験であつた。それも下女が台所で働らいているときは、まだしもだが、清の影も音もしないとなると、なおのこと変に窮屈な感じが起つた。無論小六よりも御米の方が年上であるし、また従来の関係から云つても、両性を絡みつける艶っぽい空気は、けんそくてき箝束的な初期においてすら、二人の間に起り得べきはずのものではなかつた。御米は小六と差向に膳に着くときのこの氣ぶつせいな心持が、いつになつたら消えるだろうと、心の中で私に疑ぐつた。小六が引き移るまでは、こんな結果が出ようとは、まるで氣がつかかなかつたのだからなおさら当惑した。仕方がないからなるべく食事中に話をして、せめて手持無沙汰な隙間だ

けでも補おうと力めた。不幸にして今の小六は、この嫂の態度あによめに對してほどの好い調子を出すだけの余裕と分別ぶんべつを頭の中に発見し得なかつたのである。

「小六さん、下宿は御馳走ごちそうがあつて」

こんな質問に逢うと、小六は下宿から遊びに來た時分のように、淡泊たんぱくな遠慮のない答をする訳に行かなくなつた。やむを得ず、

「なにそうでもありません」ぐらいにしておくと、その語氣がからりと澄んでいないので、御米の方では、自分の待遇が悪いせいかと解釈する事もあつた。それがまた無言の間に、小六の頭に映る事もあつた。

ことに今日は頭の具合が好くないので、膳に向つても、御米はいつものように力めるのが退儀たいぎであつた。力めて失敗するの

はなお厭いやであつた。それで二人とも障子しょうじを張るときよりも言葉少なに食事を済ました。

午後は手が慣なれたせい、朝に比べると仕事が少し果取はかどつた。しかし二人の気分は飯前よりもかえつて縁遠くなつた。ことに寒い天氣が二人の頭に応こたえた。起きた時は、日を載のせた空がしだいに遠退とおのいて行くかと思われるほどに、好く晴れていたが、それが真蒼まつさおに色づく頃から急に雲が出て、暗い中で粉雪こゆきでも醸かもしているように、日の目を密封した。二人は交かわる交がわる火鉢に手を翳かざした。

「兄さんは来年になると月給が上がるんでしょう」

ふと小六がこんな問を御米にかけた。御米はその時畳の上の紙片かみぎれを取つて、糊よじに汚れた手を拭いていたが、全く思も寄らないという顔をした。

「どうして」

「でも新聞で見ると、来年から一般に官吏の増俸があると云う話じゃありませんか」

御米はそんな消息を全く知らなかった。小六から詳しい説明を聞いて、始めてなるほどと首肯うなずいた。

「全くね。これじゃ誰だつて、やつて行けないわ。御肴おさかなの切身

なんか、私わたしが東京へ来てからでも、もう倍になつてゐるんですもの」と云つた。肴の切身の値段になると小六の方が全く無識であつた。御米に注意されて始めてそれほどむやみに高くなるものかと思つた。

小六にちよつとした好奇心の出たため、二人の会話は存外素直に流れて行つた。御米は裏の家主の十八九時代に物価の大変安かつた話を、この間宗助から聞いた通り繰り返した。その時

分は蕎麦そばを食うにしても、盛もかけが八厘、種たねものが二錢五厘であつた。牛肉は普通なみが一人前四錢で、ロースは六錢であつた。よせ寄席は三錢か四錢であつた。学生は月に七円ぐらい国から貰もらえちゅうば中の部であつた。十円も取るとすでに贅ぜい沢たくと思われた。

「小六さんも、その時分だと訳なく大学が卒業できたのにね」と御米が云つた。

「兄さんもその時分だと大変暮しやすい訳ですね」と小六が答えた。

座敷の張易はりかえが済んだときにはもう三時過になつた。そうこうしてゐるうちには、宗助も歸つて来るし、晩の支度したくも始めなくつてはならないので、二人はこれを一段落として、糊や髮剃かみそりを片づけた。小六は大きな伸のびを一つして、握にぎり拳こぶしで自分の頭をこんこんと叩たたいた。

「どうも御苦労さま。疲れたでしょう」と御米は小六を労わつた。小六はそれよりも口淋くちさむしい思がした。この間文庫を届けてやった札に、坂井からくれたと云う菓子とだなを、戸棚から出して貰つて食べた。御米は御茶を入れた。

「坂井と云う人は大学出なんですか」

「ええ、やつぱりそうなんですつて」

小六は茶を飲んで煙草たばこを吹いた。やがて、

「兄さんは増俸の事をまだあなたに話さないんですか」と聞いた。

「いいえ、ちつとも」と御米が答えた。

「兄さんみたようになれたら好いだろうな。不平も何もなくて」

御米は特別の挨拶あいさつもしなかつた。小六はそのまま起たつて六畳

へ這入^{はい}ったが、やがて火が消えたと云つて、火鉢を抱^{かか}えてまた出て来た。彼は兄^{いえ}の家に厄介^{やっかい}になりながら、もう少し立てば都合^{あつ}がつかだろうと慰めた安之助の言葉を信じて、学校は表向休^{おもてむぎ}学の体^{てい}にして一時の始末をつけたのである。

九

裏の坂井と宗助^{そうすけ}とは文庫が縁になつて思わぬ關係がついた。それまでは月に一度こちらから清^{きよ}に家賃^{かぜん}を持たしてやると、向^{むこう}からその受取を寄こすだけの交渉に過ぎなかつたのだから、崖^{がけ}の上に西洋人が住んでいると同様で、隣人としての親みは、まるで存在していなかつたのである。

宗助が文庫を届けた日の午後、坂井の云つた通り、刑事が宗

助の家の裏手から崖下をしら検べに来たが、その時坂井もいつしよ
だったので、御米は始めておよね樽に聞いた家主の顔を見た。髭ひげのな
いと思つたのに、髭を生やしているのと、自分なぞに対しても、
存外ていねい丁寧な言葉を使うのが、御米には少し案外であつた。

「あなた、坂井さんはやつぱり髭を生やしていてよ」と宗助が
歸つたとき、御米はわざわざ注意した。

それから二日ばかりして、坂井の名刺を添えた立派な菓子折
を持つて、下女が礼に来たが、せんだつてはいろいろ御世話に
なりまして、ありがとう存じます、いずれ主人が自身に伺うは
ずでございませうと云いおいて、歸つて行つた。

その晩宗助は到来の菓子折の蓋ふたを開けて、唐饅頭とうまんじゅうを頬張ほおばりな
がら、

「こんなものをくれるところをもつて見ると、それほど吝けちでも

ないようだね。他の家の子をブランコへ乗せてやらないって云うのは嘘だろう」と云った。御米も、

「きつと嘘よ」と坂井を弁護した。

夫婦と坂井とは泥棒の這入らない前より、これだけ親しみの度が増したようなものの、それ以上に接近しようと云う念は、宗助の頭にも、御米の胸にも宿らなかつた。利害の打算から云えば無論の事、単に隣人の交際とか情誼とか云う点から見ても、夫婦はこれよりも前進する勇氣を有たなかつたのである。もし自然がこのままに無為の月日を駆つたなら、久しからぬうちに、坂井は昔の坂井になり、宗助は元の宗助になって、崖の上と崖の下に互の家が懸け隔るごとく、互の心も離れ離れになつたに違なかつた。

ところがそれからまた二日置いて、三日目の暮れ方に、獺の

襟えりの着いた暖かそうな外套マントを着て、突然坂井が宗助の所へやつて来た。夜間客に襲おそわれつけない夫婦は、輕微ろうばいの狼狽を感じたくらい驚ろかされたが、座敷へ上げて話して見ると、坂井は丁寧のちに先日のちの礼を述べた後、

「御蔭で取られた品物がまた戻りましたよ」と云いながら、白縮緬しろちりめんの兵児帶へこおびに巻き付けた金鎖はずを外して、両蓋りょうふたの金時計を出して見せた。

規則だから警察へ届ける事は届けたが、実はだいぶ古い時計なので、取られてもそれほど惜しくもないぐらゐに諦あきらめていたら、昨日きのうになって、突然差出人の不明な小包が着いて、その中にちゃんと自分の失なくしたのが包くるんであつたんだと云う。

「泥棒も持ち扱かつたんでしよう。それとも余り金にならないんで、やむを得ず返してくれる気になつたんですかね。何しろ

珍しい事で」と坂井は笑っていた。それから、

「何私から云うと、実はあの文庫の方がむしろ大切な品でしてね。祖母ばばが昔し御殿へ勤めていた時分、戴いたいたんだとか云つて、まあ記念かたみのようなものですから」と云うような事も説明して聞かした。

その晩坂井はそんな話を約二時間もして帰つて行つたが、相手になつた宗助も、茶の間で聞いていた御米も、大変談話の材料に富んだ人だと思わぬ訳に行かなかつた。後で、

「世間の広い方かたね」と御米が評した。

「閑ひまだからさ」と宗助が解釈した。

次の日宗助が役所の帰りがけに、電車を降りて横町の道具屋の前まで来ると、例の獺かわうその襟えりを着けた坂井の外套マントがちよつと眼に着いた。横顔を往来の方へ向けて、主人を相手に何か云つて

いる。主人は大きな眼鏡を掛けたまま、下から坂井の顔を見上げてゐる。宗助は挨拶をすべき折でもないと思つたから、そのまま行き過ぎようとして、店の正面まで来ると、坂井の眼が往來へ向いた。

「やあ昨夜は。今御帰りですか」と気軽に声をかけられたので、宗助も愛想なく通り過ぎる訳にも行かなくなつて、ちよつと歩調を緩めながら、帽子を取つた。すると坂井は、用はもう済んだと云う風をして、店から出て来た。

「何か御求めですか」と宗助が聞くと、

「いえ、何」と答えたまま、宗助と並んで家の方へ歩き出した。六七間来たとき、

「あの爺い、なかなか猾い奴ですよ。華山の偽物を持つて来て押付ようとしやがるから、今叱りつけてやつたんです」と云い出

した。宗助は始めて、この坂井も余裕ある人に共通な好事こうずを道楽ほういつにしているのだと心づいた。そうしてこの間売り払った抱一の屏風びょうぶも、最初からこう云う人に見せたら、好かつたろうにと、腹の中で考えた。

「あれは書画には明るい男なんですか」

「なに書画どころか、まるで何も分らない奴です。あの店の様子を見ても分るじゃありませんか。骨董こつとうらしいものは一つも並んでいやしない。もともとが紙屑屋かみくずやから出世してあれだけになったんですからね」

坂井は道具屋の素性すじようをよく知っていた。出入でいりの八百屋の阿爺おやじの話によると、坂井の家は旧幕の頃何とかの守かみと名乗ったもので、この界限かいがいでは一番古い門閥家もんぼつかなのだそうである。瓦解がかいの際、駿府すんぷへ引き上げなかつたんだとか、あるいは引き上げてまた出

て来たんだとか云う事も耳にしたようであるが、それは判然宗助の頭に残っていなかった。

「小さい内から悪戯いたずらものでね。あいつが餓鬼大将がきだいしやうになつてよく喧嘩けんかをしに行つた事がありますよ」と坂井は御互の子供の時の事まで一口洩もらした。それがまたどうして華山の贗物にせものを売り込もうと巧たくんだのかと聞くと、坂井は笑つて、こう説明した。――

「なに親父おやじの代から鼯鼠ひいきにしてやつてるものですから、時々何だ蚊かだつて持つて来るんです。ところが眼きも利かない癖に、ただ慾よくばりたがつてね、まことに取扱にくい悪い代物しろものです。それについてこの間抱一の屏風を買つて貰つて、味を占めたんでね」

宗助は驚ろいた。けれども話の途中を遮さへぎる訳に行かなかつたので、黙もくっていた。坂井は道具屋がそれ以来乗氣になつて、自身に分りもしない書画類をしきりに持ち込んで来る事やら、

大坂出来の高麗焼こうらいやきを本物だと思つて、大事に飾つておいた事やら話した末、

「まあ台所だいどころで使う食卓ちやうぶだいか、たかだか新の鉄瓶あらか てつびんぐらいしか、あんな所じや買えたもんじやありません」と云つた。

そのうち二人は坂の上へ出た。坂井はそこを右へ曲る、宗助はそこを下へ下りなければならなかつた。宗助はもう少しいつしよに歩いて、屏風びやうぶの事を聞きたかつたが、わざわざ回り路まわ みちをするのも変だと心づいて、それなり分れた。分れる時、

「近い中御邪魔うちに出てもようございますか」と聞くと、坂井は、「どうぞ」と快よく答えた。

その日は風もなくひとしきり日も照つたが、家うちにいと底冷そこびえのする寒さに襲おそわれるとか云つて、御米はわざわざ置炬燵おきぐたつに宗助の着物を掛けて、それを座敷の真中に据すえて、夫の帰りを待

ち受けていた。

この冬になつて、昼のうち炬燵こたつを拵こしらえたのは、その日が始めてであつた。夜は疾とうから用いていたが、いつも六畳に置くだけであつた。

「座敷の真中にそんなものを据えて、今日はどうしたんだい」
「でも、御客も何もないからいいでしょう。だつて六畳の方は小六ころうくさんがいて、塞ふさがつているんですもの」

宗助は始めて自分の家に小六のいる事に気がついた。襯衣シヤツの上から暖かい紡績織ぼうせいきおりを掛けて貰つて、帯をぐるぐる巻きつけたが、

「ここは寒帯だから炬燵でも置かなくつちや凌しのげない」と云つた。小六の部屋になつた六畳は、畳こそ奇麗きれいでないが、南と東が開あいていて、家中うちじゅうで一番暖かい部屋なのである。

宗助は御米の汲くんで来た熱い茶を湯呑ゆのみから二口ほど飲んで、
「小六はいるのかい」と聞いた。小六は固もとよりいたはずである。
けれども六畳はひっそりして人のいるようにも思われなかった。
御米が呼びに立とうとするのを、用はないからいいと留めたま
ま、宗助は炬燵蒲団ぶとんの中へ潜もぐり込んで、すぐ横になった。一方口
に崖を控えている座敷には、もう暮方の色が萌きざしていた。宗助
は手枕をして、何を考えるともなく、ただこの暗く狭い景色けしきを
眺ながめていた。すると御米と清が台所で働く音が、自分に関係の
ない隣の人の活動のごとくに聞えた。そのうち、障子だけがた
だ薄白く宗助の眼に映るように、部屋の中が暮れて来た。彼は
それでもじっとして動かずにいた。声を出して洋灯ランプの催促もし
なかった。

彼が暗い所から出て、晩食ばんめしの膳ぜんに着いた時は、小六も六畳か

ら出て来て、兄の向うに坐^{すわ}った。御米は忙しいので、つい忘れたと云つて、座敷の戸を締^しめに立った。宗助は弟に夕方になつたら、ちと洋灯^{ランブ}を点^つけるとか、戸を閉^たてるとかして、忙^{せわ}しい姉の手伝でもしたら好かろうと注意したかったが、昨今引き移つたばかりのものに、氣まずい事を云うのも悪かろうと思つてやめた。

御米が座敷から歸つて来るのを待つて、兄弟は始めて茶碗に手を着けた。その時宗助はようやく今日役所の歸りがけに、道具屋の前で坂井に逢^{ほう}つた事と、坂井があの大^めきな眼鏡^{がね}を掛^かけている道具屋から、抱^{ほう}一の屏風^{びやうぶ}を買^かつたと云う話をした。御米は、「まあ」と云つたなり、しばらく宗助の顔を見ていた。

「じゃきつとあれよ。きつとあれに違^{ちが}ないわね」

小六は始めのうち何にも口を出さなかつたが、だんだん兄夫

婦の話聞いているうちに、ほぼ関係が明瞭めいりょうになつたので、「全体いくらで売つたのです」と聞いた。御米は返事をする前にちよつと夫の顔を見た。

食事が終ると、小六はじきに六畳へ這入はいつた。宗助はまた炬燵こたつへ歸つた。しばらくして御米も足を温めぬくに來た。そうして次の土曜か日曜には坂井へ行つて、一つ屏風を見て來たらいいだろうと云うような話を話し合つた。

次の日曜になると、宗助は例の通り一週に一返いつぺんの樂寢らくねを貪くぼつたため、午前ひるまえ半日をとうとう空くうに潰つぶしてしまつた。御米はまた頭が重おもいとか云つて、火鉢ひばちの縁ふちに倚よりかかつて、何をするのも懶ものうそうに見えた。こんな時に六畳が空あいていれば、朝からでも引込む場所があるのにと思ふと、宗助は小六に六畳をあてがつた事が、間接に御米の避難場を取り上げたと同じ結果に陥おちいるの

で、ことに済まないような気がした。

心持が悪ければ、座敷へ床を敷いて寝たら好かろうと注意しても、御米は遠慮して容易に応じなかった。それではまた炬燵でも拵こしらえたらどうだ、自分も当るからと云つて、とうとう櫓やぐらと掛けぶかけぶとんとんを清きよに云いつけて、座敷へ運ばした。

小六は宗助が起きる少し前に、どこかへ出て行つて、今朝けさは顔さえ見せなかった。宗助は御米に向つて別段その行先を聞き糺ただしもしなかった。この頃では小六に関係した事を云い出して、御米にその返事をさせるのが、氣の毒になつて来た。御米の方から、進んで弟の讒訴ざんそでもするようだと、叱るにしろ、慰さめるにしろ、かえつて始末が好いと思える時もあった。

午ひるになつても御米は炬燵から出なかった。宗助はいつそ静かに寝かしておく方が身体からだのためによかろうと思つたので、そつ

と台所へ出て、清にちよつと上の坂井まで行つてくるからと告げて、不断着の上へ、袂たもとの出る短いインヴァネスを纏まとつて表へ出た。

今まで陰気な室へやにいた所せ為いか、通とおへ来ると急にからりと気が晴れた。肌の筋肉が寒い風に抵抗して、一時に緊縮するような冬の心持の鋭どく出るうちに、ある快感を覚えたので、宗助は御米もあ家うちにばかり置いては善よくない、氣候が好くなつたら、ちと戸外の空気を呼吸させるようにしてやらなくては毒だと思ひながら歩いた。

坂井の家の門を入つたら、玄関と勝手口の仕切になつてゐる生垣いけがきの目に、冬に似合わないぱつとした赤いものが見えた。傍そばへ寄つてわざわざ検しらべると、それは人形に掛ける小さい夜具であつた。細い竹を袖そでに通して、落ちないように、扇骨木かふめの枝に寄

せ掛けた手際が、いかにも女の子の所作らしく殊勝に思われた。
こう云う悪戯いたずらをする年頃の娘は固もとよりの事、子供と云う子供を
育て上げた経験のない宗助は、この小さい赤い夜具の尋常に日
に干してある有様をしばらく立つて眺ながめていた。そうして二十
年も昔に父母が、死んだ妹いものために飾った、赤い雛段ひなだんと五人囃ごにんばやし
と、模様の美くしい干菓子と、それから甘いようで辛い白酒からを
思い出した。

坂井の主人は在宅ではあつたけれども、食事中だと云うので、
しばらく待たせられた。宗助は座に着くや否や、隣の室へやで小さ
い夜具を干した人達の騒ぐ声を耳にした。下女が茶を運ぶため
に襖ふすまを開けると、襖の影から大きな眼が四つほどすでに宗助を
覗のぞいていた。火鉢を持って出ると、その後あとからまた違った顔が
見えた。始めてのせい、襖の開閉あけたてのたびに出る顔がことごと

く違つていて、子供の数が何人あるか分らないように思われた。ようやく下女が退^さがりきりに退がると、今度は誰だか唐紙^{からかみ}を一寸ほど細目に開けて、黒い光る眼だけをその間から出した。宗助も面白くなつて、黙つて手招ぎをして見た。すると唐紙をぴたりと閉^たてて、向う側で三四人が声を合して笑い出した。

やがて一人の女の子が、

「よう、御姉様またいつものように叔母さんごっこしましょうよ」と云い出した。すると姉らしいのが、

「ええ、今日は西洋の叔母さんごっこよ。東作さんは御父さまだからパパで、雪子さんは御母さまだからママって云うのよ。よくつて」と説明した。その時また別の声で、

「おかしいわね。ママだつて」と云つて嬉^{うれ}しそうに笑つたものがあった。

「私^{わたし}それでもいつも御祖母^{おば}さまなのよ。御祖母^{おば}さまの西洋の名がなくっちゃいけないわねえ。御祖母^{おば}さまは何て云うの」と聞いたものもあつた。

「御祖母^{おば}さまはやつぱりババでいいでしょう」と姉がまた説明した。

それから当分の間は、御免^{さかん}下さいましたの、どちらからいらつしやいましたのと盛^{さかん}に挨拶^{あいさつ}の言葉が交換^{こうかん}されていた。その間にはちりんちりと云う電話^{でんわ}の仮色^{かいろ}も交つた。すべてが宗助には陽気で珍らしく聞えた。

そこへ奥の方から足音がして、主人がこつちへ出て来たらしかつたが、次の間へ入るや否や、

「さあ、御前^{ごぜん}達はここで騒ぐんじゃない。あつちへ行つておいで。御客^{ごきゃく}さまだから」と制した。その時、誰だかすぐに、

「厭いやだよ。御父おとっちゃんべい。大きい御馬買つてくれなくつちや、あつちへ行かないよ」と答えた。声は小さい男の子の声であつた。年が行かないためか、舌がよく回らないので、抗弁のしようがいかに億劫おっくうで手間がかかった。宗助はそこを特に面白く思つた。

主人が席に着いて、長い間待たした失礼を詫わびている間に、子供は遠くへ行つてしまつた。

「大變御賑おにぎやかで結構です」と宗助が今自分の感じた通を述べると、主人はそれを愛嬌あいぎようと受取つたものと見えて、

「いや御覧のごとく乱雑な有様で」と言訳らしい返事をしたが、それを緒いとくちに、子供の世話の焼けて、夥おびただしく手のかかる事などをしていろいろ宗助に話して聞かした。その中で綺麗うちきれいな支那製の花籃はなかごのなかへ炭団たどんを一杯盛もつて床の間に飾つたと云う滑稽こっけいと、主人

の編上の靴のなかへ水を汲み込んで、金魚を放したと云う悪戯いたずらが、宗助には大変耳新しかった。しかし、女の子が多いので服装に物が要いるとか、二週間も旅行して帰つてくると、急にみんなの背が一寸いっすんずつも伸びているので、何だか後うしろから追いつかれるような心持がするとか、もう少しすると、嫁入の支度で忙殺ぼうさつされるのみならず、きつと貧殺ひんさつされるだろうとか云う話になると、子供のない宗助の耳にはそれほどの同情も起し得なかつた。かえつて主人が口で子供を煩うるさ冗ぎやうがる割に、少しもそれを苦にする様子の、顔にも態度にも見えないのを羨うらやましく思つた。

好い加減な頃を見計みはかつて宗助は、せんだつて話のあつた屏風びやうぶをちよつと見せて貰もらえまいかと、主人に申し出た。主人はさつそく引き受けて、ばちばちと手を鳴らして、召使を呼んだが、蔵くらの中にしまつてあるのを取り出して来るように命じた。そうし

て宗助の方を向いて、

「つい二三日前までそこへ立てておいたのですが、例の子供が面白半分にわざと屏風の影へ集まって、いろいろな悪戯をするものですから、傷でもつけられちゃ大変だと思つてしまひ込んでしまひました」と云つた。

宗助は主人のこの言葉を聞いた時、今更手数てかずをかけて、屏風を見せて貰うのが、氣の毒にもなり、また面倒にもなつた。実を云うと彼の好奇心は、それほど強くなかつたのである。なるほどいったん他ひとの所有に歸したものは、たとい元が自分のものであつたにしろ、無かつたにしろ、そこを突き留めたところで、實際上には何の効果もない話に違なかつた。

けれども、屏風は宗助の申し出た通り、間もなく奥から縁伝いに運び出されて、彼の眼の前に現れた。そうしてそれが予想通

りついこの間まで自分の座敷に立ててあつた物であつた。この事実を発見した時、宗助の頭には、これと云つて大した感動も起らなかつた。ただ自分が今坐っている畳の色や、天井の桎目まさめや、床の置物や、襖ふすまの模様などの中に、この屏風を立てて見て、それに、召使が二人がかりで、蔵の中から大事そうに取り出して来たと云う所作しよさを付け加えて考えると、自分が持つていた時よりは、たしかに十倍以上貴たつとい品のように眺められただけであつた。彼は即座に云うべき言葉を見出し得なかつたので、いたずらに、見慣れたものの上に、さらに新らしくもない眼を据すえていた。

主人は宗助をもつてある程度の鑑賞家と誤解した。立ちながら屏風の縁ふちへ手を掛けて、宗助の面おもてと屏風の面とを比較していたが、宗助が容易に批評を下さないもので、

「これは素性すじょうのたしかなものです。出が出ですからね」と云つた。宗助は、ただ

「なるほど」と云つた。

主人はやがて宗助の後へ回つて来て、指でそこを指さしながら、品評やら説明やらした。その中うちには、さすが御大名だけあつて、好い絵の具を惜気おしげもなく使うのがこの画家の特色だから、色がいかにもみごとであると云うような、宗助には耳新しいけれども、普通一般に知れ渡つた事もだいぶ交ていねいつていた。

宗助は好い加減な頃ふとんを見計らつて、丁寧ていねいに礼を述べて元の席に復した。主人も蒲団ふとんの上に直つた。そうして、今度は野路のじや空云々という題句やら書体やらについて語り出した。宗助から見ると、主人は書にも俳句にも多くの興味を有もつていた。いつの間まにこれほどの知識を頭の中へ貯たくわえ得らるるかと思うくらい、

すべてに心得のある男らしく思われた。宗助は己れおのを恥じて、なるべく物数ものかずを云わないようにして、ただ向うの話だけに耳を借す事を力つとめた。

主人は客がこの方面の興味に乏しい様子を見て、再び話を画えの方へ戻した。碌ろくなものはないけれども、望ならば所蔵の画帖がじょうや幅物を見せてもいいと親切に申し出した。宗助はせっかくの好意を辞退しない訳に行かなかった。その代りに、失礼ですがと前置をして、主人がこの屏風を手に入れるについて、どれほどの金額を払ったかを尋ねた。

「まあ掘出し物ですね。八十円で買いました」と主人はすぐ答えた。

宗助は主人の前に坐つて、この屏風に関するいつさいの事を自白しようか、しまいかと思案したが、ふと打ち明けるのも一興

だろうと心づいて、とうとう実はこれこれだと、今までの顛末^{てんまつ}を詳しく話し出した。主人は時々へえ、へえと驚ろいたような言葉を挟^{はさ}んで聞いていたが、しまいに、

「じゃあなたは別に書画が好きで、見にいらした訳でもないんですね」と自分の誤解を、さも面白い経験でもしたように笑い出した。同時に、そう云う訳なら、自分が直^{じか}に宗助から相当の値で譲つて貰えばよかったに、惜しい事をしたと云つた。最後に横町の道具屋をひどく罵^{のの}しつて、怪^けしからん奴^{やつ}だと云つた。宗助と坂井とはこれからだいぶ親しくなつた。

十

佐伯^{さえき}の叔母も安之助^{やすのすけ}もその後とんと宗助^{そうすけ}の宅^{うち}へは見えなかつ

た。宗助は固^{もと}より麴^{こうじ}町へ行く余暇^もを有^もたなかつた。またそれだけの興味もなかつた。親類とは云いながら、別々の日が二人の家を照^てらしていた。

ただ小六^{ころうく}だけが時々話しに出かける様子であつたが、これとても、そう繁々^{しげしげ}足を運ぶ訳でもないらしかつた。それに彼は歸つて来て、叔母の家の消息をほとんど御米^{およね}に語らないのを常としておつた。御米はこれを故意^{こい}から出る小六の仕打^{うたぐ}かとも疑つた。しかし自分が佐伯に對して特別の利害を感じない以上、御米は叔母の動靜を耳にしない方を、かえつて喜こんだ。

それでも時々は、先方^{さき}の様子を、小六と兄の對話から聞き込む事もあつた。一週間ほど前に、小六は兄に、安之助がまた新發明の応用に苦心している話をした。それは印氣^{インキ}の助けを借らないで、鮮明な印刷物を拵^{こし}らえるとか云う、ちよつと聞くとす

こぶる重宝な器械についてであつた。話題の性質から云つても、自分とは全く利害の交渉のないむずかしい事なので、御米は例の通り黙つて口を出さずにいたが、宗助は男だけに幾分か好奇心が動いたと見えて、どうして印氣を使わずに印刷ができるかなどと問い糺ただしていた。

専門上の知識のない小六が、精密な返答をし得るはずは無論なかつた。彼はただ安之助から聞いたままを、覚えている限り念を入れて説明した。この印刷術は近来英国で発明になつたもので、根本的にいうとやはり電氣の利用に過ぎなかつた。電氣の一極を活字と結びつけておいて、他の一極を紙に通じて、その紙を活字の上へ圧おしつけさえすれば、すぐできるのだと小六が云つた。色は普通黒であるが、手加減しだいで赤にも青にもなるから色刷などの場合には、絵の具を乾はぶかす時間が省けるだ

けでも大変重宝で、これを新聞に応用すれば、印氣インキや印氣ロー
ルの費ついでを節約する上に、全体から云つて、少くとも従来しんの四分
の一の手数がなくなる点から見ても、前途は非常に有望な事業
であると、小六はまた安之助の話した通りを繰り返した。そう
してその有望な前途を、安之助がすでに手の中に握うつたかのご
とき口氣こうきであつた。かつその多望な安之助の未来のなかには、
同じく多望な自分の影が、含まれているように、眼を輝やかし
た。その時宗助はいつもの調子で、むしろ穏やかに、弟の云う
事を聞いていたが、聞いてしまった後あとでも、別にこれという眼
立つた批評は加えなかつた。實際こんな発明は、宗助から見
ると、本当のようでもあり、また嘘のようでもあり、いよいよそ
れが世間に行われるまでは、賛成も反対もできかねたのである。
「じや鰹船かつおぶねの方はもう止したの」と、今まで黙っていた御米が、

この時始めて口を出した。

「止したんじゃないんですが、あの方は費用が随分かかるので、いくら便利でも、そう誰も彼も拵こしらえる訳に行かないんだそうです」と小六が答えた。小六は幾分か安之助の利害を代表しているような口振であつた。それから三人の間に、しばらく談話が交換されたが、しまいに、

「やつぱり何をしたつて、そう旨うまく行くもんじゃあるまいよ」と云つた宗助の言葉と、

「坂井さんみたように、御金があつて遊んでいるのが一番いいわね」と云つた御米の言葉を聞いて、小六はまた自分の部屋へ歸つて行つた。

こう云う機会に、佐伯の消息は折々夫婦の耳へ洩もれる事はあるが、そのほかには、全く何をして暮らしているか、互に知ら

ないで過す月日が多かつた。

ある時御米は宗助にこんな問を掛けた。

「小六さんは、安さんの所へ行きたんびに、小遣こづかいでも貰もらつて来るんでしうか」

今まで小六について、それほどの注意を払っていなかった宗助は、突然この間に逢つて、すぐ、「なぜ」と聞き返した。御米はしばらく逡巡ためらつた末、

「だつて、この頃よく御酒を呑のんで帰つて来る事があるのよ」と注意した。

「安さんが例の發明や、金儲かねもうけの話をするとき、その聞き賃おごに奢おごるのかも知れない」と云つて宗助は笑つていた。会話はそれなりでつい發展せずになつた。

越えて三日目の夕方に、小六はまた飯時めしどきを外はずして帰つて来な

かつた。しばらく待ち合せていたが、宗助はついに空腹だとか云い出して、ちよつと湯にでも行つて時間を延ばしたらという御米の小六に対する気兼きがねに頓着とんじやくなく、食事を始めた。その時御米は夫に、

「小六さんに御酒を止めるやように、あなたから云つちやいけなくつて」と切り出した。

「そんなに意見しなければならぬほど飲むのか」と宗助は少し案外な顔をした。

御米はそれほどでもない、弁護しなければならなかつた。けれども實際は誰もいない昼間のうちなどに、あまり顔を赤くして帰つて来られるのが、不安だったのである。宗助はそれなり放つておいた。しかし腹の中では、はたして御米の云うごとく、どこかで金を借りるか、貰うかして、それほど好きもしな

いものを、わざと飲むのではなからうかと疑ぐつた。

そのうち年がだんだん片寄つて、夜が世界の三分の二を領するよう^{りよう}に押しつまつて来た。風が毎日吹いた。その音を聞いているだけでも生活^{ライフ}に陰気な響を与えた。小六はどうしても、六畳に籠^{こも}つて、一日を送るに堪^たえなかつた。落ちついて考えれば考えるほど、頭が淋^{さむ}しくつて、いたたまれなくなるばかりであつた。茶の間へ出て嫂^{あによめ}と話すのはなお厭^{いや}であつた。やむを得ず外へ出た。そうして友達^{うち}の宅をぐるぐる回つて歩いた。友達も始のうち^{いつも}は、平生の小六に対するように、若い学生^{せいせい}のしたがる面白い話をいくらでもした。けれども小六はそう云う話が尽きても、まだやつて来た。それでしまいには、友達が、小六は、退屈の余りに訪問^{しつぽん}をして、談話の復習^{ふくしゅう}に耽^{ふけ}るものだと評した。たまには学校の下読^{したよみ}やら研究やらに追われている多忙の身だと云う

風もして見せた。小六は友達からそう呑気のんきな怠けもののように取り扱われるのを、大変不愉快に感じた。けれども宅に落ちついては、読書も思索も、まるでできなかった。要するに彼ぐらの年輩の青年が、一人前の人間になる階梯かいていとして、修むべき事、力むべき事には、内部の動揺やら、外部の束縛やらで、いっさい手が着かなかつたのである。

それでも冷たい雨が横に降ったり、雪融ゆきどけの道がはげしく泥ぬかつたりする時は、着物を濡ぬらさなければならず、足袋たびの泥を乾かさなければならぬ面倒があるので、いかな小六も時によると、外出を見合せる事があつた。そう云う日には、實際困却すると見えて、時々六畳から出て来て、のそりと火鉢そばの傍へ坐つて、茶などを注いで飲んだ。そうしてそこに御米でもいると、世間話の一つや二つはしないと限らなかつた。

「小六さん御酒好き」と御米が聞いた事があつた。

「もう直^{じき}御正月ね。あなた御^{おぞうに}雑煮いくつ上がつて」と聞いた事もあつた。

そう云う場合が度^{たび}重^{かさ}なるに連^つれて、二人の間は少しずつ近寄る事ができた。しまいには、姉さんちよつとここを縫^ぬつて下さいと、小六の方から進んで、御米に物を頼むようになった。そうして御米が緋^{かすり}の羽織を受^う取^とつて、袖口^{そでぐち}の綻^{ほころび}を繕^{つくろ}っている間、小六は何にもせず^{すわ}にそこへ坐^{すわ}つて、御米の手先を見つめていた。これが夫だと、いつまでも黙^{もく}つて針を動かすのが、御米の例であつたが、相手が小六の時には、そう投^{なげ}遣^{やり}にできないのが、また御米の性質であつた。だからそんな時には力めても話をした。話の題目で、ややともすると小六の口に宿^{やど}りたがるものは、彼の未来をどうしたら好^{この}かろうと云う心配であつた。

「だつて小六さんなんか、まだ若いじゃありませんか。何をしたつてこれからだわ。そりや兄さんの事よ。そう悲観してもいいのは」

御米は二度ばかりこういう慰め方をした。三度目には、

「来年になれば、安さんの方でどうか都合して上げるつて受合つて下すつたんじやなくつて」と聞いた。小六はその時不慥な表情をして、

「そりや安さんの計画が、口でいう通り旨く行けば訳はないんでしようが、だんだん考えると、何だか少し当にならないような気がし出してね。鰹船かつおぶねもあんまり儲もうからないようだから」と云つた。御米は小六の懔然ふぜんとしてゐる姿を見て、それを時々酒気を帯びて帰つて来る、どこかに殺氣さつきを含んだ、しかも何が癪しゃくに障さわるんだか訳が分らないでいてはなはだ不平らしい小六と比

較すると、心の中で氣の毒にもあり、またおかしくもあつた。
その時は、

「本当にね。兄さんにさえ御金があると、どうでもして上げる事ができるんだけれども」と、御世辞でも何でもない、同情の意を表した。

その夕暮であつたか、小六はまた寒い身体を外套に包んで出て行つたが、八時過に帰つて来て、兄夫婦の前で、袂から白い細長い袋を出して、寒いから蕎麦搔そばがきを拵こしらえて食おうと思つて、佐伯へ行つた帰りに買つて来たと云つた。そうして御米が湯を沸わかしているうちに、煮出しを拵かえるとか云つて、しきりに鰹節かつぶしを搔かいた。

その時宗助夫婦は、最近の消息として、安之助の結婚がとうとう春まで延びた事を聞いた。この縁談は安之助が学校を卒業

すると間もなく起つたもので、小六が房州から帰つて、叔母に学資の供給を断られる時分には、もうだいぶ話が進んでいたのである。正式の通知が来ないので、いつ纏まとつたか、宗助はまるで知らなかったが、ただ折々佐伯へ行つては、何か聞いて来る小六を通じてのみ、彼は年内に式を挙げるはずの新夫婦を予想した。その他には、嫁の里がある会社員で、有福な生計くらしをしている事と、その学校が女学館であるという事と、兄弟がたくさんあると云う事だけを、同じく小六を通じて耳にした。写真にせよ顔を知つてるのは小六ばかりであつた。

「好い器量？」と御米が聞いた事がある。

「まあ好い方でしょう」と小六が答えた事がある。

その晩はなぜ暮のうちに式を済まさないかと云うのが、蕎麦搔のでき上る間、三人の話題になつた。御米は方位でも悪いの

だろうと臆測おくそくした。宗助は押しつまつて日がないからだろうと考ひとえた。独り小六だけが、

「やつぱり物質的の必要かららしいです。先が何でもよほど派出はでな家うちなんで、叔母さんの方でもそう単簡たんかんに済まされないんでしよう」といつにない世帯染みた事を云つた。

十一

御米およねのぶらぶらし出したのは、秋も半ばなか過ぎて、紅葉もみじの赤黒く

縮ちぢれる頃であつた。京都にいた時分は別として、広島でも福岡

でも、あまり健康な月日を送つた経験のない御米は、この点に掛けると、東京へ歸つてからも、やはり仕合せとは云えなかつた。この女には生れ故郷の水が、性しょうに合わないのだろうと、疑

ぐれば疑ぐられるくらい、御米は一時悩んだ事もあつた。

近頃はそれがだんだん落ちついて来て、宗助そうすけの氣を揉もむ機ばあい会

も、年に幾度と勘定かんじようができるくらい少なくなつたから、宗助は

役所の出入でいりに、御米はまた夫の留守たちいの立居に、等しく安心して

時間を過す事ができたのである。だからことしの秋が暮れて、

薄い霜しもを渡る風が、つらく肌を吹く時分になつて、また少し心

持が悪くなり出しても、御米はそれほど苦にもならなかつた。

始のうちは宗助にさえ知らせなかつた。宗助が見つけて、医者

に掛かれと勧めても、容易に掛からなかつた。

そこへ小六ころくが引越して来た。宗助はその頃の御米を觀察して、

體質の状態やら、精神の模様やら、夫おつとだけによく知っていたか

ら、なるべくは、人数ひとかずを殖ふやして宅うちの中を混雜ごたつかせたくないと思

つたが、事情やむを得ないので、成るがままにしておくよ

りほかに、手段の講じようもなかった。ただ口の先で、なるべく安静にしていなくてはいけないと云う矛盾した助言は与えた。御米は微笑して、

「大丈夫よ」と云った。この答を得た時、宗助はなおの事安心ができなくなつた。ところが不思議にも、御米の気分は、小六が引越して来てから、ずっと引立つた。自分に責任の少しでも加わつたため、心が緊張したものと見えて、かえつて平生よりは、かいがいしく夫や小六の世話をした。小六にはそれがまるで通じなかつたが、宗助から見ると、御米が在来よりどれほど力^{つと}めてゐるかがよく解つた。宗助は心のうちで、このまめやかな細君に新らしい感謝の念^{いだ}を抱くと同時に、こう気を張り過ぎる結果が、一度に身体^{からだ}に障^{さわ}るような騒ぎでも引き起してくれなければいいかと心配した。

不幸にも、この心配が暮の二十日過はつかすぎになつて、突然事實にな

りかけたので、宗助は予期の恐怖に火が点ついたように、いたく

狼狽ろうばいした。

その日は判然はつきり土に映らない空が、朝から重なり合つ

て、重い寒さが終日人の頭を抑おさえつけていた。御米は前の晩に

また寝られないで、休ませ損そくなつた頭を抱えながら、辛抱して

働はたらき出したが、起たつたり動いたりするたびに、多少脳に応こたえ

る苦痛はあつても、比較的明るい外界の刺戟しげきに紛まぎれたためか、

じつと寝ていながら、頭だけが冴さえて痛むよりは、かえつて凌しの

ぎやすかつた。とかくして夫を送り出すまでは、しばらくした

らまたいつものように折り合つて来る事と思つて我慢していた。

ところが宗助がいなくなつて、自分の義務に一段落が着いたと

いう氣の弛ゆるみが出ると等しく、濁つた天氣がそろそろ御米の頭

を攻め始めた。空を見ると凍こおつているようであるし、家うちの中に

いると、陰気な障子しょうじの紙を透とおして、寒さが浸しみ込んで来るかと思われるくらいだのに、御米の頭はしきりに熱ほてつて来た。仕方がないから、今朝あげた蒲団ふとんをまた出して来て、座敷へ延べたまま横になった。それでも堪たえられないので、清に濡手拭ぬれてぬぐいを絞しぼらして頭へ乗せた。それが直生温じきなまぬるくなるので、枕元に金盥かなだらを取かり寄せて時々絞しぼり易かえた。

午ひるまでこんな姑息手段こそくしゅだんで断えず額を冷やして見たが、いつこ
うはかばかりしい験げんもないので、御米は小六のために、わざわざ
起きて、いっしょに食事をする根気もなかった。清きよにいいつけ
て膳立ぜんだてをさせて、それを小六に薦めすすめさしたまま、自分はやはり
床を離れずにいた。そうして、平生夫のする柔かい括枕くくりまくらを持っ
て来て貰もらって、堅いのと取り替えた。御米は髪この損こわれるのを、
女らしく苦にする勇氣にさえ乏しかったのである。

小六は六畳から出て来て、ちよつと襖ふすまを開けて、御米の姿を覗のぞき込んだが、御米が半なかば床の間の方を向いて、眼を塞ふさいでいたので、寝ついたとでも思つたものか、一言ひとことの口も利きかずに、またそつと襖を閉めた。そうして、たつた一人大きな食卓を専領して、始めからさらさらと茶漬を搔かき込む音をさせた。

二時頃になつて、御米はやつとの事、とろとろと眠つたが、眼が覚さめたら額を捲まいた濡れ手拭がほとんど乾くくらい暖かになつていた。その代り頭の方は少し楽になつた。ただ肩から背筋せすじへ掛けて、全体に重苦しいような感じが新らしく加わつた。御米は何でも精をつけなくては毒だという考から、一人で起きて遅い午飯ひるはんを軽く食べた。

「御気分はいかがでございます」と清が御給仕をしながら、しきりに聞いた。御米はだいぶいいようだったので、床を上げて

貰つて、火鉢に倚よつたなり、宗助の帰りを待ち受けた。

宗助は例刻に帰つて来た。神田の通りで、門かどなみ並旗を立てて、

もう暮の売出しを始めた事だの、勸工場かんこうばで紅白の幕を張つて楽隊に景気をつけさしている事だのを話した末、

「賑にぎやかだよ。ちよつと行つて御覧。なに電車に乗つて行けば訳はない」と勧めた。そうして自分は寒さに腐蝕ふしょくされたように赤い顔をしていた。

御米はこう宗助から労いたわられた時、何だか自分の身体の悪い事を訴たえるに忍びない心持がした。実際またそれほど苦しくもなかった。それでいつもの通り何気なにげない顔をして、夫に着物を着換えさしたり、洋服を畳んだりして夜よに入った。

ところが九時近くになつて、突然宗助に向つて、少し加減が悪いかから先へ寝たいと云い出した。今まで平生の通り機嫌よく

話してただけに、宗助はこの言葉を聞いてちよつと驚ろいたが、大した事でもないと言ふ御米の保証に、ようやく安心してすぐ休む支度をさせた。

御米が床へ這入つてから、約二十分ばかりの間、宗助は耳の傍に鉄瓶の音を聞きながら、静な夜を丸心の洋灯に照らしていた。彼は来年度に一般官吏に増俸の沙汰があるという評判を思ひ浮べた。またその前に改革か淘汰が行われるに違ないという噂に思い及んだ。そうして自分はどっちの方へ編入されるのだろうかと思つた。彼は自分を東京へ呼んでくれた杉原が、今もお課長として本省にいないのを遺憾とした。彼は東京へ移つてから不思議とまだ病氣をした事がなかった。したがつてまだ欠勤届を出した事がなかった。学校を途中でやめたなり、本はほとんど読まないのだから、学問は人並にできないが、役所でや

る仕事に差支^{さしつか}えるほどの頭脳ではなかった。

彼はいろいろな事情を綜合^{そうごう}して考えた上、まあ大丈夫だろうと腹の中できめた。そうして爪の先で軽く鉄瓶の縁^{ふち}を敲^{たた}いた。その時座敷で、

「あなたちよつと」と云う御米の苦しそうな声が聞えたので、我知らず立ち上がった。

座敷へ来て見ると、御米は眉^{まゆ}を寄せて、右の手で自分の肩を抑^{おさ}えながら、胸まで蒲団^{ふとん}の外へ乗り出していた。宗助はほとんど器械的に、同じ所へ手を出した。そうして御米の抑えている上から、固く骨の角^{かど}を攫^{つか}んだ。

「もう少し後^{うしろ}の方」と御米が訴えるように云った。宗助の手が御米の思う所へ落ちつくまでには、二度も三度もそこここと位置^かを易えなければならなかった。指で圧^おしてみると、頸^{くび}と肩の

繼目の少し背中へ寄った局部が、石のように凝こっていた。御米は男の力いっぱいにそれを抑えてくれと頼んだ。宗助の額からは汗が煮染にじみ出した。それでも御米の満足するほどは力が出なかつた。

宗助は昔の言葉で早打肩はやうちかたというのを覚えていた。小さい時祖父じじいから聞いた話に、ある侍が馬に乗ってどこかへ行く途中で、急にこの早打肩はやうちかたに冒おかされたので、すぐ馬から飛んで下りて、たちまち小柄こづかを抜くや否いなや、肩先を切つて血を出したため、危うい命を取り留めたというのがあつたが、その話が今明らかに記憶の焼点しょうてんに浮んで出た。その時宗助はこれはなんと思つた。けれどもはたして刃物を用いて、肩の肉を突いていいものやら、悪いものやら、決しかねた。

御米はいつになく逆上のぼせて、耳まで赤くしていた。頭が熱い

かと聞くと苦しそうに熱いと答えた。宗助は大きな声を出して清に氷嚢こおりぶくろへ冷たい水を入れて来いと命じた。氷嚢があいにく無かつたので、清は朝の通り金盥かなだらひに手拭てぬぐいを浸つけて持つて来た。清が頭を冷やしているうち、宗助はやはり精いつぱい肩を抑えていた。時々少しはいいかと聞いても、御米は微かすかに苦しいと答えるだけであつた。宗助は全く心細くなつた。思い切つて、自分で馳かけ出して医者を迎むかいに行こうとしたが、後あとが心配で一足も表へ出る気にはなれなかつた。

「清、御前急いで通りへ行つて、氷嚢を買つて医者呼んで来い。まだ早いから起きてるだろう」

清はすぐ立つて茶の間の時計を見て、

「九時十五分でございます」と云いながら、それなり勝手口へ回つて、ごそごそ下駄さかを探さがしているところへ、旨うまい具合に外か

ら小六が帰つて来た。例の通り兄には挨拶もしないで、自分の部屋へ這入ろうとするのを、宗助はおい小六と烈しく呼び止めた。小六は茶の間で少し躊躇していたが、兄からまた二声ほど続けざまに大きな声を掛けられたので、やむを得ず低い返事をして、襖から顔を出した。その顔は酒氣のまだ醒めない赤い色を眼の縁に帯びていた。部屋の中を覗き込んで、始めて吃驚した様子で、

「どうかなすつたんですか」と酔が一時に去つたような表情をした。

宗助は清に命じた通りを、小六に繰り返して、早くしてくれと急ぎ立てた。小六は外套も脱がずに、すぐ玄関へ取つて返した。

「兄さん、医者まで行くのは急いでも時間が掛かりますから、坂

井さんの電話を借りて、すぐ来るように頼みましょう」

「ああ。そうしてくれ」と宗助は答えた。そうして小六の帰る間、清に何返なんべんとなく金盥の水を易かえさしては、一生懸命に御米の肩を圧おしつけたり、揉もんだりしてみた。御米の苦しむのを、何もせずにとだ見ているに堪たえなかつたから、こうして自分の気を紛まぎらしていたのである。

この時の宗助に取つて、医者の来るのを今か今かと待ち受ける心ほど苛つらいものはなかつた。彼は御米の肩を揉みながらも、絶えず表の物音に気を配つた。

ようやく医者が来たときは、始めて夜が明けたような心持がした。医者は商売柄おりかばんだけあつて、少しも狼狽うろたえた様子を見せなかつた。小さい折靱おりかばんを脇に引き付けて、落ちつき払つた態度で、慢性病の患者でも取り扱うように緩ゆるくりした診察をした。その

逼せまらない顔色を傍はたで見えていたせい、わくわくした宗助の胸もようやく治おさまった。

医者は芥子からしを局部へ貼はる事と、足を湿布しつぷで温める事と、それから頭を氷で冷す事とを、応急手段として宗助に注意した。そうして自分で芥子を搔かいて、御米の肩から頸くびの根へ貼りつけてくれた。湿布は清と小六とで受持った。宗助は手拭てぬぐいの上から氷囊こおりぶくろを額の上に当てがった。

とかくするうち約一時間も経った。医者はしばらく経過を見て行こうと云つて、それまで御米の枕元すわに坐つていた。世間話も折々は交まじえたが、おおかたは無言のまま二人共に御米の容体を見守る事が多かった。夜は例のごとく静しずかに更ふけた。

「だいぶ冷えますな」と医者が云った。宗助は気の毒になつたので、あとの注意をよく聞いた上、遠慮なく引き取つてくれる

ようにと頼んだ。その時御米は先刻さつきよりはだいぶ輕快になつていたからである。

「もう大丈夫でしょう。頓服とんぷくを一回上げますから今夜飲んで御覽なさい。多分寝られるだろうと思います」と云つて医者は帰つた。小六はすぐその後あとを追つて出て行つた。

小六が薬取に行つた間に、御米は

「もう何時」と云いながら、枕元の宗助を見上げた。宵よいとは違つて頬から血が退ひいて、洋灯ランプに照らされた所が、ことに蒼白あおしろく映つた。宗助は黒い毛の乱れたせいだろうと思つて、わざわざ鬢びんの毛を搔き上げてやつた。そうして、

「少しはいいだろう」と聞いた。

「ええよつぽど楽になつたわ」と御米はいつもの通り微笑を洩もらした。御米は大抵苦しい場合でも、宗助に微笑を見せる事を

忘れなかつた。茶の間では、清が突伏したまま^{いひつき}軒をかいていた。「清を寝かしてやつて下さい」と御米が宗助に頼んだ。

小六が薬取りから帰つて来て、医者いしやの云いつけ通り服薬を済ましたのは、もうかれこれ十二時近くであつた。それから十分と経たないうちに、病人はやすや寝入つた。

「好い塩梅だ」と宗助が御米の顔を見ながら云つた。小六もしばらく^{あによめ}嫂の様子を見守つていたが、

「もう大丈夫でしょう」と答えた。二人は氷嚢を額からおろした。

やがて小六は自分の部屋へ這入る。宗助は御米の傍へ床を延べていつものごとく寝た。五六時間の後冬のちの夜は錐きりのような霜しもを挟さしはさんで、からりと明け渡つた。それから一時間すると、大地を染める太陽が、遮さへぎるもののない蒼空に憚あおぞらりなく上つた。

御米はまだすやすや寝ていた。

そのうち朝餉あさげも済んで、出勤の時刻がようやく近づいた。けれども御米は眠りから覚めるさ気色けしきもなかった。宗助は枕辺まくらべに曲こんで、深い寝息を聞きながら、役所へ行こうか休もうかと考えた。

十二

朝の内は役所で常のごとく事務を執とっていたが、折々昨夕ゆうべの光景が眼に浮ぶに連れて、自然御米およねの病気が氣に罹かるので、仕事は思うように運ばなかった。時には変な間違をさえた。宗助そうすけは午ひるになるのを待つて、思い切つて宅うちへ歸つて来た。

電車の中では、御米の眼がいつ頃覚さめたらう、覚めた後は心

持がだいぶ好くなつたろう、発作ほつさももう起る氣遣きづかいなからうと、すべて悪くない想像ばかり思い浮べた。いつもと違つて、乗客の非常に少ない時間に乗り合わせたので、宗助は周囲の刺戟しげきに氣を使う必要がほとんどなかった。それで自由に頭の中へ現われる画を何枚となく眺ながめた。そのうちに、電車は終点に來た。

宅の門口かどぐちまで來ると、家の中はひっそりして、誰もいないようであつた。格子こうしを開けて、靴を脱いで、玄關に上がつても、出て來るものはなかつた。宗助はいつものように縁側えんがわから茶の間へ行かずに、すぐ取付とつつきの襖ふすまを開けて、御米の寢ている座敷へ這入はいつた。見ると、御米は依然として寢ていた。枕元の朱塗の盆さんやくに散葉の袋と洋杯のが載つていて、その洋杯コップの水が半分残つているところも朝と同じであつた。頭を床の間の方へ向けて、左の頬かかしと芥子からしを貼つた襟元えりもとが少し見えるところも朝と同じであつ

た。呼吸いきよりほかに現実世界と交通のないように思われる深い眠ねむりも朝見た通りであつた。すべてが今朝出掛に頭の中へ収めて行つた光景と少しも變つていなかった。宗助は外套マントも脱がずに、上から曲こじんで、すうすういう御米の寢息をしばらく聞いていた。御米は容易に覚めそうにも見えなかつた。宗助は昨夕ゆうべ御米が散菓を飲んでから以後の時間を指を折つて勘定した。そうしてようやく不安の色を面おもてに表わした。昨夕までは寝られないのが心配になつたが、こう前後不覚に長く寝るところを眼まのあたりに見ると、寝る方が何かの異状ではないかと考え出した。

宗助は蒲団ふとんへ手を掛けて二三度軽く御米を揺振ゆすぶつた。御米の髪くくりまくらが括枕くくりまくらの上で、波を打つように動いたが、御米は依然としてすうすう寝ていた。宗助は御米を置いて、茶の間から台所へ出た。流し元のこおけ小桶の中に茶碗と塗碗が洗わないまま浸ひけてあつ

た。下女部屋を覗くと、清が自分の前に小さな膳を控えたなり、御櫃に倚りかかつて突伏していた。宗助はまた六畳の戸を引いて首を差し込んだ。そこには小六が掛蒲団を一枚頭から引被つて寝ていた。

宗助は一人で着物を着換えたが、脱ぎ捨てた洋服も、人手を借りずに自分で畳んで、押入にしまった。それから火鉢へ火を継いで、湯を沸かす用意をした。二三分は火鉢に持たれて考えていたが、やがて立ち上がつて、まず小六から起しにかかった。次に清を起した。二人とも驚ろいて飛び起きた。小六に御米の今朝から今までの様子を聞くと、実は余り眠いので、十一時半頃飯を食つて寝たのだが、それまでは御米もよく熟睡していたのだと云う。

「医者へ行つてね。昨夜の葉を戴いてから寝出して、今になつ

でも眼が覚めませんが、さしつかえ差支ないでしようかつて聞いて来てくれ」

「はあ」

小六は簡単な返事をして出て行つた。宗助はまた座敷へ来て御米の顔を熟視した。起してやらなくつては悪いような、また起しては身体からだへ障さわるような、分別ふんべつのつかない惑まどいを抱いて腕組をした。

間もなく小六が帰つて来て、医者はずうど往診に出かけるところであつた、訳を話したら、では今から一二軒寄つてすぐ行こうと答えた、と告げた。宗助は医者が見えるまで、こうして放つておいて構わないのかと小六に問い返したが、小六は医者以上よりほかに何にも語らなかつたと云うだけなので、やむを得ず元のごとく枕辺まくらべにじつと坐つていた。そうして心の中うち

で、医者も小六も不親切過ぎるように感じた。彼はその上昨夕御米を介抱している時に帰つて来た小六の顔を思い出して、なお不愉快になつた。小六が酒を呑む事は、御米の注意で始めて知つたのであるが、その後氣をつけて弟の様子をよく見ていると、なるほど何だか真面目でないところもあるようなので、いつかみっちり異見でもしなければなるまいくらいに考えてはいたが、面白くもない二人の顔を御米に見せるのが、氣の毒なので、今日までわざと遠慮していたのである。

「云い出すなら御米の寝ている今である。今ならどんな氣不味いことを双方で言い募つたつて、御米の神経に障る氣遣はない」
ここまで考えついたけれども、知覺のない御米の顔を見ると、またその方が氣がかりになつて、すぐにでも起したい心持がするので、つい決し兼てぐずぐずしていた。そこへようやく医者

が来てくれた。

昨夕の折靱おりかばんをまた丁寧ていねいに傍わきへ引きつけて、緩ゆるくり巻煙草まきたばこを吹

かしながら、宗助の云うことを、はあはあと聞いていたが、どれ拝見致しましょうと御米の方へ向き直った。彼は普通の場合のように病人の脈を取って、長い間自分の時計を見つめていた。それから黒い聴診器を心臓の上に当てた。それを丁寧にあちらこちらと動かした。最後に丸い穴の開あいた反射鏡を出して、宗助に蠟燭ろうそくを点つけてくれと云った。宗助は蠟燭を持たないので、清に洋灯ランプを点つけさした。医者いしやは眠まっている御米の眼を押し開けて、仔細しさいに反射鏡の光を睫まつげの奥に集めた。診察はそれで終った。「少し葉きが利きき過ぎましたね」と云って宗助の方へ向き直ったが、宗助の眼の色を見るや否いなや、すぐ、

「しかし御心配になる事はありません。こう云う場合に、もし

悪い結果が起るとすると、きつと心臓か脳を冒すものですが、
今拝見したところでは双方共異状は認められませんから」と説
明してくれた。宗助はそれでようやく安心した。医者はまた自
分の用いた眠り薬が比較的新らしいもので、学理上、他の睡眠
剤のように有害でない事や、またその効目が患者の体質に因つ
て、程度に大變な相違のある事などを語つて歸つた。歸るとき
宗助は、

「では寝られるだけ寝かしておいても差支ありませんか」と聞
いたら、医者は用さえなければ別に起す必要もあるまいと答え
た。

医者が歸つたあとで、宗助は急に空腹になつた。茶の間へ出
ると、先刻掛けておいた鉄瓶がちんちん沸つていた。清を呼ん
で、膳を出せと命ずると、清は困つた顔つきをして、まだ何の

用意もできていないと答えた。なるほど晩食には少し間があつた。宗助は楽々と火鉢の傍に胡坐を搔いて、大根の香の物を嘯みながら湯漬を四杯ほどつづけざまに掻き込んだ。それから約三十分ほどしたら御米の眼がひとりでに覺めた。

十三

新年の頭を拵らえようという氣になつて、宗助は久し振に髪結床の敷居を跨いだ。暮のせいか客がだいぶ立て込んでいたので、鉢の音が二三カ所で、同時にちよきちよき鳴つた。この寒さを無理に乗り越して、一日も早く春に入ろうと焦慮るような表通の活動を、宗助は今見て来たばかりなので、その鉢の音が、いかにも忙しない響となつて彼の鼓膜を打った。

しばらくストーブ煖炉はたの傍で煙草たばこを吹かして待っている間に、宗助は自分と関係のない大きな世間の活動に否応なしに捲まき込まれて、やむを得ず年を越さなければならぬ人のごとくに感じた。正月を眼の前へ控えた彼は、實際これという新らしい希望もないのに、いたずらに周囲から誘われて、何だかざわざわした心持を抱いだいていたのである。

御米およねの発作ほっさはようやく落ちついた。今では平日いつものごとく外へ出ても、家の事うちがそれほど気にかからないぐらいになった。余所よそに比べると閑静な春の支度も、御米から云えば、年に一度の忙がしさには違なかつたので、あるいはいつも通りの準備さえ抜いて、常よりも簡単に年を越す覚悟をした宗助は、蘇生よみがえったようにはつきりした妻さいの姿を見て、恐ろしい悲劇が一步遠退とおのいた時のごとくに、胸を撫なでおろした。しかしその悲劇がまたいつ

いかなる形で、自分の家族を捕えに来るか分らないと云う、ぼんやりした掛念^{けねん}が、折々彼の頭のなかに霧^{きり}となつてかかった。

年の暮に、事を好むとしか思われない世間の人が、故意^{わざ}と短い日を前へ押し出したがつて齷齪^{あくせく}する様子を見ると、宗助はなおの事この茫漠^{ぼうばく}たる恐怖の念に襲^{おそ}われた。成ろうことなら、自分だけは陰気な暗い師走^{しわす}の中に一人残つていたい思さえ起つた。ようやく自分の番が来て、彼は冷たい鏡のうちに、自分の影を見出した時、ふとこの影は本来何者だろうと眺^{なが}めた。首から下は真白な布に包まれて、自分の着ている着物の色も縞^{しま}も全く見えなかった。その時彼はまた床屋の亭主が飼っている小鳥の籠^{かご}が、鏡の奥に映っている事に気がついた。鳥が止^{とま}り木^ぎの上をちらりちらりと動いた。

頭^にへ香^{におい}のする油を塗られて、景気のいい声を後^{うしろ}から掛けられ

て、表へ出たときは、それでも清々^{せいせい}した心持であつた。御米の勧め通り髪を刈つた方が、結局^{つまり}氣を新たにする効果があつたのを、冷たい空氣の中で、宗助は自覺した。

水道税の事でちよつと聞き合せる必要が生じたので、宗助は帰り路に坂井へ寄つた。下女が出て来て、こちらへと云うから、いつもの座敷へ案内するかと思うと、そこを通り越して、茶の間へ導びいていった。すると茶の間の襖^{ふすま}が二尺ばかり開いていて、中から三四人の笑い声が聞えた。坂井の家庭は相変らず陽氣であつた。

主人は光沢^{つや}の好い長火鉢^{ながひばち}の向側に坐つていた。細君は火鉢を離れて、少し縁側^{えんがわ}の障子^{しょうじ}の方へ寄つて、やはりこちらを向いてゐた。主人の後に細長い黒い柢^{わく}に嵌めた柱時計がかかつていた。時計の右が壁で、左が袋戸棚^{ふくろとだな}になつてゐた。その張交^{はりまぜ}に石摺^{いしずり}だ

の、俳画だの、扇の骨を抜いたものなどが見えた。

主人と細君のほかに、筒袖つつそでの揃そろいの模様の被布ひふを着た女の子が二人肩を擦すりつけ合つて坐つていた。片方は十二三で、片方は十とおぐらいに見えた。大きな眼を揃ふすまえて、襖ふすまの陰から入つて来た宗助の方を向いたが、二人の眼元にも口元にも、今笑つたばかりの影が、まだゆたかに残つていた。宗助は一応室へやの内を見回して、この親子のほかに、まだ一人妙な男が、一番入口に近い所かしこに畏かしこまつているのを見出した。

宗助は坐つて五分と立たないうちに、先刻さつきの笑声は、この変な

男と坂井の家族との間に取り換わされた問答から出る事を知つた。男は砂埃すなほこりでざらつきそうな赤い毛と、日に焼けて生涯しょうがい褪さめつこない強い色もを有つていた。瀬戸物の釦ボタンの着いた白木綿しろもめんの襯衣シヤツを着て、手織こわの硬ぬのこい布子の襟えりから財布の紐ひもみたような長い

丸打まるうちをかけた様子は、滅多めったに東京などへ出る機会のない遠い山の国のものとしか受け取れなかつた。その上男はこの寒いのにひやひや膝小僧を少し出して、紺こんの落ちた小倉こくらの帯の尻に差した手拭てぬぐいを抜いては鼻の下を擦こすつた。

「これは甲斐かいの国から反物たんものを背負しよつてわざわざ東京まで出て来る男なんです」と坂井の主人が紹介すると、男は宗助の方を向いて、

「どうか旦那、一つ買つておくれ」と挨拶あいさつをした。

なるほど銘仙めいせんだの御召おめしだの、白紬しろつむぎだのがそこら一面に取り散

らしてあつた。宗助はこの男の形装なりや言葉遣ことばづかいのおかしい割に、

立派な品物を背中へ乗せて歩行あるくのをむしろ不思議に思った。

主人の細君の説明によると、この織屋の住んでいる村は焼石ばかりで、米あわも粟とも収れないから、やむを得ず桑くわを植えて蚕かいこを飼

うんだそうであるが、よほど貧しい所と見えて、柱時計を持っている家が一軒だけで、高等小学へ通う小供が三人しかないという話であつた。

「字の書けるものは、この人ぎりなんだそうですよ」と云つて細君は笑つた。すると織屋も、

「本当のこんだよ、奥さん。読み書き算筆さんぴつのできるものは、おれよりほかにねえんだからね。全く非道ひどい所にや違ちがはない」と真面目に細君の云う事を首肯うけがつた。

織屋はいろいろの反物を主人や細君の前へ突きつけては、「買つておくれ」という言葉をしきりに繰り返した。そりや高いよいくらいくらに御負けなどと云われると、「値じやねえね」とか、「拝むからそれで買つておくれ」とか、「まあ目方めがたを見ておくれ」とかすべて異様な田舎いなかびた答をした。そのたびに皆みんなが笑つた。

主人夫婦はまた閑^{ひま}だと見えて、面白半分にいつまでも織屋を相手にした。

「織屋、御前そうして荷を背負^{しよ}つて、外へ出て、時分どきになったら、やっぱり御膳^{ごぜん}を食べるんだろうね」と細君が聞いた。

「飯を食わねえでいられるもんじゃないよ。腹の減る事ちゅうたら」

「どんな所で食べるの」

「どんな所で食べるちゅうて、やっぱり茶屋で食うだね」

主人は笑いながら茶屋とは何だと聞いた。織屋は、飯を食^うます所が茶屋だと答えた。それから東京へ出立^{でたて}には飯が非常に旨^{うま}いので、腹を据^すえて食い出すと、大抵の宿屋は叶^{かな}わない、三度食^みつちや気の毒だと云うような事を話して、また皆^{みんな}を笑わした。

織屋はしまいに撚糸よりいとの紬つむぎと、白絹しろろを一匹細君いっぴぎに売りつけた。宗助はこの押しつまつた暮に、夏の絹を買う人を見て余裕よゆうのあるものはまた格別だと感じた。すると、主人が宗助に向つて、「どうですあなたも、ついでに何か一つ。奥さんの不断着でも」と勧めた。細君もこう云う機会に買つて置くと、幾割か値安に買える便宜べんぎを説いた。そうして、「なに、御払おはらいはいつでもいいんです」と受合つてくれた。宗助はとうとう御米のために銘仙めいせんを一反買う事にした。主人はそれをさんざん値切つて三円に負けさした。

織屋は負けた後あとでまた、

「全く値じゃねえね。泣きたくなるね」と云つたので、大勢がまた一度に笑つた。

織屋はどこへ行つてもこういう鄙ひなびた言葉を使つて通してい

るらしかった。毎日馴染みの家をぐるぐる回^{まわ}つて歩いているうちには、背中の荷がだんだん軽^{かろ}くなつて、しまいに紺^{こん}の風呂敷^{ふろしき}と真田紐^{さなだひも}だけが残る。その時分にはちょうど旧の正月が来るので、ひとまず国元へ帰つて、古い春を山の中で越して、それからまた新らしい反物を背負えるだけ背負つて出て来るのだと云つた。そうして養蚕^{ようさん}の忙^{せわ}しい四月の末か五月の初までに、それをすっかり悉皆金に換えて、また富士の北影の焼石ばかりころがつている小村へ帰つて行くのだそうである。

「宅^{うち}へ来出してから、もう四五年になります、いつ見ても同じ事で、少しも変らないんですよ」と細君が注意した。

「實際珍らしい男です」と主人も評語を添えた。三日も外へ出ないと、町幅がいつの間にか取り広げられていたり、一日新聞を読まないと、電車の開通を知らずに過したりする今の世に、

年に二度も東京へ出ながら、こう山男の特色をどこまでも維持して行くのは、實際珍らしいに違なかつた。宗助はつくづくこの織屋の容貌ようぼうやら態度やら服装やら言葉使やらを観察して、一種気の毒な思をなした。

彼は坂井を辞して、家へ帰る途中にも、折々インヴァネスの羽根の下に抱えて来た銘仙の包つつみを持ち易かえながら、それを三円という安い価ねで売った男の、粗末な布子ぬのこの縞しまと、赤くてばさばさした髪の毛と、その油気あぶらけのない硬こわい髪の毛が、どういふ訳か、頭の真中で立派に左右に分けられている様を、絶えず眼の前に浮べた。

宅では御米が、宗助に着せる春の羽織をようやく縫い上げて、おし 庄おしの代りに坐蒲団ざぶたんの下へ入れて、自分でその上へ坐っていると
ころであつた。

「あなた今夜敷いて寝て下さい」と云つて、御米は宗助を顧み^{かえり}た。夫から、坂井へ来ていた甲斐^{かい}の男の話を聞いた時は、御米もさすがに大きな声を出して笑つた。そうして宗助の持つて歸つた銘仙^{めいせん}の縞柄^{しまがら}と地合^{じあい}を飽^あかず眺^{なが}めては、安い安いと云つた。銘仙は全く品^{しな}の良いものであつた。

「どうして、そう安く売つて割に合うんでしよう」としまいに聞き出した。

「なに中へ立つ呉服屋が儲^{もう}け過ぎてゐるのさ」と宗助はその道に明るいような事を、この一反の銘仙から推断して答えた。

夫婦の話はそれから、坂井の生活に余裕のある事と、その余裕のために、横町の道具屋などに意外な儲^{もう}け方^{かた}をされる代りに、時とするとこう云う織屋などから、差し向き不用のものを廉価^{れんか}に買つておく便宜^{べんぎ}を有している事などに移つて、しまいにその

家庭のいかにも陽気で、賑やかな模様に落ちて行つた。宗助はその時突然語調を更^かえて、

「なに金があるばかりじゃない。一つは子供が多いからさ。子供さえあれば、大抵貧乏な家でも陽気になるものだ」と御米を覺^{さと}した。

その云い方が、自分達の淋^{さみ}しい生涯^{しょうがい}を、多少自ら窘^{みづか}めるような苦^{にが}い調子を、御米の耳に伝えたので、御米は覚え^{ひざ}ず膝の上の反物から手を放して夫の顔を見た。宗助は坂井から取つて来た品が、御米の嗜好^{しこう}に合つたので、久しぶりに細君を喜ばせてやつた自覚があるばかりだつたから、別段そこには気がつか^なかつた。御米もちよつと宗助の顔を見たなりその時は何にも云わ^なかつた。けれども夜^よに入^いつて寝る時間が来るまで御米はそれをわざと延ばしておいたのである。

二人はいつもの通り十時過床に入つたが、夫の眼がまだ覚め
ている頃を見計らつて、御米は宗助の方を向いて話しかけた。

「あなた先刻さつき小供がないと淋しくさむつていけないとおつしやつて
ね」

宗助はこれに類似の事を普遍的に云つた覺はたしかにあつた。
けれどもそれは強がちに、自分達の身の上について、特に御米
の注意を惹くひために口にした、故意の觀察でないのだから、こ
う改たまつて聞き糺ただされると、困るよりほかはなかつた。

「何も宅うちの事を云つたのじゃないよ」

この返事を受けた御米は、しばらく黙つていた。やがて、

「でも宅の事を始終淋しい淋しいと思つていらつしやるから、
必竟つまりあんな事をおつしやるんでしよう」と前とほぼ似たような
問を繰り返した。宗助は固もとよりそうだと答えなければならぬ

或物を頭の中に有つていた。けれども御米を憚つて、それほど
あからさま明白地な自白をあえてし得なかつた。この病氣上りの細君の心
を休めるためには、かえつてそれを冗談じょうだんにして笑つてしまう方
が善よかろうと考えたので、

「淋しいと云えば、そりや淋しくなくてもないがね」と調子を
易かえてなるべく陽氣に出たが、そこで詰まつたぎり、新らしい
文句も、面白い言葉も容易に思いつけなかつた。やむを得ず、
「まあいいや。心配するな」と云つた。御米はまた何とも答え
なかつた。宗助は話題を変えようと思つて、
「昨夕ゆうべも火事があつたね」と世間話をし出した。すると御米は
急に、

「私は実にあなたに御氣の毒で」と切なそうに言訳を半分して、
またそれなり黙つてしまった。洋灯ランプはいつものように床の間の

上に据すえてあつた。御米は灯ひに背そむいていたから、宗助には顔の表情が判然はつきり分らなかつたけれども、その声は多少涙でうるんでいるように思われた。今まで仰向あおむいて天井を見ていた彼は、すぐ妻の方へ向き直つた。そうして薄暗い影になつた御米の顔をじつと眺ながめた。御米も暗い中からじつと宗助を見ていた。そうして、

「疾とうからあなたに打ち明けて謝罪あやまろう謝罪まろうと思つていたんですが、つい言い悪にくかつたもんだから、それなりにしておいたのです」と途切れ途切れに云つた。宗助には何の意味かまるで解らなかつた。多少はヒステリーのせいかとも思つたが、全然そうとも決しかねて、しばらく茫然ぼんやりしていた。すると御米が思い詰めた調子で、

「私にはとても子供のできる見込はないのよ」と云い切つて泣

き出した。

宗助はこの可憐な自白をどう慰さめていいか分別に余つて当惑していたうちにも、御米に対してはなはだ気の毒だという思が非常に高まつた。

「子供なんざ、無くてもいいじゃないか。上の坂井さんみたようにたくさん生れて御覧、^{はた}傍から見ても気の毒だよ。まるで幼稚園のようで」

「だって一人もできないときまつちまつたら、あなただつて好かないでしょう」

「まだできないときまりやしないじゃないか。これから生れるかも知れないやね」

御米はなおと泣き出した。宗助も^{とほう}途方に暮れて、発作の治まるのを穏やかに待っていた。そうして、^{ゆっ}緩くり御米の説明を聞

いた。

夫婦は和合同棲どうせいという点において、人並以上に成功したと同時に、子供にかけては、一般の隣人よりも不幸であつた。それも始から宿る種がなかつたのなら、まだしもだが、育つべきものを途中で取り落したのだから、さらに不幸の感が深かつた。

始めて身重みおもになつたのは、一人が京都を去つて、広島に瘠世帯やせじよたいを張つてゐる時であつた。懷妊かいにんと事がきまつたとき、御米はこ

の新らしい経験に対して、恐ろしい未来と、嬉うれしい未来を一度に夢に見るような心持を抱いだいて日を過ごした。宗助はそれを眼

に見えない愛の精に、一種の確証となるべき形を与えた事実と、ひとり解釈して少なからず喜んだ。そうして自分の命を吹き込

んだ肉の塊かたまりが、目の前に踊る時節を指を折つて楽しみに待つた。

ところが胎児は、夫婦の予期に反して、五カ月まで育つて突然下お

りてしまった。その時分の夫婦の活計は苦しい苛い月ばかり続いていった。宗助は流産した御米の蒼い顔を眺めて、これも必竟は世帯の苦勞から起るんだと判じた。そうして愛情の結果が、貧のために打ち崩されて、永く手の裡に捕える事のできなくなつたのを残念がつた。御米はひたすら泣いた。

福岡へ移つてから間もなく、御米はまた酸いものを嗜む人となつた。一度流産すると癖になると聞いたので、御米は万に注意して、つつましやかに振舞つていた。そのせいか経過は至極順当に行つたが、どうした訳か、これという原因もないのに、月足らずで生れてしまった。産婆は首を傾けて、一度医者に見せるように勧めた。医者に診て貰うと、發育が充分でないから、室内の温度を一定の高さにして、昼夜とも変らないくらい、人工的に暖めなければいけないと云つた。宗助の手際では、室内に

煖炉だんろを据えつける設備をするだけでも容易ではなかった。夫婦

はわが時間と算段の許す限りを尽して、専念に赤児の命を護まもつ

た。けれどもすべては徒勞に歸した。一週間の後、二人の血を

分けた情の塊なまけかたまりはついに冷たくなつた。御米は幼児の亡骸なきがらを抱だい

て、

「どうしましょう」と啜すすり泣いた。宗助は再度の打撃を男らし

く受けた。冷たい肉が灰になつて、その灰がまた黒い土に和かす

るまで、一口も愚痴ぐちらしい言葉は出さなかつた。そのうちいつ

となく、二人の間に挟はさまつていた影のようなものが、しだいに

遠退とおのいて、ほどなく消えてしまった。

すると三度目の記憶が來た。宗助が東京に移つて始ての年に、

御米はまた懷妊したのである。出京の当座は、だいぶん身体からだが

衰ろえていたので、御米はもちろん、宗助もひどくそこを氣遣きづかつ

たが、今度こそはという腹は両方にあつたので、張のある月を無事にだんだんと重ねて行つた。ところがちょうど五月目になつて、御米はまた意外の失敗しくじりをやつた。その頃はまだ水道も引いてなかつたから、朝晩下女が井戸端へ出て水を汲んだり、洗濯をしなければならなかつた。御米はある日裏にいる下女に云いつける用ができたので、井戸流いどながしの傍そばに置いた盥たらいの傍まで行つて話をしたついでに、流ながしを向へ渡ろうとして、青い苔こけの生えている濡ぬれた板の上へ尻持しりもちを突いた。御米はまたやり損そくなつたとは思つたが、自分の粗忽そこつを面目ながつて、宗助にはわざと何事も語らずにその場を通した。けれどもこの震動が、いつまで経つても胎児の發育にこれという影響も及ぼさず、したがって自分の身体からだにも少しの異状を引き起さなかつた事がたしかに分つた時、御米はようやく安心して、過去の失しつを改めて宗助の前に告

げた。宗助は固^{もと}より妻を咎^{とが}める意もなかつた。ただ、「よく氣をつけないと危ないよ」と穏やかに注意を加えて過ぎた。

とかくするうちに月が満ちた。いよいよ生れるという間際^{まぎわ}まで日が詰ったとき、宗助は役所へ出ながらも、御米の事がしきりに氣にかかった。帰りにはいつも、今日はことによると留守のうちになどと案じ続けては、自分の家の格子^{こうし}の前に立つた。そうして半ば予期している赤児の泣声が聞えないと、かえつて何かの変でも起つたらしく感じて、急いで宅^{うち}へ飛び込んで、自分と自分の粗忽^{さいわい}を恥ずる事があつた。

幸^{さいわい}に御米の産氣^{さんけ}づいたのは、宗助の外に用のない夜中だったので、傍^{そば}にいて世話のできると云う点から見ればはなはだ都合が好かつた。産婆^{ゆつ}も緩くり間に合うし、脱脂綿その他の準備も

ことごとく不足なく取り揃えてあつた。産も案外軽かつた。けれども肝心かんじんの小児こどもは、ただ子宮を逃のがれて広い所へ出たというままで、浮世の空気を一口も呼吸しなかつた。産婆は細い硝子ガラスの管のようなものを取つて、小さい口の内なかへ強い呼吸いきをしきりに吹き込んだが、効目ききめはまるでなかつた。生れたものは肉だけであつた。夫婦はこの肉に刻みつけられた、眼と鼻と口とを髭髯ほうふつした。しかしその咽喉のどから出る声はついに聞く事ができなかつた。

産婆は出産のあつたついで一週間前に来て、丁寧ていねいに胎児の心臓まで聴診して、至極しごく御健全だと保証して行つたのである。よし産婆の云う事に間違があつて、腹の児この發育が今までのうちにどこかで止つていたにしたところで、それが直取り出すぐされぬ以上、母体は今日こんにちまで平氣に持ち応こたえる訳がなかつた。そこを

だんだん調べて見て、宗助は自分がいまだかつて聞いた事のな
い事実を発見した時に、思わず恐れ驚ろいた。胎児は出る間際
まで健康であつたのである。けれども臍帯纏絡さいたいてんらくと云つて、俗に
云う胞えなを頸くびへ捲まきつけていた。こう云う異常の場合には、固もとよ
り産婆の腕で切り抜けるよりほかにしようのないもので、経験
のある婆さんなら、取り上げる時に、旨うまく頸に掛かつた胞はすを外し
て引き出すはずであつた。宗助の頼んだ産婆もかなり年を取つ
ているだけに、このくらいのことは心得ていた。しかし胎児の
頸からを絡からんでいた臍帯は、時たまあるごとく一重ひとえではなかつた。
二重ふたえに細い咽喉のどを巻まいている胞えなを、あの細い所を通す時に外し
損そくなつたので、小児こどもはぐつと気管を絞しめられて窒息してしまつ
たのである。

罪は産婆にもあつた。けれどもなかば以上は御米の落度おちどに違

なかつた。臍帶纏絡の変状は、御米が井戸端で滑つて痛く尻餅しりもちを搗ついた五カ月前すでに自ら釀みずかしたものと知れた。御米は産後じよくちゆうの蓐中にその始末を聞いて、ただ軽く首肯うなずいたぎり何にも云わなかつた。そうして、疲労に少し落ち込んだ眼を濡うるませて、長い睫毛まつげをしきりに動かした。宗助は慰さめながら、手帛ハンケチで頬に流れる涙を拭ふいてやつた。

これが子供に関する夫婦の過去であつた。この苦にがい経験を嘗なめた彼らは、それ以後幼児について余り多くを語るを好まなかつた。けれども二人の生活の裏側は、この記憶のために淋さむしく染めつけられて、容易に剥はげそうには見えなかつた。時としては、彼我ひがの笑声を通してさえ、御互の胸に、この裏側が薄暗く映る事もあつた。こういう訳だから、過去の歴史を今夫に向つて新たに繰り返そうとは、御米も思い寄らなかつたのである。宗助

も今更妻からそれを聞かせられる必要は少しも認めていなかったのである。

御米の夫に打ち明けると云つたのは、固より二人の共有して
いた事実についてではなかった。彼女は三度目の胎児を失つた
時、夫からその折の模様を聞いて、いかにも自分が残酷な母であ
るかのごとく感じた。自分が手を下した覚くだがないにせよ、考え
ようによつては、自分と生を与えたものの生を奪うために、暗闇くらやみ
と明海あかるみの途中に待ち受けて、これを絞殺こうさつしたと同じ事であつた
からである。こう解釈した時、御米は恐ろしい罪を犯した悪人
とおのれみのれを見倣みなさない訳に行かなかつた。そうして思わざる徳義上
の苛責かしやくを人知れず受けた。しかもその苛責を分つて、共に苦し
んでくれるものは世界中に一人もなかつた。御米は夫にさえこ
の苦しみを語らなかつたのである。

彼女はその時普通の産婦のように、三週間を床の中で暮らした。それは身体からだから云うと極めて安静きわの三週間に違なかつた。同時に心から云うと、恐るべき忍耐の三週間であつた。宗助は亡児のために、小さい柩ひつぎを拵こしらえて、人の眼に立たない葬儀を営んだ。しかる後、また死んだもののために小さな位牌いはいを作つた。位牌には黒い漆うるしで戒名かいみようが書いてあつた。位牌の主ぬしは戒名かいみを持っていた。けれども俗名ぞくみやうは両親ふたおやといえども知らなかつた。宗助は最初それを茶の間の簞笥たんすの上へ載のせて、役所から帰ると絶えず線香を焚たいた。その香においが六畳に寝ている御米の鼻に時々通かよつた。彼女の官能は当時それほどに鋭えいどくなつていたのである。しばらくしてから、宗助は何を考えたか、小さい位牌いはいを簞笥たんすの抽出ひきだしの底へしまつてしまつた。そこには福岡で亡くなつた小供の位牌と、東京で死んだ父の位牌が別々に綿くるで包くるんで丁寧ていねいに入

れてあつた。東京の家を畳むとき宗助は先祖の位牌を一つ残らず携たずさえて、諸所を漂泊ひょうはくするの煩わづらわしさに堪たえなかつたので、新しい父の分だけを鞆かばんの中に収めて、その他はことごとく寺へ預けておいたのである。

御米は宗助のするすべてを寝ながら見たり聞いたりしていた。そうして布団ふとんの上に仰向あおむけになつたまま、この二つの小ちさい位牌を、眼に見えない因果いんがの糸を長く引いて互に結びつけた。それからその糸をなお遠く延ばして、これは位牌にもならず流れてしまった、始めから形のない、ぼんやりした影のような死児の上に投げかけた。御米は広島と福岡と東京に残る一つずつの記憶の底に、動かしがたい運命おのしめの嚴かな支配を認めて、その嚴かな支配もとの下に立つ、幾月日いくつきひの自分を、不思議にも同じ不幸を繰り返すべく作られた母であると観じた時、時ならぬ呪詛のろいの声

を耳の傍はたに聞いた。彼女が三週間の安静を、蒲団ふとんの上に貪むさばらなければならぬように、生理的に強しいられている間、彼女の鼓膜はこの呪詛の声でほとんど絶えず鳴っていた。三週間の安臥は、御米に取つて実に比類のない忍耐の三週間であつた。

御米はこの苦しい半月余りを、枕の上でじつと見つめながら過あごした。しまいには我慢して横になつてゐるのが、いかにも苛つらかつたので、看護婦の帰つた明ある日に、こつそり起きてぶらぶらして見たが、それでも心に逼せまる不安は、容易に紛まぎらせなかつた。退儀たいぎな身体からだを無理に動かす割に、頭の中は少しも動いてくれないので、また落胆がつかりして、ついには取り放しの夜具の下へ潜もぐり込んで、人の世を遠ざけるように、眼を堅く閉つぶつてしまふ事もあつた。

そのうち定期の三週間も過ぎて、御米の身体は自おのずからすすき

りなつた。御米は奇麗きれいに床を払つて、新らしい氣のする眉まゆを再び鏡に照らした。それは更衣ころもがえの時節であつた。御米も久しぶりに綿いの入つた重いものを脱ぎ棄すてて、肌あかに垢の触れない軽い氣持さわを爽やかに感じた。春と夏の境をぱつと飾る陽氣な日本の風物は、淋さむしい御米の頭にも幾分かの反響を与えた。けれども、それはただ沈んだものを搔かき立てて、賑にぎやかな光りのうちに浮かしたまでであつた。御米の暗い過去の中にその時一種の好奇心きざが萌きざしたのである。

天氣すぐの勝れて美くしいある日の午前、御米はいつもの通り宗助を送り出してから直じきに、表へ出た。もう女は日傘ひがさを差して外を行くべき時節であつた。急いで日向ひなたを歩くと額の辺あたりが少し汗ばんだ。御米は歩き歩き、着物を着換える時、箆へら筒を開けたら、思わず一番目の抽出の底にしまつてあつた、新らしい位牌に手

が触れた事を思いつづけて、とうとうある易者の門を潜つた。えきしや

彼女は多数の文明人に共通な迷信を子供の時から持つていた。

けれども平生はその迷信がまた多数の文明人と同じように、遊戯的に外に現われるだけで済んでいた。それが実生活の嚴かな部分を冒すようになったのは、全く珍らしいと云わなければならなかつた。御米はその時真面目な態度と真面目な心を有つて、易者の前に坐つて、自分が将来子を生むべき、また子を育てるべき運命を天から与えられるだろうかを確めた。易者は大道に店を出して、往来の人の身の上を一二銭で占なう人と、少しも違つた様子もなく、算木をいろいろに並べて見たり、筮竹を揉んだり数えたりした後で、仔細らしく腮の下あごの髻ひげを握つて何か考えたが、終りに御米の顔をつくづく眺めた末、

「あなたには子供はできません」と落ちつき払つて宣告した。

御米は無言のまま、しばらく易者の言葉を頭の中で囁^かんだり砕^{くだ}いたりした。それから顔を上げて、

「なぜでしょう」と聞き返した。その時御米は易者が返事をする前に、また考えるだろうと思つた。ところが彼はまともに御米の眼の間を見詰めたまま、すぐ

「あなたは人に対してすまない事をした覚^{おぼえ}がある。その罪が祟^{たた}つているから、子供はけつして育たない」と云い切つた。御米はこの一言^{いちげん}に心臓を射抜かれる思があつた。くしやりと首を折つたなり家^{うち}へ帰つて、その夜は夫の顔さえろくろく見上げなかつた。

御米の宗助に打ち明けないで、今まで過したというのは、この易者の判断であつた。宗助は床の間に乗せた細い洋灯^{ランプ}の灯^ひが、夜の中に沈んで行きそうな静かな晩に、始めて御米の口からそ

の話聞いたとき、さすがに好い気味はしなかった。

「神経の起つた時、わざわざそんな馬鹿な所へ出かけるからさ。錢ぜにを出して下らない事を云われてつまらないじゃないか。その後もその占うらないの宅うちへ行くのかい」

「恐ろしいから、もうけつして行かないわ」

「行かないがいい。馬鹿氣ている」

宗助はわざと鷹揚おうような答をしてまた寝てしまった。

十四

宗助そうすけと御米およねとは仲の好い夫婦に違なかつた。いつしよになつてから今日こんにちまで六年ほどの長い月日を、まだ半日も氣不味きまずく暮した事はなかつた。言逆いさかいに顔を赤らめ合つた試ためしはなおなかつた。

二人は呉服屋の反物を買つて着た。米屋から米を取つて食つた。けれどもその他には一般の社会に待つところのきわめて少ない人間であつた。彼らは、日常の必需品を供給する以上の意味において、社会の存在をほとんど認めていなかった。彼らに取つて絶対に必要なものは御互だけで、その御互だけが、彼らにはまた充分であつた。彼らは山の中にいる心を抱いて、都会に住んでいた。

自然の勢として、^{いきおい}彼らの生活は単調に流れない訳に行かなかつた。彼らは複雑な社会の煩を避け得たと共に、その社会の活動から出るさまざまな経験に直接触れる機会を、自分と塞いでしまつて、都会に住みながら、都会に住む文明人の特権を棄てたような結果に到着した。彼らも自分達の日常に変化のない事は折々自覚した。御互が御互に飽きるの、物足りなくなるのとい

う心は微塵^{みじん}も起らなかつたけれども、御互の頭に受け入れる生活の内容には、刺戟^{しげき}に乏しい或物が潜んでいるような鈍^{にぶ}い訴^{うたえ}があつた。それにもかかわらず、彼らが毎日同じ判を同じ胸に押して、長の月日を倦^うまず渡つて来たのは、彼らが始から一般の社会に興味を失つていたためではなかつた。社会の方で彼らを二人ぎり^{そびら}に切りつめて、その二人に冷かな背^{そびら}を向けた結果にほかならなかつた。外に向つて生長する余地を見出し得なかつた二人は、内に向つて深く延び始めたのである。彼らの生活は広さを失なうと同時に、深さを増して来た。彼らは六年の間世間に散漫な交渉を求めなかつた代りに、同じ六年の歲月^{さいげつ}を挙^あげて、互の胸を掘り出した。彼らの命は、いつの間にか互の底にまで喰い入った。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云えば、道義上切り離す事のできない一つの有

機体になつた。二人の精神を組み立てる神経系は、最後の纖維に至るまで、互に抱き合つてでき上つていた。彼らは大きな水盤の表に滴したたつた二点の油のようなものであつた。水を弾はじいて二つがいっしょに集まつたと云うよりも、水に弾かれた勢で、丸く寄り添つた結果、離れる事ができなくなつたと評する方が適當であつた。

彼らはこの抱合ほうごうの中に、尋常の夫婦に見出しがたい親和こうわと飽満ほうまんと、それに伴なう倦怠けんたいとを兼ね具えていた。そうしてその倦怠けんたいの慵ものうい気分きぶんに支配しはいされながら、自己を幸福と評価する事だけは忘れなかつた。倦怠は彼らの意識に眠のような幕を掛けて、二人の愛をうつとり霞かすます事はあつた。けれども觔しんで神経しんけいを洗うわれる不安はけつして起し得なかつた。要するに彼らは世間に疎うといだけそれだけ仲の好い夫婦であつたのである。

彼らは人並以上に睦ましい月日を渝らずに今日から明日へと繋いで行きながら、常はそこに気がつかずに顔を見合わせているようなものの、時々自分達の睦まじがる心を、自分で確と認める事があつた。その場合には必ず今まで睦まじく過ごした長の歳月を溯のぼつて、自分達がいかな犠牲を払つて、結婚をあえてしたかと云う当時を憶い出さない訳には行かなかつた。彼らは自然が彼らの前にもたらした恐るべき復讐の下に戦きながら跪ひざまずいた。同時にこの復讐を受けるために得た互の幸福に対して、愛の神に一弁の香を焚く事を忘れなかつた。彼らは鞭たれつつ死に赴くものであつた。ただその鞭の先に、すべてを癒やす甘い蜜の着いている事を覺つたのである。

宗助は相当に資産のある東京ものの子弟として、彼らに共通な派出な嗜好を、学生時代には遠慮なく充たした男である。彼

はその時服装なりにも、動作にも、思想にも、ことごとく当世らしい才人の面影おもかげを漲みなぎらして、昂たかい首を世間に擡もたげつつ、行こうと思あたう辺りを濶歩かつぽした。彼の襟えりの白かつたごとく、彼の洋袴ズボンの裾すそが奇麗きれいに折り返されていたごとく、その下から見える彼の靴足袋くつたびが模様入のカシミヤであつたごとく、彼の頭は華奢きゃしゃな世間向きであつた。

彼は生れつき理解の好い男であつた。したがつて大した勉強をする気にはなれなかつた。学問は社会へ出るための方便と心得ていたから、社会を一步退しりぞかなくつては達する事のできない、学者という地位には、余り多くの興味を有もつていなかった。彼はただ教場へ出て、普通の学生のする通り、多くのノートブックを黒くした。けれども宅うちへ帰つて来て、それを読み直したり、手を入れたりした事は滅多めったになかつた。休んで抜けた所さえ大

抵はそのままにして放つて置いた。彼は下宿の机の上に、このノートブックを奇麗に積み上げて、いつ見ても整然と秩序のついた書齋を空からにしては、外を出歩るいた。友達も多く彼の寛濶かんかつを羨うらやんだ。宗助も得意であつた。彼の未来は虹にじのように美しく彼の眸ひとみを照らした。

その頃の宗助は今と違つて多くの友達を持っていた。実を云うと、軽快な彼の眼に映ずるすべての人は、ほとんど誰彼の区別なく友達であつた。彼は敵という言葉の意味を正當に解し得ない楽天家として、若い世をのびのびと渡つた。

「なに不景氣な顔さえしなければ、どこへ行つたつて驩迎かんげいされるもんだよ」と学友の安井によく話した事があつた。實際彼の顔は、他ひとを不愉快にするほど深刻な表情を示し得た試ためしがなかつた。

「君は身体が丈夫だから結構だ」とよくどこかに故障の起る安井が羨ましがった。うらやこの安井というのは国は越前だが、長く横浜にいたので、言葉や様子は毫も東京ものと異なる点がなかった。着物道楽で、髪の毛を長くして真中から分ける癖があつた。高等学校は違つていたけれども、講義のときよく隣合せに並んで、時々聞き損なつた所などを後から質問するので、口を利き出したのが元になつて、つい懇意になつた。それが学年の始りはじまだったので、京都へ来て日のまだ浅い宗助にはだいぶんの便宜べんぎであつた。彼は安井の案内で新らしい土地の印象を酒のごとく吸い込んだ。二人は毎晩のように三条とか四条とかいう賑やかにぎな町を歩いた。時によると京極も通り抜けた。橋の真中に立つて鴨川かもがわの水を眺めた。ひがしやま東山の上に出る静かな月を見た。そうして京都の月は東京の月よりも丸くて大きいように感じた。町や

人に厭あきたときは、土曜と日曜を利用して遠い郊外に出た。宗助は至る所の大竹おおたけやぶ藪に緑の籠こもる深い姿を喜んだ。松の幹の染めたように赤いのが、日を照り返して幾本となく並ぶ風情ふぜいを楽しんだ。ある時は大悲閣だいいかくへ登つて、即非そくひの額の下に仰向きながら、谷底の流を下る櫓ろの音を聞いた。その音が雁かりの鳴声によく似ているのを二人とも面白がつた。ある時は、平八茶屋へいはちややまで出掛け行つて、そこに一日寝ていた。そうして不味まずい河魚くしの串に刺したのを、かみさんに焼かして酒を呑のんだ。そのかみさんは、手拭てぬぐいを被かぶつて、紺こんの立付たつつけみたようなものを穿はいていた。

宗助はこんな新らしい刺戟しげきの下に、しばらくは慾求の満足を得た。けれどもひととおり古い都の臭においを嗅かいで歩くうちに、すべてがやがて、平板に見えだして来た。その時彼は美くしい山の色と清い水の色が、最初ほど鮮明な影を自分の頭に宿さない

のを物足らず思い始めた。彼は暖かな若い血を抱いて、その熱^{ほて}りを冷^さす深い緑に逢^あえなくなつた。そうかといつて、この情熱^{さま}を焚^やき尽すほどの烈^{はげ}しい活動には無論出会わなかつた。彼の血は高い脈を打つて、いたずらにむず痒^{がゆ}く彼の身体の中を流れた。彼は腕組をして、坐^いながら四方の山を眺めた。そうして、

「もうこんな古臭い所には厭きた」と云つた。

安井は笑いながら、比較のため、自分の知つてゐる或友達の故郷の物語をして宗助に聞かした。それは浄瑠璃^{じようるり}の間の土山雨^{あい}が降るとある有名な宿^{しゆく}の事であつた。朝起きてから夜寝るまで、眼に入るものは山よりほかにない所で、まるで播鉢^{すりばち}の底に住んでゐると同じ有様だと告げた上、安井はその友達の小さい時分の経験として、五月雨^{さみだれ}の降りつづく折などは、小供心に、今にも自分の住んでゐる宿^{しゆく}が、四方の山から流れて来る雨の中に浸^つ

かつてしまいそうで、心配でならなかったと云う話をした。宗助はそんな播鉢の底で一生を過す人の運命ほど情ないものはあるまいと考えた。

「そう云う所に、人間がよく生きていられるな」と不思議そうな顔をして安井に云った。安井も笑っていた。そうして土山つちやまから出た人物の中うちでは、千両函せんりょうぼこを摩すり替かえて礫はりつけになったのが一番大きいのだと云う一口話をやはり友達から聞いた通り繰り返した。狭い京都に飽きた宗助は、単調な生活を破る色彩として、そう云う出来事も百年に一度ぐらいは必要だろうとまで思った。

その時分の宗助の眼は、常に新らしい世界にばかり注そそがれていた。だから自然がひととおり四季の色を見せてしまったあとでは、再び去年の記憶を呼び戻すために、花や紅葉もみじを迎える必要がなくなった。強く烈はげしい命に生きたと云う証券を飽あくまで

握りたかつた彼には、活いきた現在と、これから生れようとする未来が、当面の問題であつたけれども、消えかかる過去は、夢同様に餽あたひの乏しい幻影に過ぎなかつた。彼は多くの剥はげかかつた社やしろと、寂果さびはてた寺を見尽して、色の褪さめた歴史の上に、黒い頭を振り向ける勇氣を失いかけた。寝ね巻まきけた昔に低徊ていかいするほど、彼の気分は枯れていなかつたのである。

学年の終りに宗助と安井とは再会を約して手を分つた。安井はひとまず郷里の福井へ歸つて、それから横浜へ行くつもりだから、もしその時には手紙を出して通知をしよう、そうしてなるべくならいっしょの汽車で京都へ下くだろう、もし時間が許すなら、興津おきつあたりで泊とつて、清見寺せいけんじや三保みほの松原や、久能山くのうざんでも見ながら緩ゆるくり遊んで行こうと云つた。宗助は大いによからうと答えて、腹のなかではすでに安井の端書はがきを手にする時の心持

さえ予想した。

宗助が東京へ帰ったときは、父は固^{もと}よりまだ丈夫であつた。小六^{ころく}は子供であつた。彼は一年ぶりに殷^{さか}んな都の炎熱と煤煙^{ばいえん}を呼吸するのをかえつて嬉^{うれ}しく感じた。燬^やくような日の下に、渦^{うず}を捲^まいて狂い出しそうな瓦^{かわら}の色が、幾里となく続く景色^{けしき}を、高い所から眺めて、これでこそ東京だと思ふ事さえあつた。今の宗助なら目を眩^{まわ}しかねない事々物々が、ことごとく壮快の二字を彼の額に焼き付けべく、その時は反射して来たのである。

彼の未来は封じられた蓄^{つばみ}のように、開かない先は他^{ひと}に知れないばかりでなく、自分にも確^{しか}とは分らなかつた。宗助はただ洋々の二字が彼の前途に棚引^{たなび}いている気がしただけであつた。彼はこの暑い休暇中にも卒業後の自分に対する謀^{はかりごと}を忽^{ゆる}がせにはしなかつた。彼は大学を出てから、官途につこうか、または実業に

従おうか、それすら、まだ判然と心にきめていなかったにかかわらず、どちらの方面でも構わず、今のうちから、進めるだけ進んでおく方が利益だと心づいた。彼は直接父の紹介を得た。父を通して間接にその知人の紹介を得た。そうして自分の将来に影響し得るような人を物色して、二三の訪問を試みた。彼らのあるものは、避暑という名義の下に、すでに東京を離れていた。あるものは不在であった。またあるものは多忙のため時を期して、勤務先で会おうと云った。宗助は日のまだ高くならない七時頃に、昇降器エレヴェーターで煉瓦造れんがづくりの三階へ案内されて、その応接間に、もう七八人も自分と同じように、同じ人を待っている光景を見て驚ろいた事もあった。彼はこうして新らしい所へ行つて、新らしい物に接するのが、用向の成否に関わらず、今まで眼に付かずに過ぎた活いきた世界の断片を頭へ詰め込むような気

がして何となく愉快であつた。

父の云いつけで、毎年の通り虫干の手伝をさせられるのも、こんな時には、かえつて興味の多い仕事の一部分に数えられた。彼は冷たい風の吹き通す土蔵の戸前とまえの湿しめつぽい石の上に腰を掛けて、古くから家にあつた江戸名所図会えどめいしよずえと、江戸砂子えどすなごという本を物珍しそうに眺めた。畳まで熱くなつた座敷の真中へ胡坐あぐらを掻かいて、下女の買つて来た樟脳しょうのうを、小さな紙片かみぎれに取り分けては、医者でくれる散薬のような形に畳んだ。宗助は小供の時から、この樟脳かおりの高い香と、汗の出る土用と、炮烙灸ほうろくぎゆうと、蒼空あおぞらを緩ゆるく舞とびう鳶とびとを連想していた。

とかくするうちに節せつは立秋に入つた。二百十日の前には、風が吹いて、雨が降つた。空には薄墨うすずみの煮染にじんだような雲がしきりに動いた。寒暖計が二三日下がり切りに下がつた。宗助はま

た行李こうりを麻縄で絡からげて、京都へ向う支度をしなければならなくなつた。

彼はこの間にも安井と約束のある事は忘れなかつた。家うちへ歸つた当座は、まだ二カ月も先の事だからと緩くり構えていたが、だんだん時日が逼せまるに従つて、安井の消息が氣になつてきた。安井はその後一枚の端書はがきさえ寄こさなかつたのである。宗助は安井の郷里の福井へ向けて手紙を出して見た。けれども返事はついに来なかつた。宗助は横浜の方へ問い合わせて見ようと思つたが、つい番地も町名も聞いて置かなかつたので、どうする事もできなかつた。

立つ前の晩に、父は宗助を呼んで、宗助の請求通り、普通の旅費以外に、途中で二三日滞在した上、京都へ着いてからの当分の小遣こづかいを渡して、

「なるたけ節儉せつけんしなくちやいけない」と諭さとした。

宗助はそれを、普通の子が普通の親の訓戒を聞く時のごとくに聞いた。父はまた、

「来年また帰つて来るまでは会わないから、随分気をつけて」と云った。その帰つて来る時節には、宗助はもう帰れなくなつていたのである。そうして帰つて来た時は、父の亡骸なきがらがもう冷たくなつていたのである。宗助は今に至るまでその時の父の面影おもかげを思い浮べてはすまないような気がした。

いよいよ立つと云う間際まぎわに、宗助は安井から一通の封書を受

取った。開いて見ると、約束通りいつしよに帰るつもりでいたが、少し事情があつて先へ立たなければならぬ事になったからと云う断ことわりを述べた末に、いづれ京都で緩ゆるくり会おうと書いてあつた。宗助はそれを洋服の内懐うちふところに押し込んで汽車に乗った。

約束の興津おきつへ来たとき彼は一人でプラットフォームへ降りて、細長い一筋町を清見寺せいけんじの方へ歩いた。夏もすでに過ぎた九月の初なので、おおかたの避暑客は早く引き上げた後だから、宿屋は比較的閑静であつた。宗助は海の見える一室の中に腹這はらばいになつて、安井へ送る絵端書えはがきへ二三行の文句を書いた。そのなかに、君が来ないから僕一人でここへ来たという言葉を入れた。

翌日も約束通り一人で三保みほと竜華寺りゅうげじを見物して、京都へ行つてから安井に話す材料をできるだけ拵こしらえた。しかし天氣のせいにか、当あてにした連つれのないためか、海を見ても、山へ登つても、それほど面白くなかつた。宿にじつとしているのは、なお退屈であつた。宗助は匆々そうそうにまた宿の浴衣ゆかたを脱ぎ棄すてて、絞しぼりの三尺と共に欄干らんかんに掛けて、興津を去つた。

京都へ着いた一日目は、夜汽車の疲れやら、荷物の整理やらで、

往來の日影を知らずに暮らした。二日目になつてようやく学校へ出て見ると、教師はまだ出揃でそろつていなかった。学生も平日いつもよりは数が不足であつた。不審な事には、自分より三四さんよつ日前かに歸つていゝべきはずの安井の顔さえどこにも見えなかつた。宗助はそれが氣にかかるので、歸りにわざわざ安井の下宿へ回つて見た。安井のいる所は樹と水の多い加茂かもの社やしろの傍であつた。彼は夏休み前から、少し閑静な町外れへ移つて勉強するつもりだとか云つて、わざわざこの不便な村同様な田舎いなかへ引込んだのである。彼の見つけ出した家から寂さびた土塀どべいを二方に回めぐらして、すでに古風に片づいていた。宗助は安井から、その主人はもと加茂神社の神官の一人であつたと云う話を聞いた。非常に能弁な京都言葉を操あやつる四十ばかりの細君がいて、安井の世話をしていた。

「世話つて、ただ不味い菜を拵らえて、三度ずつ室へ運んでくれるだけだよ」と安井は移り立てからこの細君の悪口を利いていた。宗助は安井をここに二三度訪ねた縁故で、彼のいわゆる不味い菜を拵らえる主を知っていた。細君の方でも宗助の顔を覚えていた。細君は宗助を見るや否や、例の柔かい舌で慇懃な挨拶を述べた後、こつちから聞こうと思つて来た安井の消息を、かえつて向うから尋ねた。細君の云うところによると、彼は郷里へ歸つてから当日に至るまで、一片の音信さえ下宿へは出さなかつたのである。宗助は案外な思で自分の下宿へ歸つて来た。それから一週間ほどは、学校へ出るたんびに、今日は安井の顔が見えるか、明日は安井の声がするかと、毎日漠然とした予期を抱いては教室の戸を開けた。そうして毎日また漠然とした不足を感じては歸つて来た。もつとも最後の三四日における宗

助は早く安井に会いたいと思うよりも、少し事情があるから、失敬して先へ立つとわざわざ通知しながら、いつまで待っても影も見せない彼の安否を、関係者としてむしろ気にかけていたのである。彼は学友の誰彼に万遍まんべんなく安井の動静を聞いて見た。しかし誰も知るものはなかった。ただ一人が、昨夕ゆうべ四条の人込の中で、安井によく似た浴衣ゆかたがけの男を見たと答えた事があつた。しかし宗助にはそれが安井だろうとは信じられなかった。ところがその話を聞いた翌日、すなわち宗助が京都へ着いてから約一週間の後、話の通りの服装なりをした安井が、突然宗助の所へ尋ねて来た。

宗助は着流しのまま麦藁帽むぎわらぼうしを手に持った友達の姿を久し振に眺めた時、夏休み前の彼の顔の上に、新らしい何物かがさらに付け加えられたような気がした。安井は黒い髪に油を塗って、

目立つほど奇麗きれいに頭を分けていた。そうして今床屋へ行つて来たところだと言訳らしい事を云つた。

その晩彼は宗助と一時間余りも雑談に耽ふけつた。彼の重々しい口の利き方、自分を憚はばかつて、思い切れないような話の調子、「しかるに」と云う口癖、すべて平生の彼と異なる点はなかった。ただ彼はなぜ宗助より先へ横浜を立つたかを語らなかつた。また途中どこで暇取ひまどつたため、宗助より後おくれて京都へ着いたかを判然はつきり告げなかつた。しかし彼は三四日前ようやく京都へ着いた事だけを明かにした。そうして、夏休み前にいた下宿へはまだ歸らずにいると云つた。

「それでどこに」と宗助が聞いたとき、彼は自分の今泊つてゐる宿屋の名前を、宗助に教えた。それは三条辺へんの三流位いえの家であつた。宗助はその名前を知つていた。

「どうして、そんな所へ這入^{はい}つたのだ。当分そこにいるつもりなのかい」と宗助は重ねて聞いた。安井はただ少し都合があつてとばかり答えたが、

「下宿生活はもうやめて、小さい家^{うち}でも借りようかと思つていゝる」と思いがけない計画を打ち明けて、宗助を驚ろかした。

それから一週間ばかりの中に、安井はとうとう宗助に話した通り、学校近くの閑静な所に一戸を構えた。それは京都に共通な暗い陰気な作りの上に、柱や格子^{こうし}を黒赤く塗つて、わざと古臭^{ふるくさ}く見せた狭い貸家であつた。門口^{かどぐち}に誰の所有ともつかない柳が一本あつて、長い枝がほとんど軒^{さわ}に触りそうに風に吹かれる様を宗助は見た。庭も東京と違つて、少しは整つていた。石の自由になる所だけに、比較的大きなのが座敷の真正面に据^すえてあつた。その下には涼しそうな苔^{こけ}がいくらでも生えた。裏には敷居

の腐つた物置が空のままがらんと立っている後に、隣の竹藪が便所の出入りに望まれた。

宗助のここを訪問したのは、十月に少し間のある学期の始めであつた。残暑がまだ強いので宗助は学校の往復に、蝙蝠傘を用いていた事を今に記憶していた。彼は格子の前で傘を畳んで、内を覗き込んだ時、粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認めた。格子の内は三和土で、それが真直に裏まで突き抜けているのだから、這入つてすぐ右手の玄関めいた上り口を上らない以上は、暗いながら一筋に奥の方まで見える訳であつた。宗助は浴衣の後影が、裏口へ出る所で消えてなくなるまでそこに立っていた。それから格子を開けた。玄関へは安井自身が現れた。座敷へ通つてしばらく話していたが、さっきの女は全く顔を出さなかつた。声も立てず、音もさせなかつた。広い家でない

から、つい隣の部屋ぐらいいいたのだろうけれども、いないのとまるで違わなかった。この影のように静かな女が御米であつた。

安井は郷里の事、東京の事、学校の講義の事、何くれとなく話した。けれども、御米の事については一言も口にしなかつた。宗助も聞く勇氣に乏しかつた。その日はそれなり別れた。

次の日二人が顔を合したとき、宗助はやはり女の事を胸の中に記憶していたが、口へ出しては一言も語らなかつた。安井も何気ない風をしていた。懇意な若い青年が心易立こころやすだてに話し合う遠慮のない題目は、これまで二人の間に何度となく交換されたにもかかわらず、安井はここへ来て、息詰つたごとくに見えた。宗助もそこを無理にこじ開けるほどの強い好奇心は有もたなかつた。したがつて女は二人の意識の間に挟はさまりながら、つい話頭

に上らないで、また一週間ばかり過ぎた。

その日曜に彼はまた安井を訪うた。それは二人の關係してゐる或会について用事が起つたためで、女とは全く縁故のない動機から出た淡泊な訪問であつた。けれども座敷へ上がつて、同じ所へ坐らせられて、垣根に沿うた小さな梅の木を見ると、この前来た時の事が明らかに思い出された。その日も座敷の外は、しんとして静であつた。宗助はその静かなうちに忍んでゐる若い女の影を想像しない訳に行かなかつた。同時にその若い女はこの前と同じように、けつして自分の前に出て来る氣遣はあるまいと信じていた。

この予期の下に、宗助は突然御米に紹介されたのである。その時御米はこの間のように粗い浴衣を着てはいなかつた。これからよそへ行くか、または今外から歸つて来たと云う風な粧を

して、次の間から出て来た。宗助にはそれが意外であつた。しかし大した綺羅きらを着飾つた訳でもないので、衣服の色も、帯の光も、それほど彼を驚かすまでには至らなかつた。その上御米は若い女にありがちの嬌羞きようしゆうというものを、初対面の宗助に向つて、あまり多く表わさなかつた。ただ普通の人間を静にして言葉寡すくな切りに切つめただけに見えた。人の前へ出ても、隣の室へやに忍んでいる時と、あまり区別のないほど落ちついた女だという事を見出した宗助は、それから推して、御米のひっそりしていたのは、穴勝恥あながちかしがつて、人の前へ出るのを避けるためばかりでもなかつたんだと思つた。

安井は御米を紹介する時、

「これは僕の妹いもだ」という言葉を用いた。宗助は四五分対坐して、少し談話を取り換わしているうちに、御米の口調くちようのどこに

も、くになまり国訛らしい音の交まじつていない事に気がついた。

「今まで御国の方に」と聞いたら、御米が返事をする前に安井が、

「いや横浜に長く」と答えた。

その日は二人して町へ買物に出ようと云うので、御米は不ふ断だん着ぎを脱ぎ更えて、暑いところをわざわざ新らしい白足袋しろたびまで穿はいたものと知れた。宗助はせっかくの出がけを喰い留めて、邪魔でもしたように気の毒な思をした。

「なに宅うちを持ち立てだものだから、毎日毎日要いるものを新らしく発見するんで、一週に一二返は是非都まで買い出しに行かなければならない」と云いながら安井は笑った。

「途みちまでいっしょに出掛けよう」と宗助はすぐ立ち上がった。ついでに家うちの様子を見てくれと安井の云うに任せた。宗助は次

の間にある亜鉛トタンの落しのついた四角な火鉢ひばちや、黄な安っぽい色をした真鍮しんちゆうの葉罐やかんや、古びた流しの傍そばに置かれた新らし過ぎるておけ手桶を眺めて、門かどへ出た。安井は門口かどぐちへ錠じようをおろして、鍵かぎを裏の家うちへ預けるとか云つて、走かけて行つた。宗助と御米は待つてゐる間、二言、三言、尋常な口を利きいた。

宗助はこの三四分間に取り換わした互の言葉を、いまだに覚えていた。それはただの男がただの女に対して人間したしたる親みを表わすために、やりとりする簡略な言葉に過ぎなかつた。形容すれば水のように浅く淡いものであつた。彼は今日こんにちまで路傍道上において、何かの折に触れて、知らない人を相手に、これほどの挨拶あいさつをどのくらい繰り返して来たか分らなかつた。

宗助は極めて短かいその時の談話を、一々思い浮べるたびに、その一々が、ほとんど無着色と云つていいほどに、平淡であつ

た事を認めた。そうして、かく透明な声が、二人の未来を、どうしてああ真赤に、塗りつけたかを不思議に思つた。今では赤い色が日を経て昔の鮮かさを失つていた。互を焚き焦がした燄は、自然と変色して黒くなつていた。二人の生活はかようにして暗い中に沈んでいた。宗助は過去を振り向いて、事の成行を逆に眺め返しては、この淡泊な挨拶が、いかに自分らの歴史を濃く彩つたかを、胸の中であくまで味わいつつ、平凡な出来事を重大に変化させる運命の力を恐ろしがつた。

宗助は二人で門の前に佇んでいる時、彼らの影が折れ曲つて、半分ばかり土塀に映つたのを記憶していた。御米の影が蝙蝠傘で遮ぎられて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶していた。少し傾むきかけた初秋の日が、じりじり二人を照り付けたのを記憶していた。御米は傘を差したまま、それほど

涼しくもない柳の下に寄った。宗助は白い筋を縁ふちに取った紫の傘の色と、まだ褪さめ切らない柳の葉の色を、一步遠退とおのいて眺め合あわした事を記憶していた。

今考えるとすべてが明らかであつた。したがつて何らの奇もなかつた。二人は土塀の影から再び現われた安井を待ち合あわして、町の方へ歩いた。歩く時、男同志は肩を並べた。御米は草履ぞうりを引いて後あとに落ちた。話も多くは男だけで受持うつた。それも長くはなかつた。途中まで来て宗助は一人分れて、自分の家へ歸うちつたからである。

けれども彼の頭にはその日の印象が長く残つていた。家へ歸つて、湯に入つて、灯火ともしびの前に坐つた後のちにも、折々色の着いた平たい画えとして、安井と御米の姿が眼先にちらついた。それのみか床とこに入いつてからは、妹いもだと云つて紹介された御米が、果して本

当の妹であろうかと考え始めた。安井に問いつめない限り、この疑^{うたがい}の解決は容易でなかったけれども、臆断^{おくだん}はすぐついた。宗助はこの臆断を許すべき余地が、安井と御米の間に充分存在し得るだろうぐらいに考えて、寝ながらおかしく思った。しかもその臆断に、腹の中で徘徊^{ていかい}する事の馬鹿馬鹿しいのに気がついて、消し忘れた洋灯^{ランプ}をようやくふつと吹き消した。

こう云う記憶の、しだいに沈んで痕迹^{あと}もなくなくなるまで、御互の顔を見ずに過すほど、宗助と安井とは疎遠ではなかった。二人は毎日学校で出合うばかりでなく、依然として夏休み前の通り往来を続けていた。けれども宗助が行くたびに、御米は必ず挨拶^{あいさつ}に出るとは限らなかった。三返に一返ぐらい、顔を見せないで、始ての時のように、ひっそり隣りの室^{へや}に忍んでいる事もあった。宗助は別にそれを氣にも留めなかった。それにもかか

わらず、二人はようやく接近した。幾何ならずして冗談を云うほどの親みができた。

そのうちまた秋が来た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰り返す興味に乏しかった宗助は、安井と御米に誘われて茸狩に行つた時、朗らかな空氣のうちにまた新らしい香を見出した。紅葉も三人で観た。嵯峨から山を抜けて高雄へ歩く途中で、御米は着物の裾を捲くつて、長襦袢だけを足袋の上まで牽いて、細い傘を杖にした。山の上から一町も下に見える流れに日が射して、水の底が明らかに遠くから透かされた時、御米は

「京都は好い所ね」と云つて二人を顧みた。それをいつしよに眺めた宗助にも、京都は全く好い所のように思われた。

こう揃つて外へ出た事も珍らしくはなかった。家の中で顔を合わせる事はなおしばしばあった。或時宗助が例のごとく安井

を尋ねたら、安井は留守で、御米ばかり淋しい秋の中に取り残されたように一人坐^{すわ}つていた。宗助は淋^{さむ}しいでしようと云つて、つい座敷に上り込んで、一つ火鉢^{ひばち}の両側に手を翳^{かざ}しながら、思つたより長話をして歸つた。或時宗助がぽかんとして、下宿の机に倚^よりかかったまま、珍らしく時間の使い方に困っていると、ふと御米がやつて來た。そこまで買物に出たから、ついでに寄つたんだとか云つて、宗助の薦^{すす}める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩^{ゆつ}くり寛^{くろ}ろいだ話をして歸つた。

こんな事が重なつて行くうちに、木の葉^はがいつの間^まにか落ちてしまつた。そうして高い山の頂^{いただき}が、ある朝真白に見えた。吹き曝^{さら}しの河原^{かわら}が白くなつて、橋を渡る人の影が細く動いた。その年の京都の冬は、音を立てずに肌^とを透^{とお}す陰^{いん}忍^{にん}な質^{たち}のものであつた。安井はこの悪性^{かんき}の寒氣^{かんき}にあてられて、苛^{ひど}いインフルエンザ

に罹^{かか}つた。熱が普通の風邪^{かぜ}よりもよほど高かつたので、始は御米も驚ろいたが、それは一時^{いちじ}の事で、すぐ退^ひいたには退いたから、これでもう全快と思うと、いつまで立っても判然^{はつきり}しなかつた。安井は藹^{もち}のような熱に絡^{から}みつかれて、毎日その差し引きに苦しんだ。

医者は少し呼吸器を冒^{おか}されているようだからと云つて、切に転地を勧めた。安井は心ならず押入の中の柳行李^{やなぎこくり}に麻繩^{あさなわ}を掛けた。御米は手提鞆^{てさげかばん}に錠^{じょう}をおろした。宗助は二人を七条まで見送つて、汽車が出るまで室^{へや}の中へ這^{はい}入つて、わざと陽気な話をした。プラットホームへ下りた時、窓の内から、

「遊びに来たまえ」と安井が云つた。

「どうぞ是非」と御米が言つた。

汽車は血色の好い宗助の前をそろそろ過ぎて、たちまち神戸

の方に向つて煙を吐いた。

病人は転地先で年を越した。絵端書は着いた日から毎日のように寄こした。それにいつでも遊びに來いと繰り返して書いてない事はなかつた。御米の文字も一二行ずつは必ず交つていた。宗助は安井と御米から届いた絵端書を別にして机の上に重ねて置いた。外から帰るとそれが直眼に着いた。時々はそれを一枚ずつ順に読み直したり、見直したりした。しまいにもうすっかり癒つたから帰る。しかしせつかくここまで來ながら、ここで君の顔を見ないのは遺憾だから、この手紙が着きしだい、ちよつとでいいから來いという端書が來た。無事と退屈を忌む宗助を動かすには、この十数言で充分であつた。宗助は汽車を利用してその夜のうちに安井の宿に着いた。

明るい灯火の下に三人が待設けた顔を合わせた時、宗助は何

よりもまず病人の色沢いろつやの回復して来た事に気がついた。立つ前よりもかえつて好いくらいに見えた。安井自身もそんな心持がすると云つて、わざわざ襯衣シヤツの袖そでを捲まり上げて、青筋の入った腕ひじりを独なで撫なでていた。御米も嬉うれしそうに眼を輝かした。宗助にはその活潑かつぱつな目遣めづかいがことに珍めづらしく受取れた。今まで宗助の心に映じた御米は、色と音の撩乱りようらんする裏なかに立つてさえ、極きわめて落ちついていた。そうしてその落ちつきの大部分はやたらに動かさない眼の働はたらきから来たとしか思われなかった。

次の日三人は表へ出て遠く濃い色を流す海を眺めた。松の幹から脂やにの出る空気を吸った。冬の日には短い空を赤裸々に横切つておとなしく西へ落ちた。落ちる時、低い雲を黄に赤に竈かまどの火の色に染めて行つた。風は夜に入つても起らなかつた。ただ時々松を鳴らして過ぎた。暖かい好い日が宗助の泊つている三日の

間続いた。

宗助はもつと遊んで行きたいと云った。御米はもつと遊んで行きましようと言った。安井は宗助が遊びに来たから好い天気になったんだらうと言った。三人はまた行李こうりと鞆かばんを携たずさえて京都へ帰った。冬は何事もなく北風を寒い国へ吹きやった。山の上を明らかにした斑まだらな雪がしだいに落ちて、後から青い色が一度に芽を吹いた。

宗助は当時を憶おもい出すたびに、自然の進行がそこではたりと留とどまつて、自分も御米もたちまち化石してしまつたら、かえつて苦はなかつたらうと思つた。事は冬の下から春が頭を擡もたげる時分に始まつて、散り尽した桜の花が若葉に色を易かえる頃に終つた。すべてが生しょう死したの戦たたかいであつた。青竹を炙あぶつて油を絞しぼるほどの苦しみであつた。大風は突然不用意の二人を吹き倒したのであ

る。二人が起き上がった時はどこもかしこもすでに砂だらけであつたのである。彼らは砂だらけになつた自分達を認めた。けれどもいつ吹き倒されたかを知らなかつた。

世間は容赦なく彼らに徳義上の罪を背負しやわした。しかし彼ら自

身は徳義上の良心に責められる前に、いったん茫然ぼうぜんとして、彼らの頭が確たしかであるかを疑つた。彼らは彼らの眼に、不徳義な男女なんによ

として恥ずべく映る前に、すでに不合理な男女として、不可思議に映つたのである。そこに言訳らしい言訳が何にもなかつた。

だからそこに云うに忍びない苦痛があつた。彼らは残酷な運命が氣紛きまぐれに罪もない二人の不意を打つて、面白半分おとしあな 弄おどの中に突

き落したのを無念に思つた。

曝露ばくろの日がまともに彼らの眉間みけんを射たとき、彼らはすでに徳

義的に痙攣けいれんの苦痛を乗り切つていた。彼らは蒼白あおしろい額を素直に

前に出して、そこに燄ほのおに似た烙印やきいんを受けた。そうして無形の鎖で繋がれたまま、手を携たずさえてどこまでも、いつしよに歩調を共にしなければならぬ事を見出した。彼らは親を棄すてた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きく云えば一般の社会を棄てた。もしくはそれらから棄てられた。学校からは無論棄てられた。ただ表向だけはこちらから退学した事になつて、形式の上に人間らしい迹あとを留とどめた。

これが宗助と御米の過去であつた。

十五

この過去を負わされた二人は、広島へ行つても苦しんだ。福岡へ行つても苦しんだ。東京へ出て来ても、依然として重い荷に

抑えつけられていた。佐伯の家とは親しい関係が結ばなくなつた。叔父は死んだ。叔母と安之助はまだ生きてゐるが、生きてゐる間に打ち解けた交際はできないほど、もう冷淡の日を重ねてしまった。今年はまだ歳暮にも行かなかつた。向からも来なかつた。家に引取つた小六さえ腹の底では兄に敬意を払つていなかった。二人が東京へ出たてには、單純な小供の頭から、正直に御米を悪んでいた。御米にも宗助にもそれがよく分つていた。夫婦は日の前に笑み、月の前に考えて、静かな年を送り迎えた。今年ももう尽きる間際まで来た。

とおりちよう
まぎわ
かじなみそろい
しめかざり
さく
だいだい
おそなえ

通町では暮の内から門並揃の注連飾をした。往来の左右に何十本となく並んだ、軒より高い笹が、ことごとく寒い風に吹かれて、さらさらと鳴つた。宗助も二尺余りの細い松を買つて、門の柱に釘付にした。それから大きな赤い橙を御供の上に載せて、

床の間に据^すえた。床にはいかがわしい墨^{すみ}画の梅が、蛤^{はまぐり}の格好^{かつこう}をした月を吐^はいてかかつていた。宗助にはこの変な軸の前に、橙と御供を置く意味が解らなかつた。

「いつたいこりや、どう云う了^{りようけん}見だね」と自分で飾りつけた物を眺^{なが}めながら、御米に聞いた。御米にも毎年こうする意味はとんと解らなかつた。

「知らないわ。ただそうしておけばいいのよ」と云つて台所へ去つた。宗助は、

「こうしておいて、つまり食うためか」と首を傾けて御供の位置を直した。

^{のしもち}伸餅^{よなべ}は夜業^{まないた}に俎^{なま}を茶の間まで持ち出して、みんなで切つた。

^{ほうちよう}庖丁が足りないのです、宗助は始からしまいまで手を出さなかつた。力のあるだけに小六が一番多く切つた。その代り不同も一

番多かつた。中には見かけの悪い形のものも交つた。変なのができるたびに清きよが声を出して笑つた。小六は庖丁の背に濡布巾ぬれぶきんをあてがつて、硬い耳の所を断ち切りながら、

「格好はどうでも、食いさいすればいいんだ」と、うんと力を入れて耳まで赤くした。

そのほかに迎年げいねんの支度としては、小殿原ごまめを熬いつて、煮染にしめを重詰あひさつにするくらいなものであつた。大晦日おおみそかの夜に入いつて、宗助は挨拶あいさつかたがた屋賃すりガラスを持つて、坂井の家に行つた。わざと遠慮えんよして勝手口へ回ると、摺硝子すりガラスへ明るい灯ひが映つて、中はざわざわしてゐた。上り框あががまちに帳面あがを持つて腰をかけた掛取らしい小僧が、立つて宗助に挨拶をした。茶の間には主人も細君もいた。その片隅かたすみに印裨天しるしぼんてんを着た出入でいりのものらしいのが、下を向いて、小ざいちい輪飾わかざりをいくつも拵こしらへてゐた。傍そばに讓葉ゆずりはと裏白うらじろと半紙はざみと鉢はちが置

いてあつた。若い下女が細君の前に坐つて、釣銭らしい札と銀貨を疊に並べていた。主人は宗助を見て、

「いやどうも」と云つた。「押しつまつてさぞ御忙しいでしょう。この通りごたごたです。さあどうぞこちらへ。何ですな、御互に正月にはもう飽きましたな。いくら面白いものでも四十辺以上繰り返すと厭になりますね」

主人は年の送迎に煩らわしいような事を云つたが、その態度にはどこと指してくさくさしたところは認められなかつた。言葉遣は活潑であつた。顔はつやつやしていた。晩食に傾けた酒の勢が、まだ頬の上に差しているごとく思われた。宗助は貰い煙草をして二三分ばかり話して帰つた。

家では御米が清を連れて湯に行くとか云つて、石鹼入を手拭に包んで、留守居を頼む夫の帰を待ち受けていた。

「どうなすつたの、随分長かつたわね」と云つて時計を眺めた。時計はもう十時近くであつた。その上清は湯の戻りに髪結かみゆいの所へ回つて頭を拵こしらえるはずだそうであつた。閑静な宗助の活計くらしも、おおみそか大晦日はらいにはそれ相応そうおうの事件が寄せて来た。

「払はもう皆済んだのかい」と宗助は立ちながら御米に聞いた。御米はまだ薪屋まきやが一軒残つてしていると答えた。

「来たら払つてちようだい」と云つて懷ふところの中から汚よごれた男持の紙入と、銀貨入の褌口がまぐちを出して、宗助に渡した。

「小六はどうした」と夫はそれを受取ながら云つた。

「先刻大晦日の夜の景色を見て来るつて出て行つたのよ。随分御苦労さまね。この寒いのに」と云う御米のあと後に追ついて、清は大きな声を出して笑つた。やがて、

「御若いから」と評しながら、勝手口へ行つて、御米の下駄げたを

そろ
揃えた。

「どこの夜景を見る気なんだ」

「銀座から日本橋通のだつて」

御米はその時もうかまち框から下りかけていた。すぐ腰障子こししょうじを開ける音がした。宗助はその音を聞き送つて、たつた一人火鉢ひばちの前に坐つて、灰になる炭の色を眺ながめていた。彼の頭には明日あしたの日の丸が映つた。外を乗り回す人の絹帽子きぬぼうしの光が見えた。洋剣サアベルの音だの、馬いななきの嘶だの、遣羽子やりはごの声が聞えた。彼は今から数時間の後のちまた年中行事のうちで、もつとも人の心を新にすべく仕組まれた景物に出逢わなければならなかつた。

陽気そうに見えるもの、賑にぎやかそうに見えるものが、幾組となぐ彼の心の前を通り過ぎたが、その中で彼の臂ひじを把とつて、いっしょに引張つて行こうとするものは一つもなかつた。彼はただ

饗宴に招かれない局外者として、酔う事を禁じられたごとくに、

また酔う事を免まぬかれた人であつた。彼は自分と御米の生命ライフを、

毎年平凡な波瀾はらんのうちに送る以上に、面前まのあたり大した希望も持つて

いなかった。こうして忙がしい大晦日に、一人家を守る静かさ

が、ちょうど彼の平生の現実を代表していた。

御米は十時過に帰つて来た。いつもより光沢つやの好い頬を灯ひに

照らして、湯の温ぬくもりのまだ抜けない襟えりを少し開けるように襦袢じゆばんを

重ねていた。長い襟首がよく見えた。

「どうも込んで込んで、洗う事も桶おけを取る事もできないくらい

なの」と始めて緩ゆっくり息を吐ついた。

清の帰つたのは十一時過であつた。これも綺麗きれいな頭を障子か

ら出して、ただ今、どうも遅くなりましたと挨拶あいさつをしたついで

に、あれから二人とか三人とか待ち合したと云う話をした。

ただ小六だけは容易に帰らなかった。十二時を打ったとき、宗助はもう寝ようと云い出した。御米は今日に限って、先へ寝るのも変なものだと思つて、できるだけ話を繋いでいた。小六は幸さいわいにして間もなく帰った。日本橋から銀座へ出てそれから、水天宮の方へ廻ったところが、電車が込んで何台も待ち合わしたために遅くなつたという言訳をした。

白牡丹はくぼたんへ這入はいつて、景物の金時計でも取ろうと思つたが、何

も買うものがなかつたので、仕方なしに鈴の着いた御手玉おてだまを一

箱買つて、そうして幾百となく器械で吹き上げられる風船を一

つ攫つかんだら、金時計は当たらないで、こんなものがあつたと云つ

て、袂たもとから倶楽部洗粉くらぶあらいこを一袋出した。それを御米の前に置いて、

「姉さんに上げましょう」と云つた。それから鈴を着けた、梅の花の形に縫つた御手玉を宗助の前に置いて、

「坂井の御嬢さんにでも御上げなさい」と云った。
事に乏しい一小家族の大晦日は、おおみそかそれで終りを告げた。

十六

正月は二日目の雪を率ひきいて注連飾しめかざりの都を白くした。降りやんだ
屋根の色がもとに復かえる前、夫婦は亜鉛張トタン張りの底を滑ひさしり落ちる雪の
音に幾遍か驚ろかされた。夜半よなかにはどさと云う響ひびがことにはな
はだしかつた。小路こうじの泥濘ぬかるみは雨上りと違ちがつて一日いちんちや二日ふつかでは容
易に乾かなかつた。外から靴を汚よごして帰かえつて来る宗助そうすけが、御米およね
の顔を見るたびに、

「こりやいけない」と云いながら玄関へ上あつた。その様子があ
たかも御米を路を悪くした責任者と見倣みなしている風に受取られ

るので、御米はしまいに、

「どうも済みません。本当に御氣の毒さま」と云つて笑い出した。宗助は別に返すべき冗談じようだんも有たなかつた。

「御米ここから出かけるには、どこへ行くにも足駄あしだを穿はかなくつちやならないように見えるだろう。ところが下町へ出ると大違だ。どの通もどの通もからからで、かえつて埃ほこりが立つくらいだから、足駄なんぞ穿はいちやきまりが悪くつて歩けやしない。つまりこう云う所に住んでいる我々は一世紀がた後おくれる事になるんだね」

こんな事を口にする宗助は、別に不足らしい顔もしていなかつた。御米も夫の鼻の穴を潜くぐる煙草たばこの煙けむを眺めるくらいな気で、それを聞いていた。

門
「坂井さんへ行つて、そう云つていらつしやいな」と軽い返事

をした。

「そうして屋賃でも負けて貰う事にしよう」と答えたまま、宗助はついに坂井へは行かなかった。

その坂井には元日の朝早く名刺を投げ込んだだけで、わざと主人の顔を見ずに門を出たが、義理のある所を一日のうちにほぼ片づけて夕方帰って見ると、留守の間に坂井がちゃんと来ていたので恐縮した。二日は雪が降っただけで何事もなく過ぎた。三日目の日暮ひくれに下女が使に来て、御閑おひまならば、旦那様と奥さまと、それから若旦那様には是非今晚御遊びにいらつしやるようにと云って帰った。

「何をするんだろう」と宗助は疑ぐった。

「きつと歌加留多うたがるたでしょう。小供が多いから」と御米が云った。
「あなた行つていらつしやい」

「せつかくだから御前行くが好い。おれは歌留多は久しく取らないから駄目だ」

「私も久しく取らないから駄目ですわ」

二人は容易に行こうとはしなかった。しまいには、では若旦那がみんなを代表して行くが宜よかろうという事になった。

「若旦那行つて来い」と宗助が小六ころくに云つた。小六は苦笑にがわらいし

て立つた。夫婦は若旦那と云う名を小六に冠かむらせる事を大変な

滑稽こっけいのように感じた。若旦那と呼ばれて、苦笑いする小六の顔

を見ると、等しく声を出して笑い出した。小六は春らしい空気

の中うちから出た。そうして一町ほどの寒さを横切つて、また春ら

しい電灯の下もとに坐つた。

その晩小六は大晦日おおみそかに買った梅の花の御手玉おてだまを袂たもとに入れて、

これは兄から差上げますとわざわざ断つて、坂井の御嬢さんに

贈物にした。その代り帰りには、福引に当った小さな裸人形を
同じ袂へ入れて来た。その人形の額が少し欠けて、そこだけ墨
で塗つてあつた。小六は真面目な顔をして、これが袖萩だそう
ですと云つて、それを兄夫婦の前に置いた。なぜ袖萩だか夫婦
には分らなかつた。小六には無論分らなかつたのを、坂井の奥
さんが叮嚀に説明してくれたそうであるが、それでも腑に落ち
なかつたので、主人がわざわざ半切に洒落と本文を並べて書い
て、帰つたらこれを兄さんと姉さんに御見せなさいと云つて渡
したとかいう話であつた。小六は袂を探つてその書付を取り出
して見せた。それに「此垣一重が黒鉄の」と認めた後に括弧を
して、（此餓鬼額が黒欠の）とつけ加えてあつたので、宗助と
御米はまた春らしい笑を洩らした。

「随分念の入った趣向だね。いつたい誰の考だい」と兄が聞い

た。

「誰ですか」と小六はやつぱりつまらなそうな顔をして、人形をそこへ放り出したまま、自分の室へやに帰った。

それから二三日して、たしか七日なぬかの夕方に、また例の坂井の下女が来て、もし御閑おひまならどうぞ御話にと、叮嚀ていねいに主人の命を伝えた。宗助と御米は洋灯ランプを点つけてちやうど晩食ばんめしを始めたところであつた。宗助はその時茶碗を持ちながら、

「春もようやく一段落が着いた」と語つていた。そこへ清が坂井からの口上を取り次いだので、御米は夫の顔を見て微笑した。宗助は茶碗を置いて、

「まだ何か催おしがあるのかい」と少し迷惑まよそうな眉まゆをした。坂井の下女に聞いて見ると、別に来客もなければ、何の支度もないという事であつた。その上細君は子供を連れて親類へ呼ば

れて行つて留守だという話までした。

「それじゃ行こう」と云つて宗助は出掛けた。宗助は一般の社交を嫌きらつていた。やむを得なければ会合の席などへ顔を出す男でなかつた。個人としての朋友ともだちも多くは求めなかつた。訪問はする暇を有もたなかつた。ただ坂井だけは取除とりわけであつた。折々は用もないのにこつちからわざわざ出掛けて行つて、時を潰つぶして来る事さえあつた。その癖坂井は世の中でもっとも社交的人であつた。この社交的な坂井と、孤独な宗助が二人寄つて話ができるのは、御米にさえ妙に見える現象であつた。坂井は、

「あつちへ行きましたよ」と云つて、茶の間を通り越して、廊下伝いに小さな書齋へ入つた。そこには棕櫚しゅろの筆で書いたような、大きな硬こわい字が五字ばかり床の間にかかつていた。棚たなの上に見事な白い牡丹ぼたんが活いけてあつた。そのほか机でも蒲団ふとんでもこ

とごとく綺麗きれいであつた。坂井は始め暗い入口に立つて、「さあどうぞ」と云いながら、どこかぴちりと振ひねつて、電氣灯を点つけた。それから、

「ちよつと待ちたまえ」と云つて、燐寸マッチで瓦斯ガス煖炉だんろを焚たいた。瓦斯煖炉は室へやに比例したごく小さいものであつた。坂井はしかる後蒲団を薦すすめた。

「これが僕の洞窟どうくつで、面倒になるとここへ避難するんです」宗助も厚い綿わたの上で、一種の静かさを感じた。瓦斯の燃える音が微かすかにしてしだいに背中からほかほか煖まつて来た。

「ここにいらつしやい。もうどことも交渉はない。全く気楽です。悠ゆうくりしていらつしやい。實際正月と云うものは予想外に煩瑣うるさいものです。私も昨日きのうまででほとんどへとへとに降参もたれさせられました。新年が停滞もたれしているのは実に苦しいですよ。それで今日

の午ひるから、とうとう塵世じんせいを遠ざけて、病氣になつてぐつと寝込んでしまいました。今しがた眼を覚さまして、湯に入つて、それから飯を食つて、煙草たばこを呑のんで、氣がついて見ると、家内が子供を連れて親類へ行つて留守なんでしょう。なるほど静かなはずだと思ひましてね。すると今度は急に退屈になつたのです。人間も随分わがままなものですよ。しかしいくら退屈だつて、この上おめでたいものを、見たり聞いたりしちや骨が折れますし、また御正月らしいものを呑んだり食つたりするのも恐れますから、それで、御正月らしくない、と云うと失礼だが、まあ世の中とあまり縁のないあなた、と云つてもまだ失敬かも知れないが、つまり一口に云うと、超然派ちょうぜんはの一人いちにんと話はなしがして見みたくなつたんで、それでわざわざ使を上げたような訳なんです」と坂井は例の調子で、ことごとくすらすらしたものであつた。宗助はこ

の樂天家の前では、よく自分の過去を忘れる事があつた。そうして時によると、自分がもし順当に發展して来たら、こんな人物になりはしなかつたらうかと考えた。

そこへ下女が三尺の狭い入口を開けて這入^{はい}つて来たが、改ためて宗助に鄭重^{ていちょう}な御辞儀をした上、木皿のような菓子皿のようなものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前に置いて、一口もものを云わずに退^さがった。木皿の上には護謨^{ゴモ}毯^{まり}ほどな大きな田舎饅頭^{いなかまんじゅう}が一つ載^のせてあつた。それに普通の倍以上もあろうと思われる楊枝^{ようじ}が添えてあつた。

「どうです暖かい内に」と主人が云つたので、宗助は始めてこの饅頭の蒸^むして間もない新らしさに気がついた。珍らしそうに黄色い皮を眺^{なが}めた。

「いやできたてじゃありません」と主人がまた云つた。「実は

昨夜ある所へ行つて、冗談じようだん半分に賞ほめたら、御土産おみやげに持つていらつしやいと云うから貰つて来たんです。その時は全く暖あつたかだったんですがね。これは今上げようと思つて蒸むし返かへしたのです」

主人は箸はしとも楊枝ようじとも片のつかないもので、無雑作むぞうさに饅頭まんとうを割つて、むしやむしや食い始めた。宗助も顰ひんに倣ならつた。

その間に主人は昨夕ゆうべ行つた料理屋で逢つたとか云つて妙な芸者の話をした。この芸者はポツケツト論語ろんごが好きで、汽車へ乗つたり遊びに行つたりするときは、いつでもそれを懐ふところにして出るそうであつた。

「それでね孔子の門人のうちで、子路しろうが一番好すきだつて云うんですかね。そのいわれを聞くと、子路と云う男は、一つ何か教おすわつて、それをまだ行わないうちに、また新らしい事を聞くと苦に

するほど正直だからだつて云うんです。実のところ私も子路はあまりよく知らないから困つたが、何しろ一人好い人ができて、それと夫婦にならない前に、また新らしく好い人ができると苦になるようなものじゃないかつて、聞いて見たんです……」

主人はこんな事をはなはだ気楽そうに述べ立てた。その話の様子からして考えると、彼はのべつにこういう場所に出入して、その刺戟しげきにはとうに麻痺まひしながら、因習の結果、依然として月に何度となく同じ事を繰り返しているらしかった。よく聞き糺ただして見ると、しかく平気な男も、時々は歡樂の飽滿ほうまんに疲労して、書齋のなかで精神を休める必要が起るのだそうであつた。

宗助はそういう方面にまるで経験のない男ではなかつたので、強しいて興味を装よそおふ必要もなく、ただ尋常な挨拶あいさつをするところが、かえつて主人の氣に入るらしかった。彼は平凡な宗助の言葉の

なかから、一種異彩のある過去を覗くのぞような素振そぶりを見せた。しかしそちらへは宗助が進みたがらない痕迹こんせきが少しでも出ると、すぐ話を転じた。それは政略よりもむしろ礼讓からであった。したがって宗助には毫ちようも不愉快を与えなかった。

そのうち小六の噂うわさが出た。主人はこの青年について、肉身の兄が見逃すような新らしい觀察を、二三有もっていた。宗助は主人の評語を、当ると当たらないとに論なく、面白く聞いた。そのなかに、彼は年に合わしては複雑な実用に適しない頭を有つていながら、年よりも若い単純な性情を平気で露あらわす子供じやないかという質問があつた。宗助はすぐそれを首肯うけがつた。しかし学校教育だけで社会教育のないものは、いくら年を取ってもその傾かたむきがあるだろうと答えた。

「さよう、それと反対で、社会教育だけあつて学校教育のない

ものは、随分複雑な性情を發揮する代りに、頭はいつまでも小供ですからね。かえつて始末が悪いかも知れない」

主人はここでちよつと笑つたが、やがて、

「どうです、私の所^{わたし}へ書生に寄こしちや、少しは社会教育になるかも知れない」と云つた。主人の書生は彼の犬が病気で病院へ這入^{はい}る一カ月前とかに、徴兵検査に合格して入營したぎり今では一人もいないのだそうであつた。

宗助は小六の所置をつける好機会が、求めざるに先だつて、春と共に自^{おのず}から回^{めぐ}つて来たのを喜こんだ。同時に、今まで世間に向つて、積極的に好意と親切を要求する勇氣を有^もたなかつた彼は、突然この主人の申^{もう}し出^{いで}に逢つて少しまごつくくらい驚ろいた。けれどもできるならなりたけ早く弟を坂井に預けて置いて、この変動から出る自分の余裕^{よゆう}に、幾分か安之助の補助を足

して、そうして本人の希望通り、高等の教育を受けさしてやろうという分別をした。そこで打ち明けた話を腹藏なく主人にすると、主人はなるほどなるほどと聞いているだけであつたが、しまいに雑作^{ぞうさ}なく、

「そいつは好いでしょう」と云つたので、相談はほぼその座で纏^{まと}まつた。

宗助はそこで辞して帰ればよかつたのである。また辞して帰ろうとしたのである。ところが主人からまあ緩^{ゆる}くりなさいと云つて留められた。主人は夜は長い、まだ宵^{よい}だと云つて時計まで出して見せた。実際彼は退屈^{たいくつ}ししかつた。宗助も帰ればただ寝るよりほかに用のない身体^{からだ}なので、ついまた尻^{しつ}を据^すえて、濃い煙草^{たばこ}を新らしく吹かし始めた。しまいには主人の例に倣^{なら}つて、柔らかな座蒲団^{ざふとん}の上で膝^{ひざ}さえ崩^{くず}した。

主人は小六の事に關聯して、

「いや弟などを有つていると、随分厄介やつかいなものですよ。私も一わたくし

人やくざなのを世話をした覚がありますがね」と云つて、自分

の弟が大学にいるとき金のかかった事などを、自分が学生時代

の質朴しつぽくさに比べていろいろ話した。宗助はこの派出はでずき好な弟が、

その後どんな径路を取つて、どう發展したかを、氣味の悪い運

命の意思を窺うかがう一端として、主人に聞いて見た。主人は卒然

「アドヴェンチュアラー

冒険者」と、頭も尾しつぽもない一句を投げるように吐いた。

この弟は卒業後主人の紹介で、ある銀行に這入はいったが、何で

も金を儲けなくつちやいけないと口癖のように云つていたそう

で、日露戦争後間もなく、主人の留めるのも聞かずに、大いに発

展して見たいとかとなえてついに満洲へ渡つたのだと云う。そ

こで何を始めるかと思うと、遼河りょうがを利用して、豆粕大豆まめかすだいずを船で

くだ
下す、大仕掛な運送業を経営して、たちまち失敗してしまったのだそうである。元より当人は、資本主ではなかったのだけれども、いよいよというあかつき暁に、勘定して見ると大きな欠損と事がきまつたので、無論事業は継続する訳に行かず、当人は必然の結果、地位を失ったぎりになった。

「それから後私あとわたしもどうしたかよく知らなかったんですが、その後のちようやく聞いて見ると、驚ろきましたね。蒙古もうこへ這入って漂浪うろつしているんです。どこまで山気やまぎがあるんだか分らないんで、私も少々剣呑けんおんになつてゐるんですよ。それでも離れてゐるうちは、まあどうかしているだろうぐらいに思つて放っておきます。時たま音便たよりがあつたつて、蒙古もうこという所は、水に乏しい所で、暑い時には往来へ泥溝どぶの水を撒まくとかね、またはその泥溝の水が無くなると、今度は馬の小便を撒くとか、したがつてはなはだ

臭いとか、まあそんな手紙が来るだけですから、——そりやあ金の事も云つて来ますが、なに東京と蒙古だから打遣うちやつておけばそれまでです。だから離れてさえいれば、まあいいんですが、そいつが去年の暮突然出て来ましてね」

主人は思いついたように、床の柱にかけた、綺麗きれいな房のついた一種の装飾物を取りおろした。

それは錦の袋に這入はいつた一尺ばかりの刀であつた。鞘さやは何とも知れぬ緑色の雲母きららのようなものでできていて、その所々が三カ所ほど巻いてあつた。中身は六寸ぐらいしかなかつた。したがつて刃はも薄かつた。けれども鞘の格好かっこうはあたかも六角の檜かしの棒のように厚かつた。よく見ると、柄つかの後に細い棒が二本並んで差さつていた。結果は鞘を重ねて離れないために銀の鉢巻をしたと同じであつた。主人は

「土産みやげにこんなものを持って来ました。蒙古刀もうこうとうだそうです」と云いながら、すぐ抜いて見せた。後うしろに差してあつた象牙ぞうげのような棒も二本抜いて見せた。

「こりや箸はしですよ。蒙古人は始終しじゅうこれを腰へぶら下げていて、いざ御馳走ごちそうという段になると、この刀を抜いて肉を切つて、そうしてこの箸で傍そばから食うんだそうです」

主人はことさらに刀と箸を両手に持つて、切つたり食つたりする真似をして見せた。宗助はひたすらにその精巧な作りを眺ながめた。

「まだ蒙古人の天幕テントに使うフェルトも貰いましたが、まあ昔の毛氈もうせんと変つたところありませんね」

主人は蒙古人の上手に馬を扱う事や、蒙古犬の瘠やせて細長くて、西洋のグレー・ハウンドに似ている事や、彼らが支那人の

ためにだんだん押し狭め^{せば}られて行く事や、——すべて近頃あつちから帰つたという弟に聞いたままを宗助に話した。宗助はまた自分のいまだかつて耳にした事のない話だけに、一々少なからぬ興味を有^もつてそれを聞いて行つた。そのうちに、元來この弟は蒙古で何をしているのだろうという好奇心が出た。そこでちよつと主人に尋ねて見ると、主人は、

「アドヴェンチュアラー
冒険者」

と再び先刻^{さつき}の言葉を力強く繰り返した。「何をし

ているか分らない。私には、牧畜をやっています。しかも成功

していますと云うんですがね、いつこ^{あて}う当にはなりません。今

までもよく法螺^{ほら}を吹いて私を欺^{だま}したもんです。それに今度東京

へ出て来た用事と云うのがよつぽど妙です。何とか云う蒙古王

のために、金を二万円ばかり借りたい。もし借してやらないと

自分の信用に関わるって奔走しているんですからね。そのとつ

はじめに捕まつたのは私だが、いくら蒙古王だつて、いくら広い土地を抵当にするつたつて、蒙古と東京じゃ催促さえできやしませんもの。で、私が断ると、蔭^{かげ}へ廻つて妻^{さい}に、兄さんはあれだから大きな仕事ができつこないつて、威張つてゐるんです。しょうがない」

主人はここで少し笑つたが、妙に緊張した宗助の顔を見て、「どうです一遍逢つて御覧になつちや、わざわざ毛皮の着いただぶだぶしたもののなんか着て、ちよつと面白いですよ。何なら御紹介しましょう。ちようど明後日^{あさつて}の晩呼んで飯を食わせる事になつてゐるから。——なに引つ掛つちやいけませんかね。黙つて向^{むこう}に喋舌^{しゃべ}らして、聞いている分には、少しも危険はありません。ただ面白いだけです」としきりに勧め出^{すす}した。宗助は多少心を動かした。

「おいでになるのは御令弟だけですか」

「いやほかに一人弟の友達おとしで向むこうからいつしよに来たものが、来るはずになっています。安井とか云つて私はまだ逢つた事もない男ですが、弟がしきりに私に紹介したがるから、実はそれで二人を呼ぶ事にしたんです」

宗助はその夜蒼い顔あおをして坂井の門かどを出た。

十七

宗助そうすけと御米およねの一生を暗く彩いろどつた関係は、二人の影を薄くして、幽霊ゆうれいのような思をどこかに抱いだかしめた。彼らは自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜ひそんでいるのを、仄ほのかに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合つて

年を過した。

当初彼らの頭脳に痛く^{こた}応えたのは、彼らの過^{あやまち}が安井の前途に及ぼした影響であつた。二人の頭の中で沸^わき返つた^{すじ}凄^{あわ}い泡のようなもの^{しりぞ}がようやく静まつた時、二人は安井もまた半途中で学校を退^{しりぞ}いたという消息を耳にした。彼らは固^{もと}より安井の前途^{きずつ}を傷けた原因をなしたに違なかつた。次に安井が郷里に歸つたという^{うわさ}噂を聞いた。次に病氣に罹^{かか}つて家に寝ているという報知^{しらせ}を得た。二人はそれを聞^{たより}くたびに重い胸を痛めた。最後に安井が満洲に行つたと云^{からだ}う音信が來た。宗助は腹の中で、病氣はもう癒^{なお}つたの^{うそ}だろうかと思つた。または満洲行の方が嘘ではな^{うそ}かろうかと考^{うそ}えた。安井は身体から云つても、性質から云つても、満洲や台湾に向く男ではなかつたからである。宗助はできるだけ手を回して、事の真疑を探つた。そうして、或る關係から、安井が

たしかに奉天にいる事を確め得た。同時に彼の健康で、活潑で、多忙である事も確め得た。その時夫婦は顔を見合せて、ほつという息を吐いた。

「まあよからう」と宗助が云った。

「病気よりはね」と御米が云った。

二人はそれから以後安井の名を口にするのを避けた。考え出す事さえもあえてしなかった。彼らは安井を半途で退学させ、郷里へ帰らせ、病気に罹らせ、もしくは満洲へ驅^かりやった罪に對して、いかに悔恨の苦しみを重ねても、どうする事もできない地位に立っていたからである。

「御米、御前信仰の心が起った事があるかい」と或時宗助が御米に聞いた。御米は、ただ、

「あるわ」と答えただけで、すぐ「あなたは」と聞き返した。

宗助は薄笑いをしたぎり、何とも答えなかった。その代り推おして、御米の信仰について、詳しい質問も掛けなかった。御米には、それが仕合せしあわせかも知れなかった。彼女はその方面に、これと
いうほど判然はつきりした凝り整った何物も有もつていなかったからである。二人はとかくして会堂の腰掛ベンチにも倚よらず、寺院の門も潜くぐらずに過ぎた。そうしてただ自然の恵から来る月日つきひと云う緩和かんわざい剤の力だけで、ようやく落ちついた。時々遠くから不意に現れる訴うったえも、苦しみとか恐れとかいう残酷の名を付けるには、あまり微かすかに、あまり薄く、あまりに肉体と慾得を離れ過ぎるようになつた。必竟ひつきようずるに、彼らの信仰は、神を得なかつたため、仏ほとけに逢あわなかつたため、互を目標めじるしとして働はたらいた。互に抱だき合つて、丸い円を描えがき始めた。彼らの生活は淋さみしいなりに落ちついて来た。その淋しい落ちつきのうちに、一種の甘い悲哀を味わつ

た。文芸にも哲学にも縁のない彼らは、この味を舐め^な尽しなから、自分で自分の状態を得意がつて自覚するほどの知識を有^もたなかつたから、同じ境遇にある詩人や文人などよりも、一層純粹であつた。——これが七日^{なのか}の晩に坂井へ呼ばれて、安井の消息を聞くまでの夫婦の有様であつた。

その夜宗助は家に帰つて御米の顔を見るや否^{いな}や、「少し具合が悪いから、すぐ寝よう」と云つて、火鉢^{ひばち}に倚^よりながら、帰^{かえり}を待ち受けていた御米を驚ろかした。

「どうなすつたの」と御米は眼を上げて宗助を眺^{なが}めた。宗助はそこに突つ立つていた。

宗助が外から帰つて来て、こんな風をするのは、ほとんど御米の記憶にないくらい珍らしかつた。御米は卒然何とも知れない恐怖の念に襲^{おそ}われたごとくに立ち上がったが、ほとんど器械

的に、戸棚とだなから夜具蒲団やぐふとんを取り出して、夫の云いつけ通り床を延べ始めた。その間宗助はやつぱり懷手ふところをして傍そばに立っていた。そうして床が敷けるや否や、そこそこに着物を脱ぎ捨てて、すぐその中に潜りもぐ込んだ。御米は枕元を離れ得なかった。

「どうなすつたの」

「何だか、少し心持が悪い。しばらくこうしてじつとしていたら、よくなるだろう」

宗助の答は半ば夜着の下から出た。その声が籠こもつたように御米の耳に響いた時、御米は濟まない顔をして、枕元に坐すわつたなり動かなかった。

「あっちへ行つていてもいいよ。用があれば呼ぶから」

御米はようやく茶の間へ歸つた。

宗助は夜具を被かぶつたまま、ひとり硬くなつて眼を眠ねむっていた。

彼はこの暗い中で、坂井から聞いた話を何度となく反覆した。彼は満洲にいる安井の消息を、家主たる坂井の口を通して知ろうとは、今が今まで予期していなかった。もう少しの事で、その安井と同じ家主の家へ同時に招かれて、隣り合せか、向い合せに坐る運命になろうとは、今夜晩食を済ますまで、夢にも思いがけなかった。彼は寝ながら過去二三時間の経過を考へて、そのクライマックスが突如として、いかにも不意に起つたのを不思議に感じた。かつ悲しく感じた。彼はこれほど偶然な出来事を借りて、後から断りなしに足絡をかけなければ、倒す事のできないほど強いものとは、自分ながら任じていなかったのである。自分のような弱い男を放り出すには、もつと穩当な手段でたくさんでありそうなのだと信じていたのである。

小六ころくから坂井の弟、それから満洲、蒙古もうこ、出京、安井、——こ

う談話の迹を辿れば辿るほど、偶然の度はあまりにはなはだしかった。過去の痛恨を新にすべく、普通の人が滅多に出逢わないうこの偶然に出逢うために、千百人のうちから撰り出されなければならぬほどの人物であつたかと思うと、宗助は苦しかった。また腹立たしかつた。彼は暗い夜着の中で熱い息を吐いた。この二三年の月日でようやく癒りかけた創口が、急に疼き始めた。疼くに伴つて熱つて来た。再び創口が裂けて、毒のある風が容赦なく吹き込みそうになつた。宗助はいつそのこと、万事を御米に打ち明けて、共に苦しみを分つて貰おうかと思つた。「御米、御米」と二声呼んだ。

御米はすぐ枕元へ来て、上から覗き込むように宗助を見た。宗助は夜具の襟から顔を全く出した。次の間の灯が御米の頬を半分照らしていた。

「熱い湯を一杯貰おう」

宗助はとうとう言おうとした事を言い切る勇氣を失つて、噓うそを吐ついてごまかした。

翌日宗助は例のごとく起きて、平日と変る事なく食事を済ました。そうして給仕をしてくれる御米の顔に、多少安心の色が見えたのを、嬉うれしいような憐あわれなような一種の情緒じょうしよをもつて眺ながめた。

「昨ゆうべ夕は驚ろいたわ。どうなすつたのかと思つて」

宗助は下を向いて茶碗に注ついだ茶を呑のんだだけであつた。何と答えていいか、適当な言葉を見出さなかつたからである。

その日は朝からから風が吹き荒すさんで、折々埃ほこりと共に行く人の帽を奪つた。熱があると悪いから、一日休んだらと云う御米の心配を聞き捨てにして、例の通り電車へ乗つた宗助は、風の音

と車の音の中に首を縮めて、ただ一つ所を見つめていた。降りる時、ひゅうという音がして、頭の上の針線が鳴ったのに気がついて、空を見たら、この猛烈な自然の力の狂う間に、いつもより明らかな日がのそりと出ていた。風は洋袴ズボンの股またを冷たくして過ぎた。宗助にはその砂を捲まいて向うの堀の方へ進んで行く影が、斜めに吹かれる雨の脚あしのように判然見えた。

役所では用が手に着かなかつた。筆を持つて頬杖ほおづえを突いたまま何か考えた。時々は不必要な墨みだを妄すりに磨りおろした。煙草たばこはむやみに呑んだ。そうしては、思い出したように窓硝子まどガラスを通して外を眺めた。外は見るたびに風の世界であつた。宗助はただ早く帰りたかつた。

ようやく時間が来て家うちへ帰つたとき、御米は不安らしく宗助の顔を見て、

「どうもなくつて」と聞いた。宗助はやむを得ず、どうもないが、ただ疲れたと答えて、すぐ炬燵こたつの中へ入ったなり、晩食ばんめしまで動かなかった。そのうち風は日と共に落ちた。昼の反動で四隣あたりは急にひっそり静まった。

「好い案排あんばいね、風が無くなつて。昼間のように吹かれると、家に坐つていても何だか氣味が悪くつてしようがないわ」

御米の言葉には、魔物でもあるかのように、風を恐れる調子があつた。宗助は落ちついて、

「今夜は少し暖あつたかいようだね。穏おだやかで好い御正月だ」と云つた。飯を済まして煙草たばこを一本吸う段になつて、突然、

「御米、寄席よせへでも行つて見ようか」と珍らしく細君を誘つた。御米は無論いふ否む理由を有もたなかつた。小六は義太夫などを聞くより、宅うちにいて餅もちでも焼いて食つた方が勝手だといふので、留

守を頼んで二人出た。

少し時間が遅れたので、寄席はいつぱいであつた。二人は座蒲団ざぶとんを敷く余地もない一番後うしろの方に、立膝たてひざをするように割り込まして貰つた。

「大変な人ね」

「やつぱり春だから入るんだろう」

二人は小声で話しながら、大きな部屋にぎつしり詰まつた人の頭を見回みまわした。その頭のうちで、高座こうざに近い前の方は、煙草の煙で霞かすんでいるようにぼんやり見えた。宗助にはこの累々るいるいたる黒いものが、ことごとくこう云う娯楽の席へ来て、面白く半夜を潰つぶす事のできる余裕のある人らしく思われた。彼はどの顔を見ても羨うらやましかつた。

彼は高座の方を正視して、熱心に淨瑠璃じょうるりを聞こうと力つとめた。

けれどもいくら力めても面白くならなかった。時々眼を外らして、御米の顔を偷み見た。見るたびに御米の視線は正しい所を向いていた。傍に夫のいる事はほとんど忘れて、真面目に聴いているらしかった。宗助は羨やましい人のうちに、御米まで勘定しなければならなかった。

中入の時、宗助は御米に、

「どうだ、もう帰ろうか」と云い掛けた。御米はその唐突なのに驚ろかされた。

「厭なの」と聞いた。宗助は何とも答えなかった。御米は、「どうでもいいわ」と半分夫の意に忤らわれないような挨拶をした。宗助はせっかく連れて来た御米に対して、かえつて気の毒な心が起った。とうとうしまいまで辛抱して坐っていた。

家へ帰ると、小六は火鉢の前に胡坐を搔いて、背表紙の反り

返るのも構わずに、手に持った本を上から翳^{かざ}して読んでいた。鉄瓶^{てつびん}は傍^{わき}へ卸^{おろ}したなり、湯は生温^{なまぬ}るく冷^さめてしまった。盆の上に焼き余りの餅が三切^{みきれ}か四片^{よきれ}載せてあつた。網の下から小皿に残った醤油の色が見えた。

小六は席を立って、

「面白かつたですか」と聞いた。夫婦は十分ほど身体^{からだ}を炬燵^{こたつ}で暖めた上すぐ床へ入った。

翌日になつても宗助の心に落ちつきが来なかつた事は、ほば前の日と同じであつた。役所が退^ひけて、例の通り電車へ乗つたが、今夜自分と前後して、安井が坂井の家へ客に来ると云う事を想像すると、どうしても、わざわざその人と接近するために、こんな速力^{うち}で、家へ帰^{かへ}つて行くのが不合理に思われた。同時に安井はその後どんなに変化したらうと思うと、よそから一目彼

の様子ながが眺めたくもあつた。

坂井がおととい一昨日の晩、自分の弟おととを評して、一口に「冒険者」アドヴェンチュアラ

と云つた、その音おんが今宗助の耳に高く響き渡つた。宗助はこの

一語の中に、あらゆる自暴と自棄と、不平ぞうおと憎悪と、乱倫はいとくと悖徳

と、盲断と決行とを想像して、これらの一角いっかくに触れなければなら

ないほどの坂井の弟と、それと利害を共にすべく満洲からいつ

しよに出て来た安井が、いかなる程度の人物になつたかを、頭

の中で描えがいて見た。描かれた画えは無論アドヴェンチュアラ冒険者の字面じづらの許す範

囲内で、もつとも強い色彩を帯びたものであつた。

かように、墮落の方面をとくに誇張した冒険者アドヴェンチュアラを頭の中で

持こしらえ上げた宗助は、その責任を自身一人で全く負わなければな

らないような気がした。彼はただ坂井へ客に来る安井の姿を一

目見て、その姿から、安井の今日こんにちの人格を髣髴ほうふつしたかつた。そ

うして、自分の想像ほど彼は墮落していないという慰藉いしやを得たかつた。

彼は坂井の家の傍いえそばに立つて、向むこうに知れずに、他ひとを窺うかがうような便利な場所はあるまいかと考えた。不幸にして、身を隠すべきところを思いつき得なかつた。もし日が落ちてから来るとすれば、こちらが認められない便宜べんぎがあると同時に、暗い中を通る人の顔の分らない不都合があつた。

そのうち電車が神田へ来た。宗助はいつもの通りそこで乗り換えて家の方うちへ向いて行くのが苦痛になつた。彼の神経は一步でも安井の来る方角へ近づくに堪たえなかつた。安井をよそながら見たいという好奇心は、始めからさほど強くなかつただけに、乗換の間際まぎわになつて、全く抑おさえつけられてしまった。彼は寒い町を多くの人のごとく歩いた。けれども多くの人のごとくに判然はつきり

した目的は有^もつていなかった。そのうち店に灯^ひが点いた。電車も灯火^{あかり}を照^ともした。宗助はある牛肉店に上がつて酒を呑^のみ出した。一本は夢中に呑んだ。二本目は無理に呑んだ。三本目にも酔えなかった。宗助は背を壁に持たして、酔つて相手のない人のような眼をして、ぼんやりどこかを見つめていた。

時刻が時刻なので、夕飯^{ゆうめし}を食^くひに来る客は入れ代り立ち代り来た。その多くは用弁^{ようべん}的に飲食^{いんしょく}を済まして、さつさと勘定^{かんじよう}をして出て行くだけであつた。宗助は周囲のざわつく中に黙然^{もくねん}として、他の倍^{ひと}も三倍も時を過ぎたごとくに感じた末、ついに坐り切れずに席を立つた。

表は左右から射す店の灯で明らかであつた。軒先を通る人は、帽^{いし}も衣装^{ようそう}もはつきり物色する事ができた。けれども広い寒さを照らすには余りに弱過ぎた。夜は戸^とごとの瓦斯^{ガス}と電灯を閑却^{かんきやく}し

て、依然として暗く大きく見えた。宗助はこの世界と調和するほどの黒味の勝った外套マントに包まれて歩いた。その時彼は自分の呼吸する空気さえ灰色になつて、肺の中の血管に触れるような気がした。

彼はこの晩に限つて、ベルを鳴らして忙がしそうに眼の前を往つたり来たりする電車を利用する考かんがえが起らなかつた。目的をもつて途みちを行く人と共に、抜目なく足を運ばす事を忘れた。しかも彼は根の締しまらない人間として、かく漂浪ひょうろうの雛形ひながたを演じつつある自分の心を省かえりみて、もしこの状態が長く続いたらどうしたらよからうと、ひそかに自分の未来を案じ煩わづらつた。今日までの経過から推おして、すべての創口きずぐちを癒合ゆごうするものは時日であるという格言を、彼は自家の経験から割り出して、深く胸に刻みつけていた。それが一昨日おとといの晩にすっかり崩くずれたのである。

彼は黒い夜の中を歩るきながら、ただどうかしてこの心から逃れ出たいと思つた。その心はいかにも弱くて落ちつかなくつて、不安で不定で、度胸がなさ過ぎて希知けちに見えた。彼は胸を抑えおさつける一種の圧迫もとの下に、いかにせば、今の自分を救う事ができるかという實際の方法のみを考えて、その圧迫の原因になつた自分の罪や過失は全くこの結果から切り放してしまつた。その時の彼は他ひとの事を考える余裕よゆうを失つて、ことごとく自己本位になつていた。今までは忍耐で世を渡つて来た。これからは積極的に人世觀を作り易かえなければならなかつた。そうしてその人世觀は口で述べるもの、頭で聞くものでは駄目であつた。心の実質が太くなるものでなくては駄目であつた。

彼は行く行く口の中で何遍も宗教の二字を繰り返した。けれどもその響は繰り返す後あとからすぐ消えて行つた。攫つかんだと思う

煙が、手を開けるといつの間にか無くなっているように、宗教とははかない文字であつた。

宗教と関聯かんれんして宗助は坐禪ざぜんという記憶を呼び起した。昔し京都にいた時分彼の級友に相国寺しょうこくじへ行つて坐禪をするものがあつた。当時彼はその迂濶うかつを笑つていた。「今の世に……」と思つていた。その級友の動作が別に自分と違つたところもないようなのを見て、彼はますます馬鹿馬鹿しい氣を起した。

彼は今更ながら彼の級友が、彼の侮蔑ぶべつに値あたする以上のある動機から、貴重な時間を惜しまずに、相国寺へ行つたのではなからうかと考え出して、自分の輕薄を深く恥じた。もし昔から世俗で云う通り安心あんじんとか立命りつめいとかいう境地に、坐禪の力で達する事ができるならば、十日とおかや二十日役所はつかを休んでも構わないからやつて見たいと思つた。けれども彼はこの道にかけては全くの

門外漢であつた。したがつて、これより以上明瞭な考も浮ばなかつた。

ようやく家へ辿り着いた時、彼は例のような御米と、例のような小六と、それから例のような茶の間と座敷と洋灯と筆筒を見て、自分だけが例にない状態の下に、この四五時間を暮していたのだという自覚を深くした。火鉢には小さな鍋が掛けてあつて、その蓋の隙間から湯気が立っていた。火鉢の傍には彼の常に坐る所に、いつもの座蒲団を敷いて、その前にちゃんと膳立がしてあつた。

宗助は糸底を上にしてわざと伏せた自分の茶碗と、この二三年來朝晩使い慣れた木の箸を眺めて、

「もう飯は食わないよ」と云つた。御米は多少不本意らしい風もした。

「おやそう。余り遅いから、おおかたどこかで召上めしやがつたろうとは思つたけれど、もしまだだといけないから」と云いながら、布巾ふきんで鍋なべの耳みみを撮つまんで、土瓶敷どびんしきの上におろした。それから清きよを呼んで膳ぜんを台所へ退さげさせた。

宗助はこういう風に、何ぞ事故ができて、役所の退出ひけからすぐ外へ回つて遅くなる場合には、いつでもその顛末てんまつの大略を、帰宅早々御米に話すのを例にしていた。御米もそれを聞かないうちは気がすまなかつた。けれども今夜に限つて彼は神田で電車を降りた事も、牛肉屋へ上つた事も、無理に酒を呑のんだ事も、まるで話したくなかつた。何も知らない御米はまた平常の通り無邪氣にそれからそれへと聞きたがつた。

「何別にこれという理由わけもなかつただけけれども、——ついあすこいらで牛ぎゅうが食くいたくなつただけの事さ」

「そうして御腹おなかを消化こなすために、わざわざここまで歩るいていらしつたの」

「まあ、そうだ」

御米はおかしそうに笑った。宗助はむしろ苦しかった。しばらくして、

「留守に坂井さんから迎いに来なかつたかい」と聞いた。

「いいえ、なぜ」

「一昨日おとといの晩行つたとき、御馳走ごちそうするとか云つていたからさ」

「また？」

御米は少し呆あきれた顔をした。宗助はそれなり話を切り上げて寝た。頭の中をざわざわ何か通つた。時々眼を開けて見ると、例のごとく洋灯ランプが暗くして床の間の上に載のせてあつた。御米はさも心地好きそうに眠つていた。ついこの間までは、自分の方

が好く寝られて、御米は幾晩も睡眠の不足に悩まされたのであつた。宗助は眼を閉じながら、明らかに次の間の時計の音を聞かなければならない今の自分をさらに心苦しく感じた。その時計は最初は幾つも続けざまに打った。それが過ぎると、びんとただ一つ鳴った。その濁った音が彗星の尾のようにほうと宗助の^{みみたぶ}耳朵にしばらく響いていた。次には二つ鳴った。はなはだ^{さみ}淋しい音であつた。宗助はその間に、何とかして、もつと^{おうよう}鷹揚に生きて行く分別をしなければならぬと云う決心だけをした。三時は^{もうろう}朦朧として聞えたような聞えないよううちに過ぎた。四時、五時、六時はまるで知らなかった。ただ世の中が^{ふく}膨れた。天が波を打って伸びかつ縮んだ。地球が糸で釣^{まり}りした毬のごとくに大きな^{こせん}弧線を描いて空間に^{うご}揺いた。すべてが恐ろしい魔の支配する夢であつた。七時過に彼ははつとして、この夢から^さ覚

めた。御米がいつもの通り微笑して枕元に曲^{かが}んでいた。冴^さえた日は黒い世の中を疾^{とく}にどこかへ追いやつていた。

十八

宗助^{そうすけ}は一封の紹介状^{ふところ}を懷^{ふところ}にして山門^{さんもん}を入^いつた。彼はこれを同僚^{どうりょう}の知人^{なにかし}の某^{なにかし}から得^えた。その同僚^{どうりょう}は役所^{やくじょ}の往復^{わうふく}に、電車^{でんしゃ}の中で洋服^{やうふく}の隠袋^{かくし}から菜根譚^{さいこんたん}を出^いして読む男^{おとこ}であつた。こう云^いう方面^{かた}に興味^{きょうみ}のない宗助^{そうすけ}は、固^{もと}より菜根譚^{さいこんたん}の何物^{なにもの}なるかを知らなかつた。ある日^{あるひ}一つ車の腰掛^{こしかけ}に膝^{ひざ}を並^{なら}べて乗^のつた時^{とき}、それは何^{なに}だと聞^きいて見^みた。同僚^{どうりょう}は小形^{こがた}の黄色^{きせう}い表紙^{ひょうし}を宗助^{そうすけ}の前^{まえ}に出^いして、こんな妙^{めう}な本^{ほん}だと答^{こた}えた。宗助^{そうすけ}は重^{おも}ねてどんな事^{こと}が書^かいてあるかと尋^{たず}ねた。その時^{そのとき}同僚^{どうりょう}は、一口^{一口}に説明^{せつめい}のできる格好^{かっこう}な言葉^{ことば}を有^もつて

いなかつたと見えて、まあ禅学の書物だろうというような妙な挨拶をした。宗助は同僚から聞いたこの返事をよく覚えていた。

紹介状を貰う四五日前、彼はこの同僚の傍へ行つて、君は禅学をやるのかと、突然質問を掛けた。同僚は強く緊張した宗助の顔を見てすこぶる驚ろいた様子であつたが、いややらない、ただ慰み半分にあんな書物を読むだけだと、すぐ逃げてしまつた。宗助は多少失望に弛んだ下唇を垂れて自分の席に歸つた。

その日歸りがけに、彼らはまた同じ電車に乗り合わせた。先刻

宗助の様子を、氣の毒に觀察した同僚は、彼の質問の奥に雑談以上のある意味を認めたものと見えて、前よりはもつと親切にその方面の話をして聞かした。しかし自分はいまだかつて参禅という事をした経験がないと自白した。もし詳しい話が聞きたければ、幸い自分の知り合によく鎌倉へ行く男があるから紹介

してやろうと云った。宗助は車の中でその人の名前と番地を手帳に書き留めた。そうして次の日同僚の手紙を持ってわざわざ回り道をして訪問に出かけた。宗助の懐ふところにした書状はその折席上したたで認めて貰ったものであつた。

役所は病氣になつて十日ばかり休む事にした。御米およねの手前もやはり病氣だと取り繕つくろつた。

「少し脳が悪いから、一週間ほど役所を休んで遊あそんで来るよ」と云つた。御米はこの頃の夫の様子のだこかに異状があるらしく思われるので、内心では始終心配しじゅうしていた矢先だから、平生煮え切らない宗助の果斷を喜んだ。けれどもその突然なのにも全く驚ろいた。

「遊びに行くつて、どこへいらつしやるの」と眼を丸くしないばかりに聞いた。

「やつぱり鎌倉辺が好かろうと思つてゐる」と宗助は落ちついて答えた。地味な宗助とハイカラな鎌倉とはほとんど縁の遠いものであつた。突然二つのものを結びつけるのは滑稽こっけいであつた。御米も微笑を禁じ得なかつた。

「まあ御金持ね。私もいつしよに連れてつてちようだい」と云つた。宗助は愛すべき細君こがねのこの冗談じやうだんを味わう余裕を有たなかつた。真面目まじめな顔をして、

「そんな贅沢ぜいたくな所へ行くんじゃないよ。禅寺へ留とめて貰もらつて、一週間か十日、ただ静かに頭を休めて見るだけの事さ。それもはたして好くなるか、ならないか分らないが、空気のいい所へ行くと、頭には大変違みなうと皆云みなうから」と弁解した。

「そりや違いますわ。だから行つていらつしやいとも。今のは本当の冗談よ」

御米は善良な夫に調戲からかつたのを、多少済まないように感じた。

宗助はその翌日あくるひすぐ貰もらつて置いた紹介状を懐ふところにして、新橋から汽車に乗ったのである。

その紹介状の表には釈宜道様しゃくぎどうと書いてあつた。

「この間まで侍者じしやをしていましたが、この頃では塔頭たつちゆうにある古い庵室に手を入れて、そこに住んでいるとか聞きました。どうですか、まあ着いたら尋ねて御覧なさい。庵の名はたしか一窓庵でした」と書いてくれる時、わざわざ注意があつたので、宗助は礼を云つて手紙を受取りながら、侍者じしやだの塔頭たつちゆうだのという自分には全く耳新しい言葉の説明を聞いて帰つたのである。

山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空を遮さへぎつてゐるために、路が急に暗くなつた。その陰気な空氣に触れた時、宗助は世の中と寺の中との区別を急に覺さとつた。静かな境内けいだいの入

口に立つた彼は、始めて風邪を意識する場合に似た一種の惡寒を催した。

彼はまず真直に歩るき出した。左右にも行手にも、堂のようなものや、院のようなものがちよいちよい見えた。けれども人の出入はいっさいなかった。ことごとく寂寞として錆び果てていた。宗助はどこへ行つて、宜道のいる所を教えて貰おうかと考えながら、誰も通らない路の真中に立つて四方を見回した。

山の裾を切り開いて、一二丁奥へ上るように建てた寺だと思えて、後の方は樹の色で高く塞がっていた。路の左右も山続か丘続の地勢に制せられて、けっして平ではないようであつた。その小高い所々に、下から石段を疊んで、寺らしい門を高く構えたのが二三軒目に着いた。平地に垣を繞らして、点在しているのは、幾多もあつた。近寄つて見ると、いずれも門瓦の下に、

院号やら庵号やらが額にしてかけてあつた。

宗助は箔はくの剥はげた古い額を一二枚読んで歩いたが、ふと一窓庵から先へ探さがし出して、もしそこに手紙の名宛なあての坊さんがいなかったら、もつと奥へ行つて尋ねる方が便利だろうと思いついた。それから逆戻りをして塔頭を一々調べにかかると、一窓庵は山門を這はい入るや否やすぐ右手の方の高い石段の上にあつた。おかはずおかはず丘外ひあたりれなので、日当の好い、からりとした玄関先を控えて、後うしろの山ふところの懷ふところに暖まつているような位置に冬を凌しのぐ気色けしきに見えた。宗助は玄関を通り越して庫裡くらりの方から土間に足を入れた。上り口の障子しょうじの立てである所まで来て、たのむたのむと二三度呼んで見た。しかし誰も出て来てくれるものはなかった。宗助はしばらくそこに立つたまま、中の様子を窺うかがつていた。いつまで立おとさつていても音沙汰がないので、宗助は不思議な思いをして、また

庫裡を出て門の方へ引返した。すると石段の下から剃立そりたての頭を青く光らした坊さんが上つて来た。年はまだ二十四五としか見えなない若い色白の顔であつた。宗助は門の扉の所に待ち合はして、

「宜道さんとおつしやる方はこちらにおいででしょうか」と聞いた。

「私が宜道です」と若い僧は答えた。宗助は少し驚ろいたが、また嬉うれしくもあつた。すぐ懷中から例の紹介状を出して渡すと、宜道は立ちながら封を切つて、その場で読み下くだした。やがて手紙を巻き返して封筒へ入れると、

「ようこそ」と云つて、町ていねいに会えしやく釈したなり、先に立つて宗助を導いた。二人は庫裡に下駄げたを脱いで、障子を開けて内へ這入つた。そこには大きな囲い炉ろ裏が切つてあつた。宜道は鼠木綿ねずみめんの上

に羽織はおつていた薄い粗末ころもな法衣を脱いで釘くぎにかけて、

「御寒うございました」と云つて、囲炉裏の中に深く埋いけてあつた炭を灰の下から掘り出した。

この僧は若いに似合わずはなはだ落ちついた話振はなしぶりをする男であつた。低い声で何か受答えをした後あとで、にやりと笑う具合などは、まるで女のような感じを宗助に与えた。宗助は心のうちに、この青年がどういう機縁もとの元に、思い切つて頭を剃そつたものだろうかと思つて、その様子のしとやかなところを、何となく憐あわれに思つた。

「大変御静なようですが、今日はどなたも御留守なんですか」

「いえ、今日に限らず、いつも私一人です。だから用のあるときは構わず明け放しにして出ます。今もちよつと下まで行つて用を足して参りました。それがためせつかくおいでのところを

失礼致しました」

宜道はこの時改めて遠来の人に対して自分の不在を詫^わびた。この大きな庵を、たった一人で預かつているさえ、相応に骨が折れるのに、その上に厄^{やっかい}介が増したらさぞ迷惑だろうと、宗助は少し気の毒な色をほかに動かした。すると宜道は、

「いえ、ちつとも御遠慮には及びません。道のためでございますから」とゆかしい事を云った。そうして、目下自分の所に、宗助のほかにも、まだ一人世話になつてゐる居士^{こじ}のある旨^{むね}を告げた。

この居士は山へ来てもう二年になるとかいう話であつた。宗助はそれから二三日して、始めてこの居士を見たが、彼は剽^{ひようきん}軽な羅^{らかん}漢のような顔をしている気楽そうな男であつた。細い大根^{だいこ}を三四本ぶら下げて、今日は御馳^{ごちそう}走を買つて来たと云つて、それを宜道に煮てもらつて食つた。宜道も宗助もその相伴^{しやうばん}をした。

この居士は顔が坊さんらしいので、時々僧堂の衆に交つて、村の御齋おとしきなどに出かける事があるとか云つて宜道が笑つていた。

そのほか俗人で山へ修業に来てゐる人の話もいろいろ聞いた。中に筆墨ふですみを商あきなう男がいた。背中へ荷をいっぱい負しょつて、二十日はつかなり三十日なり、そこら中回つて歩いて、ほぼ売り尽してしまふと山へ歸つて来て坐禅をする。それからしばらくして食うものがなくなると、また筆墨を背に載のせて行商に出る。彼はこの両面の生活を、ほとんど循環じゆんかん小数しょうすうのごとく繰り返して、飽あく事を知らないのだと云う。

宗助は一見いっけんこだわりの無さそうなこれらの人の月日と、自分の内面にある今の生活とを比べて、その懸隔けんかくの甚はなはだしいのに驚ろいた。そんな氣樂な身分だから坐禅ざぜんができるのか、あるいは坐禅をした結果そういう氣樂な心になれるのか迷つた。

「氣樂ではいけません。道樂にできるものなら、二十年も三十年も雲水うんすいをして苦しむものはありません」と宜道は云った。

彼は坐禅をするときの一般の心得や、老師ろうしから公案こうあんの出る事や、その公案に一生懸命かじ噉りついて、朝も晩も昼も夜も噉りつづけに噉らなくてはいいけない事やら、すべて今の宗助には心元なく見える助言じょごんを与えた末、

「御室おへやへ御案内しましょう」と云つて立ち上がった。

囲炉裏いろりの切つてある所を出て、本堂を横に抜けて、その外れはずにある六畳の座敷の障子しょうじを縁から開けて、中へ案内された時、宗助は始めて一人遠くに来た心持がした。けれども頭の中は、周囲の幽静な趣おもむきと反照はんしょうするためか、かえつて町にいるときよりも動揺した。

約一時間もしたと思う頃宜道の足音がまた本堂の方から響い

た。

「老師ろうしが相見しょうけんになるそうでございますから、御都合よろが宜よろしければ参りましょう」と云つて、丁寧ていねいに敷居ひきの上に膝ひざを突いた。

二人はまた寺を空からにして連立はすいけつて出た。山門の通りをほぼ一丁ほど奥へ来ると、左側に蓮池はすいけがあつた。寒い時分だから池の中はただ薄濁よどりに淀よどんでいるだけで、少しも清浄しょうじょうな趣おもむきはなかつたが、向側むこうがわに見える高い石の崖外がけはずれまで、縁らんかんに欄干らんかんのある座敷が突き出しているところが、文人画ぶんじんがにでもありそうな風致を添えた。

「あすこが老師の住んでいられる所です」と宜道は比較的新らしいその建物ゆびきを指した。

二人は蓮池の前を通り越して、五六級の石段のぼを上つて、その正面にある大きな伽藍がらんの屋根あおを仰あおいだまま直左すぐりへ切れた。玄

関へ差しかかった時、宜道は

「ちよつと失礼します」と云つて、自分だけ裏口の方へ回つたが、やがて奥から出て来て、

「さあどうぞ」と案内をして、老師のいる所へ伴れて行つた。

老師というのは五十格好がっこうに見えた。赭黒あかぐろい光沢つやのある顔をし

ていた。その皮膚も筋肉もことごとく緊しまつて、どこにも怠おこたりな

いところが、銅像のもたらす印象を、宗助の胸に彫りつけた。

ただ唇くちびるがあまり厚過ぎるので、そこに幾分の弛ゆるみが見えた。そ

の代り彼の眼には、普通の人間にとうてい見るべからざる一種

の精彩せいさいが閃ひらめいた。宗助が始めてその視線に接した時は、暗中

に卒然として白刃を見る思があつた。

「まあ何から入つても同じであるが」と老師は宗助に向つて云つ

た。「父母ふぼ未生みしょう以前いぜん本来ほんらいの面目めんもくは何なんだか、それを一つ考えて見た

ら善よかろう」

宗助には父母未生以前という意味がよく分らなかったが、何しろ自分と云うものは必竟ひつきよう何物だか、その本体を捕つかまえて見ろと云う意味だろうと判断した。それより以上口を利きくには、余り禅というものの知識に乏しかったので、黙ってまた宜道に伴れられて一窓庵へ帰って来た。

晩食ばんめしの時宜道は宗助に、入室にゅうしつの時間の朝夕ちようせき二回あることと、提唱ていしょうの時間が午前である事などを話した上、

「今夜はまだ見解けんげもできないかも知れませんか、明朝みょうちようか明晩御誘い申しましょう」と親切に云ってくれた。それから最初のうちは、つめて坐すわるのは難儀だから線香を立てて、それで時間を計って、少しずつ休んだら好かろうと云うような注意もしてくれた。

宗助は線香を持つて、本堂の前を通つて自分の室へやときまつた六畳に這入はいつて、ぼんやりして坐つた。彼から云うといわゆる公案こうあんなるものの性質が、いかにも自分の現在と縁の遠いような気がしてならなかつた。自分は今腹痛で悩んでいる。その腹痛と言う訴うったえを抱いだいて来て見ると、あにはからんや、その対症療法として、むずかしい数学の問題を出して、まあこれでも考えたらよかろうと云われたと一般であつた。考えろと云われれば、考えないでもないが、それは一応腹痛が治まつてからの事でなくは無理であつた。

同時に彼は勤つとめを休んで、わざわざここまで来た男であつた。紹介状を書いてくれた人、万事に氣をつけてくれる宜道に対しても、あまりに軽卒ふるまいな振舞はできなかつた。彼はまず現在の自分ひつが許す限りの勇氣を提ひさげて、公案に向おうと決心した。そ

れがいずれのところに彼を導びいて、どんな結果を彼の心に持ち来^{きた}すかは、彼自身といえども全く知らなかった。彼は悟^{さとり}という美名に欺^{あざむ}かれて、彼の平生に似合わぬ冒険を試みようとして企てたのである。そうして、もしこの冒険に成功すれば、今の不安な不定な弱々しい自分を救う事ができはしまいかと、はかない望を抱いたのである。

彼は冷たい火鉢^{ひばち}の灰の中に細い線香を燻^{くゆ}らして、教えられた通り座蒲団^{ざぶとん}の上に半跏^{はんか}を組んだ。昼のうちはさまでとは思わなかった室^{へや}が、日が落ちてから急に寒くなった。彼は坐りながら、背中のぞくぞくするほど温度の低い空氣に堪^たえなかった。

彼は考えた。けれども考える方向も、考える問題の實質も、ほとんど捕^{つか}まえようのない空漠^{くうばく}なものであった。彼は考えながら、自分は非常に迂濶^{うかつ}な真似^{まね}をしているのではなからうかと疑^{うたが}った。

火事見舞に行く間際まぎわに、細かい地図を出して、仔細しさいに町名や番地を調べているよりも、ずっと飛び離れた見当違しよさの所作を演じているごとく感じた。

彼の頭の中をいろいろなものが流れた。そのあるものは明らかに眼に見えた。あるものは混沌こんとんとして雲のごとくに動いた。どこから来てどこへ行くとも分らなかった。ただ先のものが消える、すぐ後あとから次のものが現われた。そうして仕切りなしにそれからそれへと続いた。頭の往来を通るものは、無限で無数で無尽蔵で、けっして宗助の命令によつて、留まる事も休む事もなかった。断ち切ろうと思えば思うほど、滾々こんこんとして湧わいて出た。

宗助は怖こわくなつて、急に日常の我を呼び起して、室の中を眺ながめた。室は微かすかな灯ひで薄暗く照らされていた。灰の中に立てた

線香は、まだ半分ほどしか燃えていなかった。宗助は恐るべく時間の長いのに始めて気がついた。

宗助はまた考え始めた。すると、すぐ色のあるもの、形のあ
るものが頭の中を通り出した。そろそろと群がる蟻ありのごとくに
動いて行く、あとからまたそろそろと群がる蟻のごとくに現わ
れた。じつとしているのはただ宗助の身体からだだけであつた。心は
切ないほど、苦しいほど、堪えがたいほど動いた。

そのうちじつとしている身体も、膝頭ひざがしらから痛み始めた。真直
に延ばしていた脊髄がしだいしだいに前の方に曲つて来た。宗
助は両手で左の足の甲を抱かかえるようにして下へおろした。彼は
何をする目的めあてもなく室へやの中に立ち上がった。障子しょうじを明けて表へ
出て、門前をぐるぐる駈かけ回まわつて歩きたくなつた。夜はしんと
していた。寝ている人も起きている人もどこにもおりそうには

思えなかつた。宗助は外へ出る勇氣を失つた。じつと生きながら妄想もうぞうに苦しめられるのはなお恐ろしかった。

彼は思い切つてまた新しい線香を立てた。そうしてまたほぼ前ぜんと同じ過程を繰り返した。最後に、もし考えるのが目的だとすれば、坐つて考えるのも寝て考えるのも同じだろうと分別した。彼は室の隅すみに畳んであつた薄汚ない蒲団ふとんを敷いて、その中に潜もぐり込んだ。すると先刻さつぎからの疲れで、何を考える暇もないうちに、深い眠りに落ちてしまつた。

眼が覚めると枕元の障子がいつの間にか明るくなつて、白い紙にやがて日の逼せまるべき色が動いた。昼も留守るすを置かずに済む山寺は、夜に入つても戸かどを閉たてる音を聞かなかつたのである。宗助は自分が坂井の崖下がけしたの暗い部屋に寝ていたのでない意識するや否いなや、すぐ起き上がった。縁へ出ると、軒端のきばに高く大霸王樹おおさばてんの

影が眼に映った。宗助はまた本堂の仏壇の前を抜けて、囲炉裏の切つてある昨日きのうの茶の間へ出た。そこには昨日の通り宜道の法衣おりくぎが折釘にかけてあつた。そうして本人は勝手の竈かまどの前に蹲踞うずくまつて、火を焚たいていた。宗助を見て、

「御早う」と慇懃いんぎんに礼をした。「先刻さつき御誘い申そうと思ひましたが、よく御寝おやすみのようでしたから、失礼して一人参りました」

宗助はこの若い僧が、今朝夜明がたにすでに参禅を済まして、それから帰つて来て、飯を炊かしいでいるのだという事を知つた。

見ると彼は左の手でしきりに薪まきを差し易かえながら、右の手に

黒い表紙の本を持つて、用の合間合間にそれを読んでゐる様子であつた。宗助は宜道に書物の名を尋ねた。それは碧巖集へきがんしゅうというむずかしい名前のものであつた。宗助は腹の中で、昨夕ゆうべのようあてどに当途もない考かんがえに耽ふけつて脳を疲らすより、いつそその道の書

物でも借りて読む方が、要領を得る捷徑ちかみちではなからうかと思いついた。宜道にそう云うと、宜道は一も二もなく宗助の考を排斥した。

「書物を読むのはごく悪うございます。有体ありていに云うと、読書ほど修業さまたげの妨になるものは無いようです。私共でも、こうして碧巖などを読みますが、自分の程度以上のところになると、まるで見当けんとうがつきません。それを好加減いいかげんに揣摩しまする癖がつくと、それが坐る時の妨になって、自分以上の境界きょうがいを予期して見たり、悟を待ち受けて見たり、充分突込んで行くべきところに頓挫とんざができます。大変毒になりますから、御止しになった方がよいでしょう。もし強しいて何か御読みになりたければ、禪関策進ぜんかんさくしんというような、人の勇気を鼓舞こぶしたり激励したりするものが宜よろしゅうございましょう。それだって、ただ刺戟しげきの方便として読むだ

けで、道その物とは無関係です」

宗助には宜道の意味がよく解らなかつた。彼はこの生なま若い青い頭をした坊さんの前に立つて、あたかも一個の低能児であるかのごとき心持を起した。彼の慢心は京都以来すでに銷磨しょうまし尽していた。彼は平凡を分として、今日こんにちまで生きて来た。聞達ぶんたつほど彼の心に遠いものはなかつた。彼はただありのままの彼として、宜道の前に立つたのである。しかも平生の自分より遙はるかに無力無能な赤子あかごであると、さらに自分を認めざるを得なくなつた。彼に取つては新らしい発見であつた。同時に自尊心を根絶するほどの発見であつた。

宜道が竈へっついの火を消して飯をむらしている間に、宗助は台所から下りて庭の井戸端いどばたへ出て顔を洗つた。鼻の先にはすぐ雑木山ぞうきやまが見えた。その裾すその少し平な所たいらを拓ひらいて、菜園こしらが拵こしらえてあつた。

宗助は濡れた頭を冷たい空氣に曝して、わざと菜園まで下りて行つた。そうして、そこに崖を横に掘つた大きな穴を見出した。宗助はしばらくその前に立つて、暗い奥の方を眺めていた。やがて、茶の間へ帰ると、囲炉裏には暖かい火が起つて、鉄瓶に湯の沸る音が聞えた。

「手がないものだから、つい遅くなりましたして御氣の毒です。すぐ御膳に致しましょう。しかしこんな所だから上げるものがなくって困ります。その代り明日あたりは御馳走に風呂でも立てましょう」と宜道が云つてくれた。宗助はありがたく囲炉裏の向に坐つた。

やがて食事を了えて、わが室へ帰つた宗助は、また父母未生以前と云う稀有な問題を眼の前に据えて、じつと眺めた。けれども、もともと筋の立たない、したがって発展のしようのない問

題だから、いくら考えてもどこからも手を出す事はできなかった。そうして、すぐ考えるのが厭いやになった。宗助はふと御米にここへ着いた消息を書かなければならない事に気がついた。彼は俗用の生じたのを喜ぶごとくに、すぐ鞆かばんの中から巻紙と封じ袋を取り出して、御米にやる手紙を書き始めた。まずこの閑静な事、海に近いせいか、東京よりはよほど暖かい事、空氣の清朗な事、紹介された坊さんの親切な事、食事の不味まずい事、夜具蒲団やぐふとんの綺麗きれいに行かない事、などを書き連ねているうちに、はや三尺余りの長さになったので、そこで筆を擱おいたが、公案に苦しめられている事や、坐禅をして膝ひざの関節を痛くしている事や、考えるためにますます神経衰弱が劇はげしくなりそうな事は、噫おくびにも出さなかった。彼はこの手紙に切手を貼はつて、ポストに入れないければならない口実を求めて、早速山を下った。そうし

て父母未生以前と、御米と、安井に、脅おびやかされながら、村の中をうろついて帰った。

午ひるには、宜道から話のあつた居士こじに会つた。この居士は茶碗を出して、宜道に飯よそを盛もつて貰もらうとき、憚はばかり様とも何とも云わずに、ただ合掌がつしようして礼を述べたり、相図さうずをしたりした。このくらい静かに物事を為するのが法だとか云つた。口を利きかず、音を立てないのは、考えの邪魔になると云う精神からだそうであつた。それほど真剣にやるべきものと、宗助は昨夜からの自分が、何となく恥はずかしく思われた。

食後三人は囲炉裏はたの傍はたでしばらく話した。その時居士は、自分が坐禅をしながら、いつか気がつかずにうとうと眠まつてしまつていて、はつと正氣に帰る間際まぎわに、おや悟つたなと喜ぶことがあるが、さていよいよ眼あを開いて見ると、やつぱり元の通

の自分なので失望するばかりだと云つて、宗助を笑わした。こ
う云う気楽な考で、参禅している人もあると思うと、宗助も多
少は寛ろいだ。けれども三人が分れ分れに自分の室へやに入る時、
宜道が、

「今夜は御誘い申しますから、これから夕方までしつかり御坐
りなさいまし」と真面目まじめに勧めたとき、宗助はまた一種の責任
を感じた。消化こなれない堅い団子が胃に滞とどおっているような不安
な胸を抱いだいて、わが室へ歸つて来た。そうしてまた線香を焚たい
て坐わり出した。その癖くせ夕方までは坐り続けられなかつた。ど
んな解答にしろ一つ拵こしらえておかねばならないと思ひなが
らも、しまいには根氣が尽きて、早く宜道が夕食ゆうめしの報知しらせに本堂
を通り抜けて来てくれれば好いと、そればかり氣にかかつた。

日は懊惱おうれうと困憊こんぱいの裡うちに傾むいた。障子しょうじに映る時の影がしだい

に遠くへ立ち退くにつれて、寺の空氣が床の下から冷え出した。風は朝から枝を吹かなかった。縁側に出て、高い底を仰ぐと、黒い瓦の小口だけが揃つて、長く一列に見える外に、穏かな空が、蒼い光をわが底の方に沈めつつ、自分と薄くなつて行くところであつた。

十九

「危険うございます」と云つて宜道は一足先へ暗い石段を下りた。宗助はあとから続いた。町と違つて夜になると足元が悪いので、宜道は提灯を点けてわずか一丁ばかりの路を照らした。石段を下り切ると、大きな樹の枝が左右から二人の頭に蔽い被さるやうに空を遮つた。闇だけれども蒼い葉の色が二人の着物

の織目に染み込むほどに宗助を寒がらせた。提灯の灯ひにもその色が多少映る感じがあつた。その提灯は一方に大きな樹の幹を想像するせいか、はなはだ小さく見えた。光の地面に届く尺数もわずかであつた。照らされた部分は明るい灰色の断片となつて暗い中にほつきり落ちた。そうして二人の影が動くに伴つれて動いた。

蓮池れんちを行き過ぎて、左へ上のぼる所は、夜はじめての宗助に取つて、少し足元が滑なめらかに行かなかつた。土の中に根を食っている石に、一二度下駄げたの台を引つ掛けた。蓮池の手前から横に切れる裏路もあるが、この方は凸凹とつおが多くて、慣なれない宗助には近くても不便だろうと云うので、宜道はわざわざ広い方を案内したのである。

玄関を入ると、暗い土間に下駄がだいぶ並んでいた。宗助は

曲こんで、人の履物はきものを踏まないようにそつと上へのぼつた。室へやは八畳ほどの広さであつた。その壁際かべぎわに列を作つて、六七人の男が一側ひとかわに並んでいた。中に頭を光らして、黒い法衣ころもを着た僧も交つていた。他のものは大概袴はかまを穿はいていた。この六七人の男は上り口あがぐちと奥へ通ずる三尺の廊下口ろうかを残して、行儀よく鉤かぎの手てに並んでいた。そうして、一言ひとことも口を利きかなかつた。宗助はこれらの人の顔を一目見て、まずその峻刻しゅんこくなのに氣を奪うばわれた。彼らは皆固く口を結んでいた。事ありげな眉まゆを強く寄せていた。傍そばにどんな人がいるか見向きもしなかつた。いかなるものが外から入つて来ても、全く注意しなかつた。彼らは活きた彫刻のように己おのれを持して、火の氣のない室へやに肅然しゆくぜんと坐つていた。宗助の感覚には、山寺の寒さ以上に、一種嚴おごそかな氣が加わつた。やがて寂寞せきばくの中うちに、人の足音が聞えた。初はつは微かすかに響いたが、

しだいに強く床を踏んで、宗助の坐っている方へ近づいて来た。しまいに一人の僧が廊下口からぬつと現れた。そうして宗助の傍を通つて、黙つて外の暗がりへ抜けて行つた。すると遠くの奥の方で鈴を振る音がした。

この時宗助と並んで嚴肅に控えていた男のうちで、小倉の袴を着けた一人が、やはり無言のまま立ち上がつて、室の隅の廊下口の真正面へ来て着座した。そこには高さ二尺幅一尺ほどの木の枠の中に、銅鑼のような形をした、銅鑼よりも、ずっと重くて厚そうなものがかかつていた。色は蒼黒く貧しい灯に照らされていた。袴を着けた男は、台の上にある撞木を取り上げて、銅鑼に似た鐘の真中を二つほど打ち鳴らした。そうして、ついと立つて、廊下口を出て、奥の方へ進んで行つた。今度は前と反対に、足音がだんだん遠くの方へ去るに従つて、微かになつ

た。そうして一番しまいにぴたりとどこかで留まつた。宗助は坐^いながら、はつとした。彼はこの袴を着けた男の身の上に、今何事が起りつつあるだろうかを想像したのである。けれども奥はしんとして静まり返っていた。宗助と並んでいるものも、一人として顔の筋肉を動かすものはなかった。ただ宗助は心の中で、奥からの何物かを待ち受けた。すると忽然^{こつぜん}として鈴を振る響が彼の耳に応^{こた}えた。同時に長い廊下を踏んで、こちらへ近く足音がした。袴を着けた男はまた廊下口から現われて、無言のまま玄関を下りて、霜^{しも}の裡^{うち}に消え去った。入れ代つてまた新しい男が立つて、最前の鐘を打った。そうして、また廊下を踏み鳴らして奥の方へ行つた。宗助は沈黙の間に行われるこの順序を見ながら、膝^{ひざ}に手を載^のせて、自分の番の来るのを待つていた。

自分より一人置いて前の男が立つて行つた時は、ややしばらくしてから、わつと云う大きな声が、奥の方で聞えた。その声は距離が遠いので、劇はげしく宗助の鼓膜を打つほど、強くは響かなかつたけれども、たしかに精一杯せいいつぱい威を振ふるつたものであつた。そうしてただ一人いちにんの咽喉のどから出た個人の特色を帯びていた。自分のすぐ前の人が立つた時は、いよいよわが番が回つて来たと云う意識に制せられて、一層落ちつきを失つた。

宗助はこの間の公案に対して、自分だけの解答は準備していた。けれども、それははなはだ覚束おぼつかない薄手うすでのものに過ぎなかつた。室中しつちゆうに入る以上は、何か見解けんげを呈しない訳に行かないので、やむを得ず納まらないところを、わざと納まつたように取繕とりつくろつた、その場限りの挨拶あいさつであつた。彼はこの心細い解答で、僥倖ぎやうこうにも難関を通過して見たいなどとは、夢にも思い設けなかつ

た。老師をごまかす気は無論なかった。その時の宗助はもう少し真面目であつたのである。単に頭から割り出した、あたかも画にかいた餅のような代物を持って、義理にも室中に入らなければならぬ自分の空虚な事を恥じたのである。

宗助は人のするごとくに鐘を打った。しかも打ちながら、自分分は人並にこの鐘を撞木で敲くべき権能がないのを知つていた。それを人並に鳴らして見る猿のごとき己れを深く嫌忌した。

彼は弱味のある自分に恐れを抱きつつ、入口を出て冷たい廊下へ足を踏み出した。廊下は長く続いた。右側にある室はことごとく暗かった。角を二つ折れ曲ると、向の外れの障子に灯影が差した。宗助はその敷居際へ来て留まつた。

室中に入るものは老師に向つて三拝するのが礼であつた。拝しかたは普通の挨拶のように頭を畳に近く下げると同時に、両

手の掌てのひらを上向うえむきに開いて、それを頭の左右に並べたまま、少し物を抱かかえた心持に耳の辺あたりまで上げるのである。宗助は敷居際ひきぐまに跪ひざまずいて形かたのごとく拝を行なつた。すると座敷の中で、
「一拝いっぱいで宜よろしい」と云う会釈えしやくがあつた。宗助はあとを略して中へ入つた。

室の中はただ薄暗い灯ひに照らされていた。その弱い光は、いかに大字だいじな書物をも披見ひけんせしめぬ程度のものであつた。宗助は今日こんにちまでの経験に訴えて、これくらい微かすかな灯火ともしびに、夜を営なむ人間を憶おもい起す事ができなかつた。その光は無論月よりも強かつた。かつ月のごとく蒼白あおしろい色ではなかつた。けれどももう少しで朦朧もうろうの境さかいに沈むべき性質たちのものであつた。

この静かな判然はつきりしない灯火の力で、宗助は自分を去る四五尺の正面に、宜道のいわゆる老師なるものを認めた。彼の顔は例に

よつて鑄物いもののように動かなかつた。色は銅あかがねであつた。彼は全身に渋しぶに似た柿かきに似た茶に似た色の法衣ころもを纏まとつていた。足も手も見えなかつた。ただ頸くびから上が見えた。その頸くびから上うへが、嚴肅げんしゆくと緊張の極度に安んじて、いつまで経つても変る恐おそれを有せざるごとくに人を魅みした。そうして頭には一本の毛もなかつた。この面前に氣力なく坐すわつた宗助の、口にした言葉はただ一句で尽きた。

「もつと、ぎろりとしたところを持つて来なければ駄目だ」とたちまち云われた。「そのくらいな事は少し学問をしたものなら誰でも云える」

宗助は喪家そうかの犬のごとく室中を退いた。後に鈴れいを振る音が烈はげしく響いた。

障子しょうじの外で野中さん、野中さんと呼ぶ声が二度ほど聞えた。宗助そうすけは半睡はんすいの裡うちにはいと応こたえたつもりであつたが、返事を仕切らない先に、早く知覚を失つて、また正体なく寝入つてしまつた。

二度目に眼が覺さめた時、彼は驚ろいて飛び起きた。縁側えんがわへ出ると、宜道ぎどうが鼠木綿ねずみもめんの着物たすきに襷たすきを掛けて、甲斐かい甲斐がいしくそこいらを拭ぬいていた。赤く凍かじんだ手で、濡雑巾ぬれぞうきんを絞しぼりながら、例のごとく柔和やさしいにこやかな顔をして、

「御早あいさつう」と挨拶した。彼は今朝もまたとくに参禅を済ました後のち、こうして庵に帰つて働いていたのである。宗助はわざわざ呼び起されても起き得なかつた自分の怠慢かえりを省みて、全くきま

りの悪い思をした。

「今朝もつい寝忘れて失礼しました」

彼はこそそ勝手口から井戸端いどばたの方へ出た。そうして冷たい水を汲くんでできるだけ早く顔を洗った。延びかかった髯ひげが、頬あたりの辺で手を刺すようにざらざらしたが、今の宗助にはそれを苦にするほどの余裕はなかった。彼はしきりに宜道と自分とを対照して考えた。

紹介状を貰うときに東京で聞いたところによると、この宜道という坊さんは、大変性質たちのいい男で、今では修業もだいぶでき上がっていると云う話だったが、会って見ると、まるで一丁字いっぺいじもない小廝こもののように丁寧ていねいであつた。こうして櫛掛たすきがけで働いているところを見ると、どうしても一個の独立した庵あんの主人らしくはなかつた。納所なっしょとも小坊主とも云えた。

この矮小^{わいしょう}な若僧^{じやくそう}は、まだ出家をしない前、ただの俗人としてここへ修業に來た時、七日の間結跏^{けっか}したぎり少しも動かなかつたのである。しまいには足が痛んで腰が立たなくなつて、廁^{かわや}へ上^{のぼ}る折などは、やつとの事壁伝いに身体^{からだ}を運んだのである。その時分の彼は彫刻家であつた。見性^{けんしょう}した日に、嬉^{うれ}しきの余り、裏の山へ馳^かけ上つて、草木国土悉皆成仏と大きな声を出して叫んだ。そうしてついに頭を剃^そつてしまった。

この庵を預かるようになってから、もう二年になるが、まだ本式に床を延べて、樂に足を延ばして寝た事はないと云つた。冬でも着物のまま壁に倚^{もた}れて坐睡^{ざすい}するだけだと云つた。侍者^{じしや}をしいた頃などは、老師の犢鼻^{ふんどし}褌まで洗わせられたと云つた。その上少しの暇を偷^{ぬす}んで坐りでもすると、後^{うしろ}から來て意地の悪い邪魔をされる、毒吐^{どくづ}かれる、頭の剃り立てには何の因果^{いんが}で坊主

になつたかと悔む事が多かつたと云つた。

「ようやくこの頃になつて少し楽になりました。しかしまだ先がございます。修業は實際苦しいものです。そう容易にできるものなら、いくら私共が馬鹿だつて、こうして十年も二十年も苦しむ訳がございませぬ」

宗助はただ惘然^{ぼうぜん}とした。自己の根氣と精力の足らない事をはがゆく思う上に、それほど歳月を掛けなければ成就^{じゅうじゆ}できないものなら、自分は何しにこの山の中までやつて来たか、それからが第一の矛盾であつた。

「けつして損になる氣遣^{きづかい}はございませぬ。十分^{じつぶん}坐れば、十分の功があり、二十分坐れば二十分の徳があるのは無論です。その上最初を一つ奇麗^{きれい}にぶち抜いておけば、あとはこう云う風に始終^{しじゆう}ここにおいでにならないでも済みますから」

宗助は義理にもまた自分の室へ帰つて坐らなければならなかつた。

こんな時に宜道が来て、

「野中さん提唱ていしょうです」と誘つてくれると、宗助は心から嬉しい気がした。彼は禿頭はげあたまを捕まえるような手の着けどころのない難題に悩まされて、坐いながらじつと煩悶はんもんするのを、いかにも切なく思った。どんなに精力を消耗しょうこうする仕事でもいいから、もう少し積極的に身体からだを働らかしたく思った。

提唱のある場所は、やはり一窓庵から一町も隔へだたつていた。蓮池れんち

の前を通り越して、それを左へ曲らずに真直まっすぐに突き当ると、屋根瓦やねがわらを厳いかめしく重ねた高い軒が、松の間に仰あおがれた。宜道は懐ふところに黒い表紙の本を入れていた。宗助は無論手ぶらであつた。提唱ていしょうと云うのが、学校でいう講義の意味である事さえ、ここへ来て始

めて知った。

室は高い天井に比例して広くかつ寒かった。色の変つた畳の色が古い柱と映り合つて、昔を物語るように寂び果てていた。そこに坐っている人々も皆地味に見えた。席次不同に思ひ思ひの座を占めてはいるが、高声に語るもの、笑うものは一人もなかった。僧は皆紺麻の法衣を着て、正面の曲棹の左右に列を作つて向い合せに並んだ。その曲棹は朱で塗つてあつた。

やがて老師が現われた。畳を見つめていた宗助には、彼がどこを通つて、どこからここへ出たかさっぱり分らなかつた。ただ彼の落ちつき払つて曲棹に倚る重々しい姿を見た。一人の若い僧が立ちながら、紫の袈紗を解いて、中から取り出した書物を、恭しく卓上に置くところを見た。またその礼拝して退ごく態を見た。

この時堂上の僧は一齊いつせいに合掌がつしょうして、夢窓国師むそうこくしの遺誠いがいを誦じゆし始めた。思い思いに席を取った宗助の前後にいる居士こじも皆同音どうおんに調子を合せた。聞いていると、経文のような、普通の言葉のような、一種の節を帯びた文字であつた。

「我に三等の弟子あり。いわゆる猛烈にして諸縁しよえんを放下ほうげし、專一こじに己事を究明するこれを上等と名づく。修業純ならず駁雜はくざつ学を好む、これを中等と云う」と云々という、余り長くはないものであつた。宗助は始め夢窓国師むそうこくしの何人なんびとなるかを知らなかつた。宜道だいたうこくしからこの夢窓国師と大燈国師とは、禪門中興ちんぽの祖であると云う事を教わつたのである。平生跛まぎわで充分に足を組む事ができないのを憤いきどおつて、死ぬ間際まぎわに、今日きようこそおれの意のごとくにしけつかて見せると云いながら、悪い方の足を無理に折つぺしよつて、結跏けつかしたため、血が流れて法衣ころもを煮染にじましたという大燈国師の

話もその折宜道おりから聞いた。

やがて提唱が始まった。宜道は懷ふところから例の書物を出して、頁ページを半ばなかず擦すらして宗助の前へ置いた。それは宗門しゅうもん無尽燈論むじんとうろんと云う書物であつた。始めて聞きに出た時、宜道は、

「ありがたい結構な本です」と宗助に教えてくれた。白隠和尚はくいんおしょうの弟子の東嶺和尚とうれいとかいう人の編輯へんしゅうしたもので、重に禅を修行するものが、浅い所から深い所へ進んで行く径路けいりょやら、それに伴なう心境の変化やらを秩序立てて書いたものらしかった。

中途から顔を出した宗助には、よくも解げせなかつたけれども、講者こうじゃは能弁の方で、黙つて聞いているうちに、大変面白いところがあつた。その上参禅さんぜんの士を鼓舞こぶするためか、古来からこの道に苦しんだ人の閱歷えつれき譚だんなどを取り交まぜて、一段の精彩を着けるのが例であつた。この日もその通りであつたが、或所へ来る

と、突然語調を改めて、

「この頃室中に来て、どうも妄想もうぞうが起つていけないなどと訴えるものがあるが」と急に入室者の不熱心を戒しめ出したので、宗助は覚えすぎくりとした。室中に入つて、その訴うったえをなしたものは実に彼自身であつた。

一時間の後宜道と宗助は袖そでをつらねてまた一窓庵に帰つた。その帰り路に宜道は、

「ああして提唱のある時に、よく参禅者の不心得を諷ふうせられます」と云つた。宗助は何も答えなかつた。

二十一

そのうち、山の中の日は、一日一日と経たつた。御米およねからはか

なり長い手紙がもう二本来た。もつとも二本とも新たに宗助そうすけの心を乱すような心配事は書いてなかった。宗助は常の細君思いに似ずついに返事を出すのを怠った。彼は山を出る前に、何とかこの間の問題に片をつけなければ、せつかく来た甲斐かいがないような、また宜道ぎどうに対してすまないような気がしていた。眼が覚さめている時は、これがために名状しがたい一種の圧迫を受けつづけに受けた。したがって日が暮れて夜が明けて、寺で見る太陽の数が重なるにつけて、あたかも後から追いかけられでもするごとく気を焦いった。けれども彼は最初の解決よりほかに、一步もこの問題にちかづく術すべを知らなかった。彼はまたいくら考えてもこの最初の解決は確なものであると信じていた。ただ理窟りくつから割り出したのだから、腹はらの足たしにはいつこうならなかった。彼はこの確なものを放り出して、さらにまた確なものを求

めようとした。けれどもそんなものは少しも出て来なかつた。

彼は自分の室^{へや}で独り^{ひと}考えた。疲れると、台所から下りて、裏の菜園へ出た。そうして崖^{がけ}の下に掘った横穴の中へ這入^{はい}つて、じつと動かずにいた。宜道は気が散るようでは駄目だと云つた。だんだん集注して凝^こり固まつて、しまいに鉄の棒のようにならなくては駄目だと云つた。そう云う事を聞けば聞くほど、実際にそうなるのが、困難になつた。

「すでに頭の中に、そうしようと云う下心があるからいけないのです」と宜道がまた云つて聞かした。宗助はいよいよ窮^{きつ}した。忽然^{こつぜん}安井の事を考え出した。安井がもし坂井の家へ頻繁^{ひんぱん}に出入^{でいり}でもするようになって、当分満洲へ帰らないとすれば、今のうちあの借家^{しゃくや}を引き上げて、どこかへ転宅するのが上分別^{じようぶんべつ}だろう。こんな所にぐずぐずしているより、早く東京へ帰つてその方の

所置をつけた方がまだ實際的かも知れない。緩くり構えて、御米にでも知れるとまた心配が殖えるだけだと思つた。

「私のようなものにはとうてい悟は開かれそうに有りません」と思いつめたように宜道を捕まえて云つた。それは帰る二三日前の事であつた。

「いえ信念さえあれば誰でも悟れます」と宜道は躊躇もなく答えた。「法華の凝り固まりが夢中に太鼓を叩くようにやつて御覽なさい。頭の巔辺から足の爪先までがことごとく公案で充実したとき、俄然として新天地が現前するのでございます」

宗助は自分の境遇やら性質が、それほど盲目的に猛烈な働をあえてするに適しない事を深く悲しんだ。いわんや自分のこの山で暮らすべき日はすでに限られていた。彼は直截に生活の葛藤を切り払うつもりで、かえつて迂濶に山の中へ迷い込んだ愚物

であつた。

彼は腹の中でこう考えながら、宜道の面前で、それだけの事を言い切る力がなかった。彼は心からこの若い禅僧の勇氣と熱心と真面目まじめと親切とに敬意を表していたのである。

「道は近きにあり、かえつてこれを遠きに求むという言葉があるが實際です。つい鼻の先にあるのですけれども、どうしても気がつきません」と宜道はさも残念そうであつた。宗助はまた自分の室へやに退しりぞいて線香を立てた。

こう云う状態は、不幸にして宗助の山を去らなければならぬ日まで、目に立つほどの新生面を開く機会なく続いた。いよいよ出立の朝になって宗助は潔いさぎよく未練を抛なげ棄すてた。

「永々御世話になりました。残念ですが、どうも仕方がありません。もう当分御眼にかかる折もございますまいから、随分御機嫌ごきげん

よう」と宜道に挨拶あいさつをした。宜道は氣の毒そうであつた。

「御世話どころか、万事不行届でさぞ御窮屈でございましたろう。しかしこれほど御坐りになつてもだいぶ違います。わざわざおいでになつただけの事は充分ございます」と云つた。しかし宗助にはまるで時間を潰つぶしに來たような自覺が明らかにあつた。それをこう取り繕つくろつて云つて貰もらうのも、自分の腑ふ甲斐がいなさからであると、独ひとり恥じ入つた。

「悟の遲速は全く人の性質たちで、それだけでは優劣にはなりません。入りやすくても後あとで塞つかえて動かない人もありますし、また初め長く掛かつて、いよいよと云う場合に非常に痛快にできるものもあります。けつして失望なざる事はございません。ただ熱心が大切です。亡なくなられた洪川和尚こうせんおしょうなどは、もと儒教をやられて、中年からの修業でございましたが、僧になつてから三

年の間と云うものまるで一則も通らなかつたです。それで私は業が深くて悟れないのだと云つて、毎朝廁に向つて礼拝されたくらいでありましたが、後にはあのような知識になりました。これなどはもつとも好い例です」

宜道はこんな話をして、暗に宗助が東京へ歸つてからも、全くこの方を断念しないようにあらかじめ間接の注意を与えるように見えた。宗助は謹んで、宜道のいう事に耳を借した。けれども腹の中では大事がもうすでに半分去つたごとくに感じた。自分は門を開けて貰ひに来た。けれども門番は扉の向側にいて、むこうがわ 敲いてもついに顔さえ出してくれなかつた。ただ、

「敲いても駄目だ。独りで開けて入れ」と云う声が聞えただけであつた。彼はどうしたらこの門の門を開ける事ができるかを考えた。そうしてその手段と方法を明らかに頭の中で拵えた。

けれどもそれを實地に開ける力は、少しも養成する事ができなかった。したがって自分の立つてゐる場所は、この問題を考へない昔と毫も異なるところがなかった。彼は依然として無能無力に鎖ざされた扉の前に取り残された。彼は平生自分の分別を便たよりに生きて來た。その分別が今は彼に崇たたつたのを口惜くちおしく思つた。そうして始から取捨も商量も容れない愚なものの一徹一図を羨うらやんだ。もしくは信念に篤あつい善男善女の、智慧も忘れ思議も浮ばぬ精進しょうじんの程度を崇高と仰いだ。彼自身は長く門外に佇立たたずむべき運命をもつて生れて來たものらしかった。それは是非もなかった。けれども、どうせ通れない門なら、わざわざそこまで辿たどりつくのが矛盾であつた。彼は後うしろを顧かえりみた。そうしてとうていまた元の路へ引き返す勇氣を有もたなかつた。彼は前を眺ながめた。前には堅固な扉がいつまでも展望を遮さえぎつていた。彼は門を通る

人ではなかつた。また門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦すくんで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。

宗助は立つ前に、宜道と連れだつて、老師の許もとへちよつと暇乞いとまぎに行つた。老師は二人を蓮池れんちの上の、縁に勾欄こうらんの着いた座敷に通した。宜道は自ら次みずかの間に立つて、茶を入れて出た。

「東京はまだ寒いでしょう」と老師が云つた。「少しでも手がかりができてからだ」と、歸つたあとも楽だけれども。惜しい事で」宗助は老師のこの挨拶あいさつに対して、丁寧ていねいに礼を述べて、また十日前に潜くぐつた山門を出た。薨いらかを圧する杉の色が、冬を封じて黒く彼の後うしろに聳そびえた。

家の敷居を跨またいだ宗助そうすけは、己おのれにさえ憫然びんぜんな姿を描えがいた。彼は過去十日間毎朝頭を冷水れいすいで濡ぬらしたなり、いまだかつて櫛くしの齒を通した事がなかった。髭ひげは固もとより剃そる暇いとまを有もたなかった。三度とも宜道ぎどうの好意で白米の炊かしいだのを食べたには食べたが、副食物と云つては、菜の煮たのか、大根の煮たのぐらいなものであつた。彼の顔は自おのずから蒼あおかった。出る前よりも多少面窶おもやつれていた。その上彼は一窓庵で考えつづけに考えた習慣がまだ全く抜け切らなかつた。どこかに卵を抱いだく牝鷄めんどりのような心持が残つて、頭が平生の通り自由に働らかなかつた。その癖くせ一方では坂井の事が氣にかかつた。坂井と云うよりも、坂井のいわゆる冒險者アドヴェンチュアラ―として宗助の耳に響いたその弟おととと、その弟の友達として彼の胸を騒がした安井の消息が氣にかかつた。けれども彼は自身に家

主の宅へ出向いて、それを聞き糺す勇氣を有たなかつた。間接にそれを御米およねに問うことはなおできなかつた。彼は山にいる間さえ、御米がこの事件について何事も耳にしてくれなければいいがと氣遣きづかわない日はなかつたくらいである。宗助は年来住み慣れた家の座敷に坐つて、

「汽車に乗ると短かい道中でも氣のせいか疲れるね。留守中に別段變つた事はなかつたかい」と聞いた。實際彼は短かい汽車旅行にさえ堪たえかねる顔つきをしていた。

御米はいかな場合にも夫の前に忘れなかつた笑顔さえ作り得なかつた。と云つて、せっかく保養に行つた転地先から今歸つて来たばかりの夫に、行かない前よりかえつて健康が悪くなつたらしいとは、氣の毒で露骨に話し悪にくかつた。わざと活潑かつぱつに、「いくら保養でも、家うちへ歸ると、少しは氣疲きづかれが出るものよ。け

れどもあなたは余あんまり爺じじ々汚むさいわ。後生ごしょうだから一休ひとやすみしたら御湯に行つて頭を刈ひげつて髭すを剃すつて来てちようだい」と云いながら、わざわざ机の引出から小さな鏡を出して見せた。

宗助は御米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空気を風で払つたような心持がした。一たび山を出て家へ帰ればやはり元の宗助であつた。

「坂井さんからはその後何とも云つて来ないかい」

「いいえ何とも」

「小六ころうくの事も」

「いいえ」

その小六は図書館へ行つて留守だつた。宗助は手拭てぬぐいと石鹼シャボンを持つて外へ出た。

明る日役所へ出ると、みんなから病氣はどうだと聞かれた。

中には少し瘠やせたようですねと云うものもあつた。宗助にはそれが無意識の冷評の意味に聞えた。菜根譚さいこんたんを読む男はただどうです旨うまく行きましたかと尋ねた。宗助はこの問にもだいぶ痛い思をした。

その晩はまた御米と小六から代る代る鎌倉の事を根掘り葉掘り問われた。

「氣楽でしょうね。留守居るすいも何もおかないで出られたら」と御米が云つた。

「それで一日いちんちいくら出すと置いてくれるんです」と小六が聞いた。「鉄砲でも担かついで行つて、猟りようでもしたら面白かろう」とも云つた。

「しかし退屈ね。そんなに淋さむしくつちや。朝から晩まで寝ていらつしやる訳にも行かないでしょう」と御米がまた云つた。

「もう少し滋養物が食える所でなくつちやあ、やつぱり身体からだによくないでしょう」と小六がまた云った。

宗助はその夜床の中へ入って、明日あしたこそ思い切って、坂井へ行つて安井の消息をそれとなく聞き糺ただして、もし彼がまだ東京にいて、なおしばしば坂井と往復があるようなら、遠くの方へ引越してしまおうと考えた。

次の日は平凡に宗助の頭を照らして、事なき光を西に落した。夜よに入いって彼は、

「ちよつと坂井さんまで行つて来る」と云い捨てて門を出た。

月のない坂を上つて、瓦斯ガス灯に照らされた砂利を鳴らしながらくぐりど潜戸を開けた時、彼は今夜ここで安井に落ち合うような万一はまず起らないだろうと度胸を据すえた。それでもわざと勝手口へ回つて、御客来ですかと聞くことは忘れなかった。

「よくおいでです。どうも相変らず寒いじゃありませんか」と云う常の通り元氣の好い主人を見ると、子供を大勢自分の前へ並べて、その中の一人と掛声をかけながら、じゃん拳をやつていた。相手の女の子の年は、六つばかりに見えた。赤い幅のあるリボンを蝶々のように頭の上にくつつけて、主人に負けないほどの勢で、小さな手を握り固めてさつと前へ出した。その断然たる様子と、その握り拳の小ささと、これに反して主人の仰山らしく大きな拳骨が、対照になつて皆の笑を惹いた。火鉢の傍に見ていた細君は、

「そら今度こそ雪子の勝だ」と云つて愉快そうに綺麗な齒を露わした。子供の膝の傍には白だの赤だの藍だのの硝子玉がたくさんあつた。主人は、

「とうとう雪子に負けた」と席を外して、宗助の方を向いたが、

「どうですまた洞窟^{とうくつ}へでも引き込みますかな」と云つて立ち上がった。

書斎の柱には、例のごとく錦の袋に入れた蒙古刀^{もうこうとう}が振^ぶら下が^さつていた。花活^{はないけ}にはどこで咲いたか、もう黄色い菜の花^{さい}が挿^さしてあつた。宗助は床柱の中途を華^{はな}やかに彩^{いろ}どる袋に眼を着けて、「相変らず掛かつておりますな」と云つた。そうして主人の気色^{けしき}を頭の奥から窺^{うかが}つた。主人は、

「ええちと物数^{ものずき}奇過ぎますね、蒙古刀は」と答えた。「ところが弟の野郎そんな玩具^{おもちゃ}を持つて来ては、兄貴^{ろうらく}を籠絡^{ろうらく}するつもりだから困りものじゃありませんか」

「御舍弟^{ごしやてい}はその後どうなさいました」と宗助は何気ない風を示した。

「ええようやく四五日前帰りました。ありや全く蒙古向ですね。」

御前のような夷狄いできは東京にや調和しないから早く帰れつたら、
わたし

私もそう思うつて帰つて行きました。どうしても、ありや万里
の長城の向側むこうがわにいるべき人物ですよ。そうしてゴビの沙漠さばくの中
で金剛石ダイヤモンドでも捜していればいいんです」

「もう一人の御伴侶おつれは」

「安井ですか、あれも無論いつしよです。ああなると落ちつい
ちやいられないと見えますね。何でも元は京都大学にいたこと
もあるんだとか云う話ですが。どうして、ああ変化したもので
すかね」

宗助は腋わきの下から汗が出た。安井がどう変つて、どう落ちつ
かないのか、全く聞く気にはならなかった。ただ自分が主人に
安井と同じ大学にいた事を、まだ洩もらさなかったのを天祐てんゆうのよ
うにありがたく思つた。けれども主人はその弟と安井とを晚餐ばんさん

に呼ぶとき、自分をこの二人に紹介しようと申し出た男である。辞退をしてその席へ顔を出す不面目はずみだけはやつと免まぬかれたようなものの、その晩主人が何かの機会はざみについて自分の名を二人に洩もらさないとは限らなかつた。宗助は後暗い人の、変名へんみょうを用いて世を渡る便利を切に感じた。彼は主人に向つて、「あなたはもしや私の名を安井の前で口にしましませんが」と聞いて見たくて堪たまらなかつた。けれども、それだけではどうしても聞けなかつた。

下女が平たい大きな菓子皿に妙な菓子を盛つて出た。一丁の豆腐ぐらいな大きさの金玉糖きんぎょくとうの中に、金魚が二疋透すいて見えるのを、そのまま庖丁ぼうちようの刃を入れて、元の形を崩くずさずに、皿に移したものであつた。宗助は一目見て、ただ珍らしいと感じた。けれども彼の頭はむしろ他の方面に氣を奪われていた。すると主人が、

「どうです一つ」と例いづもの通りまず自分から手を出した。

「これはね、昨日きのうある人の銀婚式に呼ばれて、貰もらつて来たのだから、すこぶるおめでたいのです。あなたも一切あやかぐらい肖あやつてもいいでしょう」

主人は肖もとりたい名の下に、甘あまた垂るい金玉糖きんぎょくとうを幾切ほおぼか頬張ほおつた。これは酒も呑み、茶も呑み、飯も菓子も食えるようにできた、重宝で健康な男であつた。

「何実を云うと、二十年も三十年も夫婦が皺しわだらけになつて生きていたつて、別におめでたくもありませんが、そこが物は比較的なところだね。私はいつか清水谷の公園の前を通つて驚ろいた事がある」と変な方面へ話を持つて行つた。こういう風に、それからそれへと客を飽あかせないように引張つて行くのが、社交になれた主人の平生の調子であつた。

彼の云うところによると、清水谷から弁慶橋へ通じる泥溝どぶのような細い流の中に、春先になると無数の蛙かえるが生れるのだそうである。その蛙が押し合い鳴き合つて生長するうちに、幾百組か幾千組の恋が泥渠どぶの中で成立する。そうしてそれらの愛に生きるものが重ならないばかりに隙間すきまなく清水谷から弁慶橋へ続いて、互に睦まじく浮いていけると、通り掛りの小僧ひまじんだの閑人が、石を打ちつけて、無残にも蛙の夫婦を殺して行くものだから、その数がほとんど勘定し切れないほど多くなるのだそうである。「死屍累々ししるいゐいとはあの事ですね。それが皆夫婦みんななんだから實際氣の毒ですよ。つまりあすこを二三丁通るうちに、我々は悲劇にいくつ出逢うか分らないんです。それを考えると御互は実に幸福でさあ。夫婦になつてるのが悪にくらしいって、石で頭を破わられる恐れは、まあ無いですからね。しかも双方ともに二十年も三

十年も安全なら、全くおめでたいに違ありませんよ。だから一切ぐらい肖っておく必要もあるでしょう」と云つて、主人はわざと箸で金玉糖を挟んで、宗助の前に出した。宗助は苦笑しながら、それを受けた。

こんな冗談交りの話を、主人はいくらでも続けるので、宗助はやむを得ず或る辺までは釣られて行つた。けれども腹の中はけつして主人のように太平楽には行かなかつた。辞して表へ出て、また月のない空を眺めた時は、その深く黒い色の下に、何とも知れない一種の悲哀と物凄さを感じた。

彼は坂井の家に、ただいやくも免かれんとする料簡で行つた。そうして、その目的を達するため、恥と不愉快を忍んで、好意と真率の氣に充ちた主人に対して、政略的に談話を駆つた。しかも知ろうと思う事はことごとく知る事ができなかった。己

れの弱点に付いては、一言も彼の前に自白するの勇氣も必要も認めなかつた。

彼の頭を掠めんとした雨雲は、辛うじて、頭に触れずに過ぎたらしかつた。けれども、これに似た不安はこれから先何度でも、いろいろな程度において、繰り返さなければすまないような虫の知らせがどこかにあつた。それを繰り返させるのは天の事であつた。それを逃げて回るのは宗助の事であつた。

二十三

月が變つてから寒さがだいふ緩んだ。官吏の増俸問題につれて必然起るべく、多数の噂に上つた局員課員の淘汰も、月末までにほぼ片づいた。その間ぼつりぼつりと首を斬られる知人や

未知人の名前を絶えず耳にした宗助は、時々家へ帰つて御米に、
「今度はおれの番かも知れない」と云う事があつた。御米はそ
れを冗談とも聞き、また本気とも聞いた。まれには隠れた未来
を故意に呼び出す不吉な言葉とも解釈した。それを口にする宗
助の胸の中にも、御米と同じような雲が去来した。

月が改つて、役所の動揺もこれで一段落だと沙汰せられた時、
宗助は生き残つた自分の運命を顧りみて、当然のようにも思つ
た。また偶然のようにも思つた。立ちながら、御米を見下して、
「まあ助かつた」とむずかし氣に云つた。その嬉しくも悲しく
もない様子が、御米には天から落ちた滑稽に見えた。

また二三日して宗助の月給が五円昇つた。

「原則通り二割五分増さないでも仕方があるまい。休められた
人も、元給のままにいる人もたくさんあるんだから」と云つた

宗助は、この五円に自己以上の価値をもたらし帰つたごとく満足の色を見せた。御米は無論の事心のうちに不足を訴えるべき余地を見出さなかつた。

翌日あくるひの晩宗助はわが膳ぜんの上に頭かしらつきの魚うおの、尾を皿の外に躍おどらす態さまを眺めた。小豆あずきの色に染まつた飯の香かおりを嗅かいだ。御米はわざわざ清をやつて、坂井の家に引き移つた小六ころうを招いた。小六は、

「やあ御馳走ごちそうだなあ」と云つて勝手から入つて来た。

梅がちらほらと眼に入いるようになった。早いのはすでに色を失なつて散りかけた。雨は煙るやうに降り始めた。それが霽はれて、日に蒸むされるとき、地面から、屋根からも、春の記憶を新にすべき湿気がむらむらと立ち上のぼつた。背戸せどに干した雨傘あまがさに、小犬がじゃれかかつて、蛇じゃの目の色がきらきらする所に陽炎かげろうが

燃えるごとく長閑のどかに思われる日もあつた。

「ようやく冬が過ぎたようね。あなた今度こんだの土曜に佐伯さえぎの叔母さんのところへ回つて、小六さんの事をきめていらつしやいよ。あんまりいつまでも放つておくと、また安さんやすが忘れてしまうから」と御米が催促した。宗助は、

「うん、思い切つて行つて来よう」と答えた。小六は坂井の好意で、その書生に住み込んだ。その上に宗助と安之助が、不足のところを分担する事ができたらと小六に云つて聞かしたのは、宗助自身であつた。小六は兄の運動を待たずに、すぐ安之助に直談判じきだんぱんをした。そうして、形式的に宗助の方から依頼すればすぐ安之助が引き受けるまでに自分で埒らちを明けたのである。

小康はかくして事を好まない夫婦の上に落ちた。ある日曜のひる午宗助は久しぶりに、四日目のあか垢を流すため横町の洗場に行つ

たら、五十ばかりの頭を剃つた男と、三十代の商人らしい男が、
ようやく春らしくなつたと云つて、時候の挨拶を取り換わして
いた。若い方が、今朝始めて鶯の鳴声を聞いたと話すと、坊さ
んの方が、私は二三日前にも一度聞いた事があると答えていた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「ええ、まだ充分に舌が回リません」

宗助は家へ歸つて御米にこの鶯の問答を繰り返して聞かせた。

御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、

「本当にありがたいわね。ようやくの事春になつて」と云つて、
晴れ晴れしい眉を張つた。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪り
ながら、

「うん、しかしまたじき冬になるよ」と答えて、下を向いたま
ま鋏を動かしていた。

後註

- 一 「態」は底本では「熊」

底本：「夏目漱石全集 6」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和 63）年 3 月 29 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：高橋知仁

1999 年 4 月 22 日公開

2007 年 3 月 8 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。